



ACKU_news 49

(2025 年度)



2025年ACKU定時総会（4月19日、大阪凌霜クラブにて）

（前列左から、居谷名誉会員、酒井先生、山田会長、瀬野会員、山形名誉会員、
中列左から、石川特別会員、野邊理事、森長監事、大竹口副会長、侯会員、程部員
後列左から、松村会員、長谷川事務局長、岩井理事、坂本淳会員、
長屋部員、石川部員、後藤部員、藤原部員）

目次

第一章 巻頭言	会長 山田 健	1
第二章 現役ネパール遠征	山岳部	2
第三章 理事会関係		
（1）新山岳部副部長の紹介－酒井先生	山岳部副部長 酒井裕規	7
（2）甲南山岳部創部 100 周年記念式典の報告	会長 山田 健	8
（3）岳人での「山と人」及び「ACKU-news」の紹介の件	副会長 大竹口誠治	9
第四章 追悼		
（1）北口博教名誉会員	川端 充	1 1
（2）山戸昌会員	福本桂三	1 3
（3）武田則明会員	田中俊甫、柏田紘一	1 4
（4）高屋義治会員	田中俊甫、居谷千春、豊田寿夫	1 7
第五章 紀行・随想・活動報告		
（海外編）		
（1）2025 年秋 ランタンヒマール・ヤラピーク登山	酒井利直	2 0
（2）最近の中国登山協会	山田 健	2 5
（3）第 6 回 グレートヒマラヤトラバース（日本山岳会 120 周年記念事業）	吉井 修	2 6
（4）再び 200 マイルの旅へ	大滝義郎	3 2
（国内編）		
（1）一ノ倉のふるさとへ－29 年ぶりの第Ⅱルンゼ・ザッテル越え 一高木正孝（遺稿）	豊田寿夫	3 8

(2) 記憶に残る 1000 山登山の一つ 鈴鹿の天狗堂 988m	井上達男	4 2
(3) 十勝岳・赤岳・黒岳登山報告 (2025. 7. 13~7. 17)	大竹口誠治	4 5
(4) 積雪期の甲斐駒ヶ岳及び残雪期の水晶岳	山本恵昭	4 7
(5) 東京支部新年会	小林 功	5 0
(6) 映画と本の紹介 (田部井淳子氏)	大竹口誠治	5 1

第六章 例会山行報告

(1) 第 2 5 8 回 氷ノ山千本杉山行記録	山田 健	5 3
(2) 第 2 5 9 回 氷ノ山千本杉ヒュッテ整備例会報告	山田 健	5 6
(3) 第 2 6 0 回 雷鳥沢サマーキャンプ例会報告	山田 健	5 7
(4) 第 2 6 1 回 海外登山研究会&忘年会	長谷川浩	6 1

第七章 山岳部活動報告(2025 年度)

山岳部 6 2

第八章 事務局報告(総会・会員近況報告・理事会・会計・予算)

(1) 総会・会員近況報告・理事会	事務局	7 2
(2) 会計・予算	事務局	7 7

編集後記

大竹口誠治 8 0

私たちが行っている「登山」という行為は、野球やサッカーなどといった一般のスポーツとは少し性質が異なるところがあるといえます。単に山に登って同じところに帰ってくるだけ、そこには勝ちも負けもない、観客もいない、ただ苦しい歩行を続けるといったまことに地味な行為です。観客がいて応援してくれる人がいる、運が良ければチアリーダーもいるといった一般のスポーツ系部活動の華やかさとは違って、山岳部活動にはそのようなものがほとんどありません。大学生といった青春真っ只中の人たちが華やかさというものに引かれやすいのは当然のことで、昨今の大学山岳部の衰退、クライミング競技だけの名ばかり山岳部といった現象に表れています。ただし、そのような地味な山岳部の活動の中で唯一大きな例外があります。それが海外登山に行くことです。この時ばかりは山岳部が非常に注目を集めます。例えば、1986年のクーラカンリ初登頂の時には、全国版新聞1面写真入りで報じられましたし、テレビでも2時間の全国放送がありました。放送の中では、ほとんどの人たちが見たこともない（クーラカンリは未踏峰だったので誰も見たことがないのは当然）ヒマラヤの景色や圧倒的なスケールのなか登攀していく登山隊員の奮闘に、見ていた人たちをとっても興奮させたものでした。このように海外登山は私たちの活動を外の世界に向かって大きくアピールできる機会であると言えます。あるいは我々にとってオリンピックに匹敵するようなイベントかもしれません。このような海外登山を実行し外部へアピールすることにより、部員数も増えて活動内容も充実していくことも期待できます。事実、クーラカンリやロプチン遠征の後には海外登山にあこがれた多くの若者が山岳部にやってきました。逆に毎年の国内の合宿や山行をローテーションのように続けるだけでは部としての盛り上がりが少なく、結果的に衰退していくことになるのでしょう。

さて、神戸大学では創部百周年の記念登山として実施した2015年のバダリ遠征から早10年が経ちました。この間、他大学の山岳部が多数消滅してきたのに対し、わが神戸大学山岳部は何とか10名内外の部員数を確保できていました。しかし、大学山岳部の宿命として常に部員消滅の危機をはらんでいます。ですから山岳会理事会としても、部活動の活性化のために年1回は海外登山研究会を開催して、我が会の海外登山の実績やその意義を伝え、現役部員たちの記憶を途切れさせない努力をしてきました。しかし、これまでは海外登山の実態を理解してもらえても、なかなか海外へ行こうというところまでは至らず、私の感覚ではセルモーターを一生懸命に回してももうちょっとというところでエンジンがかからないといった状況でした。そういった中で、ようやく2025年になって現役だけでネパール登山の合宿をしたいと希望が上がってきました。理事会では早速に応援体制を作り、登山対象となる山の検討や計画づくり、1983年に同様に現役だけで実施したネパール・パルチャモ峰登山の資料提供などを行ってきました。さらに学生にとって切実な課題である資金面でもできるだけサポートを行うことを決め、すでに会員の皆様からご寄付いただいたヘリテージ基金からの拠出、会員への募金の呼びかけを行いました。それから忘れてはならないこととして、2025年秋に実施されたHNA（ヘルプ・ネパール・アソシエーション）のヤラ・ピーク登山隊（酒井利直隊長）に現役学生1名（吉武君）を参加させていただいたことが非常に大きな支援となったと思います。それによって、多くの情報と経験が得られました。これら山岳会員やHNAからの支援が、錆びて回らなかったエンジンにオイルを注ぎ、現役諸君の熱意がガソリンパワーとなってエンジンが動き出したように思えます。今回のネパール合宿の概要は別紙計画書のとおりであり、登山対象となっているダンプス・ピーク（右の写真）は対象としては未踏峰でもなく、あまり際立った山ではないものの、今回の若い人たちの経験により将来においてさらに規模の大きな遠征計画に発展していってくればと考えています。

この巻頭言の原稿を書いているのは2026年1月ですので、まだこの計画の準備が進められている段階です。この後3月上旬の出発まで首尾よく漕ぎつけられることを祈りつつ……



第二章 現役ネパール遠征

2026年 神戸大学山岳部ネパール・ヒマラヤ登山隊

ダウラギリ山群ダンプスピーク登山計画

(Dhaulagiri, Dhampus Peak 6035m)



ダウラギリ山群ダンプスピーク(6035m、ピーク右端)

神戸大学山岳部

ダウラギリ山群ダンプスピーク登山計画について

ご挨拶

神戸大学山岳部・山岳会は創部以来 110 年にわたり、国内登山と海外登山に加えて、学術調査、研究を世界各地で行ってまいりました。1958 年のアレナレス峰登頂を皮切りに、1976 年にシェルピカンリ、1986 年にクーラカンリ峰に登頂しました。その後はチベット地域を中心とした海外遠征を継続的に実施し、2009 年にはカンリガルポ山群ロプチン峰に登頂し、登山のみならず学術調査や地質研究においても様々な成果をあげてまいりました。

このように神戸大学山岳部・山岳会は創部以来、未知への困難、世界に挑戦することを理念に多くの未踏峰を目指してきましたが、昨今の国際情勢や社会の変化、コロナ禍などにより、2015 年を最後にして海外での活動は難しくなりました。

今回のネパール・ヒマラヤ遠征の大きな目的は、海外登山の経験と知識、感動を次の新しい世代にも得てもらうことにあります。本計画は神戸大学山岳部における海外での登山活動を再び積極的かつ継続的なものとするための重要な第一歩と考えております。

また、我々が持つネパールでの登山活動におけるコネクションも、これまでチベット地域で築いてきたもののように深く強くする必要があります。この遠征を通してネパールとの交流を深め、新たな信頼関係を構築することもまた一つの目標であり、今後の海外遠征に対する視野を広げる大きなチャンスになると考えております。

何卒、本計画の趣旨をご理解いただき、皆様のご支援賜りますようお願い申し上げます。

2026年 1月

神戸大学山岳部長 神戸大学工学部教授 小池 淳司

計画概要

1. 隊の名称

2026年 神戸大学山岳部ネパール・ヒマラヤ登山隊

2. 登山対象

- ・ ダンプスピーク (Dhampus Peak, 6035m)

ネパール中部ダウラギリより北東に続く稜線上にある。別名タパピーク (Thapa Peak)。ダウラギリはじめニルギリ、アンナプルナを一望できる。ネパール登山協会によるトレッキングピークには指定されていないが、それらと同等の技術的難易度があり、また多くの登山家に登られてきたピークである。

3. 目的

- ・ ネパールヒマラヤ・ダウラギリ山群ダンプスピークへの全員登頂
- ・ 山岳部内における海外、高所登山経験者の育成
- ・ ネパール登山界との交流と関係構築

4. 日程

3月9日～3月31日

5. 隊の構成

- ・ 隊長 長屋 徹也(22)
- ・ 副隊長 吉武 裕登(21)
- ・ 隊員 程 研塚(23)、藤原 暖己(20)、石川 裕鳳(20)、
藏本 凌太郎(19)、濱田 颯太(19)、水谷 太一(19)
- ・ 現地エージェント Janakchuli Treks Pvt. Ltd.

6. 予算

- | | |
|-------------|------------|
| ・ 渡航費 | 1 2 0 万円 |
| ・ 現地費用 | 4 0 0 万円 |
| ・ 保険料 | 7 0 万円 |
| ・ 装備・食料・医療品 | 2 0 万円 |
| | 計 6 1 0 万円 |



カトマンズからマルハまで（図右上）、マルハから頂上付近のルート図

ご寄付のお願い

この登山隊の趣旨を何卒ご理解、ご賛同いただき、ご多用の折り誠に恐縮ですが、お力添え賜りますようお願い申し上げます。ご協力いただきました方には登山後報告書を送付させていただきます。

募金目標 100万円

募集要項 一口 1万円

送金方法 次の口座にお振込にてご送金願います。

三井住友銀行 灘支店 普通預金 4346414

コウベダイガクサンガクブ

連絡先（留守本部）

天明 昴 TEL：070-6998-7366

Mail：m45_pleiades@outlook.jp

神戸大学山岳部ネパール合宿への募金の依頼について

令和 8 年 2 月

神戸大学山岳会会員各位

神戸大学山岳会長 山田 健

頌春の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。平素は山岳会の運営にご協力いただき、厚く御礼申し上げます。

さて、神戸大学山岳会・山岳部において以前より数回にわたり海外登山研究会を開催し、海外登山の機運の醸成を図ってまいりました。その結果、山岳部では本年 3 月、現役学生によるネパール合宿を実施する運びとなりました。計画の概要は添付した計画書のとおりとなっております。山岳会においてもこの計画にできるだけ支援を行い、将来においてさらに規模の大きな遠征計画に結びつけていきたいと考えています。

このネパール合宿の費用としておよそ 6 百万円と見積もっており、学生にとっては少なくない金額となっております。山岳会へリテージ基金からの支援も予定しています。それに加えて会員の皆様からの支援もお願いしていきたく、この度の募金依頼に至ったところです。

昨今では多くの他大学山岳部の廃部が進んでいる中、神戸大学山岳部では部員数十数名で活発に活動していることはまことに喜ばしいことであり、彼らの頑張りにはできるだけ報いてやりたいところです。つきましては、何かと出費の多い折、誠に恐縮ですが山岳会員の皆様のご協力を賜りたくお願いいたします。

記

募金要領

目標額 100 万円

振込先 次の口座にお振り込み願います。

三井住友銀行 灘支店 普通預金 4346414 コウベダイガクサンガクブ

以上

第三章 理事会関係

新山岳部副部長の紹介

酒井 裕規・山岳部副部長（名誉会員）



リニアモーターカー試乗時の写真

この度、副部長に就任しました酒井裕規です。私は2014年度より本学に赴任し、学部・大学院で主に経営学関連の講義を担当しています。研究分野は交通経済・交通経営・地域経営という分野です。もう少し具体的に言うと、政府からの規制や関与を受けることが多い交通・公益事業における企業経営問題や地域における交通の役割や維持方策について経済学や経営学の理論を援用して研究しています。登山は自宅の近くにある再度山や須磨アルプスに妻と行く程度の初心者ですが、これも何かのご縁だと考え、登山に興味を持ち勉強させていただきます。神戸大学山岳会・山岳部の活動がより充実するようお手伝いさせて頂く所存です。どうぞよろしくお願いいたします

学歴

2003年 明治大学経営学部経営学科 卒業 学士（経営学）

2007年 神戸大学大学院経営研究科博士課程前期課程市場科学専攻 修了 修士（商学）

2011年 神戸大学大学院経営研究科博士課程後期課程市場科学専攻 修了 博士（商学）

職歴

2011年4月-2012年3月 鳥取環境大学人間形成教育センター 講師

2012年4月-2014年3月 公立大学法人鳥取環境大学経営学部経営学科 講師

2014年-現在 神戸大学大学院海事科学研究科 准教授

2022年4月-2023年3月 リーズ大学（英国）交通研究所 客員研究員

受賞歴

2012年 日本交通学会賞（論文の部）

甲南山岳部創部 100 周年記念式典の報告

会長 山田健

神戸大学山岳会とは長年親しく交流させていただいている甲南大学山岳部山岳会ですが、この度甲南山岳部（大学、高校、中学の山岳部）が創部されて以来百年が経過するというところで、甲南山岳会主催で記念式典と懇親会が10月4日甲南大学内で開催され約80人が参加いたしました。この会には来賓として甲南大学副学長をはじめ学外から神戸大学山岳会および関西学院山岳会の代表者が招待されましたので、代表して私が出席しました。

記念式典では、甲南山岳会の渋谷会長のあいさつ、副学長のあいさつの後、リレートークとして3人の方が過去の活動を報告されました。最初の牧野氏は黎明期から戦後までの歴史について語られ、田口一郎、二郎氏など当時日本を代表するような岳人を輩出し最先端の登攀記録を作っていたこと等が紹介されました。田口兄弟は高木正孝先生と太平洋戦争中にスイスアルプスで活動を一緒にされた方々です。二人目のリレートークは当会の会員でもある山本恵昭さんが何故か2009年の神戸大学・中国地質大学のロプチン峰初登頂の報告をされました。渋谷会長からたつての依頼でしぶしぶ承諾したと彼は言っていますが、甲南山岳会員の一個人の記録（甲南ではそのような位置づけになっている）としては際立っていたということでしょうか。井上達男隊長が以前作られたスライドを使って写真が紹介されましたが、私は懐かしく見ていました。3人目のトークの阿部氏もアフリカ・ケニア山の個人山行の報告となっていました。式典の最後に南里氏から「神々の山々から人々へ・山にまつわる世界の歴史」と題して特別講演がありました。いきなり映画「天地創造」のノアの箱舟の動画や、「十戒」のモーゼの石版の動画が流れ、実際に同氏がアララト山やシナイ山に行かれた時の紹介がありました。

懇親会では、和やかな雰囲気の中立食パーティーが行われました。私も以前から雪見会などで顔なじみが多い甲南山岳会の皆様と懇談でき、退屈する暇もなく過ごすことができました。最後に武田元会長の指導で甲南山岳部部歌を合唱してお開きになりました。

甲南大学山岳部はここ十数年部員が不在で廃部（寸前？）になっていたところ、昨年奇跡的に2名の部員が入部し、今年も1年生が一人入部したということで復活しました。しかし指導する適当な人がいないため、高齢のOB会員が伝統をつなぐために頑張っておられます。関西学院でも部員が減少し、あわやゼロになるというときに、中島健郎君にあこがれて2名の部員が入ってきたことを聞きました。いったん途切れると山岳部の活動を復活させることは大変な努力が必要です。両大学にはもし神戸大学山岳部が協力できることがあれば言ってくださいと伝えておきました。

なお、当会からはお祝いと記念の絵画を贈りました。絵画については私の拙筆ですが、甲南山岳会が昭和7年に初登攀した前穂高北尾根IV峰正面壁甲南ルートに因んで初冠雪した奥又白谷の絵にしました。後日、渋谷会長からの礼状が来て、絵画は新しくできる部室に飾るということでした。



リレートークの山本恵昭さんの報告



会場に飾られた奥又白の絵

岳人での「山と人」及び「ACKU-news」の紹介の件

副会長 大竹口 誠治

既にACKU会員向けのメールでお知らせした通り、2025年11月14日付けの岳人2025年12月号（NO.942号）の「記録に残す」欄で神戸大学山岳会・山岳部の会報誌である「山と人」及び「ACKU-news」の紹介記事が掲載されました。

「山と人」及び「ACKU-news」は毎号、岳人編集部宛に送付している関係で取材依頼があったものです。

以下、岳人編集部からの取材の背景は以下の通りです。

「12月号では特集「アナログ登山を楽しむ」を企画しております。

紙地図の読み方などのアナログスキルの紹介、文学作品に登場する山の紹介などを予定しております。

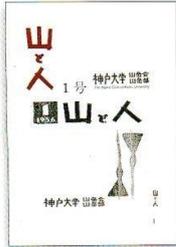
その中で、山岳会の会報誌文化を紹介するページの構成を考えております。そこで、編集部宛に『ACKU-news』をお送りいただいている神戸大学山岳会様に、会報誌に対する想い（冊子にして残す意味）や歴史、会報誌の作成方法などについて、会長の山田様や編集部員、山岳部の学生の方などにお話を伺いたく存じます。」

以上



ACKUが管理する水ノ山の千本杉ヒュッテ。建設50年を迎えた際の現役部員とOGOBの例会山行での1枚。『ACKU-news 37号』の表紙に掲載されている

『山と人』1号の表紙。Kindleで購入可能



受け継がれる海外遠征の志 神戸大学山岳会・山岳部

神戸大学山岳会・山岳部（以下ACKU）は、1915年に誕生した神戸大学の山岳部部員と、卒業生らによって構成される歴史ある山岳会である。創部当初からパイオニアスピリットのもと、バタゴニアやチリの未踏峰に登頂を果たしてきた。また、京都大学学士山岳会（ACKK）でカラコルムのチョゴリザに初登頂し、サルトロ・カンリ遠征にも参加された故・平井一正氏が64年に神戸大学工学部助教授として赴任し、66年に山岳部副部長に就任したことで活動の幅はさらに広がっていく。その後は中国地質大学（武漢）とも関係を深め、合同遠征を通じて登山活動を展開した。

目的に応じた会報誌の作成



1976年第二次カラコルム遠征時の集合写真。シュルピ・カンリ峰に初登頂

先鋭的な登山の軌跡は、「山と人」「ACKUnews」の2冊の会報誌に記録されてきた。「山と人」は1956年に創刊。ACKUの活動を「世に問う」目的で外部向けの会報誌として始まった。発行ペースは数年に一度。大きな遠征があった時に、その記録とその間の活動記録などをまとめている。一方「ACKUnews」は、内部に向けた会報誌だ。1975年に創刊し、海外遠征の計画や例会の報告などを随時会員に伝えることを目的に、年1回発行する。両誌とも制作後郵送で会員に届けられる。

59

紙とデータの共存

こうしたデジタル化に合わせて、過去の『山と人』は電子書籍化され、最新の『ACKUnews』はホームページでPDFデータを公開している。

それでもなお、冊子の発行も続ける理由を大竹口さんは「閲覧に少し手間がかかるデータよりも、すぐに開いて読める冊子に手取りやすいので、読み継がれやすいんです」と語る。

読み物としての面白さ

また大竹口さんは10年ほどチベット語を習っており、チベットに関する映画や書籍を会報誌上で紹介している。記録の羅列だけでなく、読み手の興味を引くよう、冊子としての面白さも意識している。

会報誌は毎年開催する総会でも存在感を発揮しているという。「会報誌の内容をきっかけに会話が広がることもありまして、また、過去の海外遠征の記録を見た山岳部の部員たちがOGOBに話を聞きに来たりします」ACKUでは2015年以降、



会報誌には、会長である山田健氏の絵画が掲載され、誌面を飾る。この絵画は「ACKUnews 40号」に掲載された。作品名「冬富士・忍野」

海外遠征は行っていない。未踏峰登山への意欲は今もあるものには至っていないのが現状だ。そのため、海外遠征を経験してきた世代とそうでない世代とは、会への所属意識にも少なからず差が生まれつつある。しかし、会報誌の発行はそうした世代間交流を促し、過去の会員たちの会や山に対する考えを共有することで、会のアイデンティティを伝え、愛着心を高めてくれる。これからの会員同士を繋ぐ重要なツールになっていくだろう。

第四章 追悼

困ったときの北口（先生）頼み

川端 充

1985年春、私は神戸大学に入学し山岳部に入部した。その頃、山岳部と山岳会はクーラカンリの本隊派遣に向けての準備が加速していて、事務局があった六甲台共用部室の2階はいつも人の出入りがあった。

隊員のメンバーの中に山岳部OBに混じって「北口ドクター」という肩書きの隊員がいた。そのうち誰かが、「北口ドクター」は社会人山岳会に所属していて「ドクターというより登山隊員としてサミッターを狙っているらしい」ということを聞きつけてきた。

北口ドクターは大倉キャンパスからランニングして六甲台に来てミーティングに参加していた。学生会館横の階段を駆け上がって、フェンスが時間外で閉まっているとみるや、背丈以上あるフェンスを躊躇なく乗り越えたという目撃談がまもなく寄せられた。「まじか」「北口やるなあ」と私ら1年生は笑いこぼしていたのだが、その後こんなにお世話になるとは思ってもみなかった。

クーラカンリの登山が終わって、現役中心で中国の大学と合同登山隊を組むことになった。誰か登山隊長を引き受けてくれる人はいないか…1987年の秋頃に私の同期の竹内や柴田一也が北口先生の研究室へ行って隊長の引き受けを頼んだ。

平井先生がこの後何回となく言う「困ったときの北口頼み」の始まりだった。

中国で登山するに際して、自分たち現役部員の実力不足は明らかだった。北口先生に相談すると1988年2月の八ヶ岳合宿に参加してくれることになった。一緒にテントで寝起きし、日が差さない凍てつく赤岳西壁でロープを結んだ。核心部のワンムーブ…「先生行きますよ」と声をかけると、「おお！」と返事が帰ってきた。先生の「おお！」は「よっしゃ、行け」の意味だ。

極地法のタクティクスを、クーラカンリを参考に考えていると「わしは今回の登山は全員登頂を目指すもんじゃない」と言い、極地法のタクティクスは一蹴された。頂上へのルートも堀や武智が現地を見て断念するまで、北口先生は正面氷河を突破する直線的なルートを考えていた。最短のルートであれば全員登頂の可能性が高まると考えてのことだ。

1988年の夏は真砂沢にきて、登山隊メンバーと源次郎II峰長次郎谷側の側壁に新ルートを作りに行った。実際には誰かがピトンを打っていて新ルートと称するのは微妙だったが、自分の目でラインを引くことができた。なんとかなるもんだなと自信がついた。

チェルー山の登山隊長としての活躍は、これまでの報告書に書いている通りだ。ヤクに運んでもらったリュックのショルダーがちぎれたときは、チベット人を怒鳴り散らしていた。無線機を開けてなかった船原さんにブチ切れて下山するよう命じた場面も忘れられない。

中国隊員2人に登頂を断念するよう説得することは、北口先生も辛かったし、テント越しに聞いていた私たちも辛かった。北口先生も報告書に書いている。

「隊長の仕事がなんたるものか体で理解してきたようである。特に今回の中国との合同登山の隊長は形だけでは務まらない。言語が十分伝わらないからよけいに、登山者としてのあらゆる面、いやその前に人間としての信頼関係が要求される。技術、体力と知恵それに人間そのものも試される」

合同登山が成功したのは、北口先生のおかげだと本当に思っている。

何か問題が起こると、私たちは迷いなく北口先生に相談した。先生は現地に来てくれて、一緒になって考えてくれた。こんなこともあった。当時は関西学生山岳連盟という寄り合いがまだあって、1987年はたまたま順番が回ってきた私が委員長を務めていた。どこの山岳部も人数が減少していてノウハウの継承がされていない状態だった。問題解決の手立てとして、搬出方法や救助法、墜落時の脱出法を学連で学べないかという声が上がった。

困ったときの北口頼み―。北口先生に講師になってもらおうと相談すると「教えるから、学生諸君への講習は君らで行いなさい」というものだった。蓬莱峡で学連幹部が一日みっちり教えてもらった。シングル11ミリロープで登っていた各大学山岳部が、9ミリのダブルロープで登るようになったのはこの時からだ。

残念ながら卒業してからは御嶽への追悼登山だけしか山に行くことがなかった。2003年のルオニイ

峰の登山隊のことではミーティングに時々参加したが、隊員選定がなかなか捗らなかった。なんとか出発にこぎつけることができたが現地で隊員が雪崩に流されるなどし、結局登頂はならなかった。

「このまま登ったら誰か死ぬな、と初めて思った」と、数年後聞いた。北口先生からそんな話を聞くのは初めてだった。

先生は定年後、石徹白に別荘を構え、私は2008年に竹内杉本の夫婦、香山天野の夫婦と押しかけた。薪ストーブが暖かい、こだわりが詰まった別荘だった。先生はテレマークスキーを練習していると話し、何度か小屋横の斜面でターンの練習をして見せた。

その影響もあったのかもしれない。私はテレマークスキーを練習し始めた。東京単身赴任が終わったら、会社の仕事もひと段落するだろう。そうしたら北口先生と白山や石徹白の雪山をテレマークで滑ろうと勝手に考えていた。訃報を聞いたのはそんな頃だった。

もう北口先生と一緒に山に登ったり、酒を飲んだりできないのが残念でならない。でも、コールしたら「おお！」と答えてくれそうな気はしている。



前列左から、川端、竹内、北口先生、後列左から、堀、武智



登山後に上海に向かっている途中。左から武智、川端、輸送などで尽力して頂いた地質鉦山部の李連軍氏、杉本、北口先生。



チェルー山登山前の集合写真



チェルー山登山後の集合写真



北口先生近影（2018年頃）

昨年亡くなられた山戸昌さんの思い出

福本桂三

私が入部した時山戸さんが何を思ったのか福本これを使えと 仙台名工山内一郎のピッケルを私にくださいました。今でも覚えています。NO159 と刻印されていました。磨けば底光りするまさしく名刀のような肌触りで、現役4年間私の山行のパートナーでした。特に一年生の春山 滝谷の第二尾根を豊田さんと登った時、青木山内さん遭難後村上と二人で北穂小屋から穂高小屋まで歩いた時、そして遭難の第一報を豊田さんと一緒に雪崩を避けて真夜中のザイテングラートを下り、上高地の帝国ホテルの越冬小屋の木村さんの電話を借り（なぜか今名前を思い出しました）に神戸の登山本部へ第一報を入れた時も肌身離さず持っていました。

卒業後何故か山戸さんがあのピッケル返してくれといわれた時、恋人を取り上げられたような断腸の思いでお返ししました。今でもご遺族がお持ちでしょう。

武田則明氏を悼む

同期の田中俊甫

令和7年11月7日付けの神戸新聞夕刊の投書欄に、武田則明氏に関する記事が掲載されており、後輩の田中信行氏が山岳会事務局に確認をとられて、山岳会員皆に知らされた。

武田氏はじめ我々10回生は、1958年（昭和33年）入学。当時、山岳ブームでもあり、新入生だけで16名もいた。それに1年半は教養学部で、姫路分校と御影分校に分かれ、その後は、経営・経済・法学部は六甲台、理学部・文学部は御影、教育学部は赤塚山、工学部は長田学舎と典型的な「タコ足大学」であり、武田氏は工学部建築学科、私は教育学部で、活動も一緒に行動することも困難であった。だから、武田氏と共にトレーニングしたり、共に山行したりしたこともあったが、近頃のぼけもあり記憶は乏しい。

2000年（平成12年）神戸大学氷の山体育所（千本杉ヒュッテ）の増改修工事を武田氏が建設委員長になり設計・アイデアを組み入れて実行してくれた。特に小屋入り口前に能舞台のような巨大なベランダが造られたのはユニークであった。

また、彼は、「港まち神戸を愛する会」の会長を務め、旧兵庫県庁などの神戸の近代建築の保存等、産業遺産の調査等にも取り組んでいた。2010年（平成22年）には、神戸っ子を驚かせ、元気づける人に贈られる「第20回 ロドニー賞」を授与された。（ロドニーとは、慶長3年（1868年）神戸開港の際、祝砲を放って神戸の人々を驚かせたイギリス艦隊旗艦の名前）

武田氏は、後年、大学の先生にもなったと聞く、少々大きな体躯で、いつも笑顔で人気があっただろうと思われる。ご冥福を祈ります。



氷ノ山山小屋再建建設中の氷ノ山山頂にて

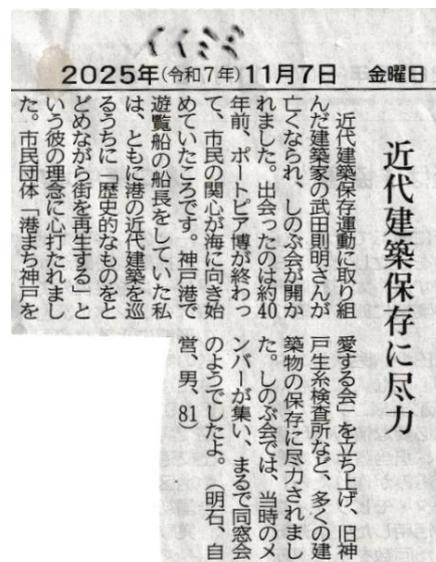


左から武田氏、田中俊甫氏、柏田氏、鷺尾氏



岡市敏治氏のクーラカンリ峰10回生同期壮行会
（1985年7月20日）

前列左から和田氏、武田氏、田中俊甫氏、
後列左から西戸氏、山形俊二氏



神戸新聞夕刊の投書欄

武田則明君の仕事

柏田紘一編

1958年(昭和33年)山岳部新入学部学生(10回生)は、田中俊甫君の記録によると16名在籍していた。卒業生名簿によると8名になっていた。

和田正文君(1993年、平成5年9月逝去)、宇田宏成君(2010年、平成22年10月逝去)、西戸勲君(2012年、平成24年10月逝去)の3人が亡くなっている。

この度、2025年、令和7年4月に武田則明君が亡くなったとの知らせがあった。神戸大学は入学後1年半の教養課程があり、御影、姫路の分校に分かれていた。そのせいもあり、各メンバーの行き来は、あまりなかった。合宿が交流の場だ。だが、当時は人数が多く、合宿での交流も充分、出来なかった。

千本杉ヒュッテの改修は、1998年5月30日に始まり、2000年10月2日に神戸大学へ引き渡された。

千本杉ヒュッテ改修委員会の構成

建設委員会(改修計画、設計、見積り、施工計画など改修工事にかかる事項)

委員長 武田則明

委員 横山千秋、高田誠、林市雄、壺阪祐三、居谷千春、長谷川浩、大滝義郎

顧問 力久浩治(学生課)、中村正孝(ヒュッテ管理人) (以下略)

(以下、山と人17号94ページより)

増改築工事報告書(千本杉ヒュッテ改修委員長 武田則明) (ACKUニュース27号を再掲)

1998年1月12日に金井良碩氏からファックスを頂き、私が千本杉ヒュッテの改修計画に参加することとなった。私自身、神戸大学を卒業して以来、神戸大学山岳会にご無沙汰していた。その私に声をかけてくれたことに感謝している。

このヒュッテは私が大学の四回生のときに竣工した建物である。今年2001年で竣工40周年になる。厳しい自然環境の中で良くぞ耐え抜いたと思う。屋根外壁ともに小波鉄板でできているので決して贅沢な仕上げとはいえない。貧乏な山岳会の持ち物としてふさわしい小屋である。大勢の学生達が同時に泊まれるようにできている。したがって外から見たよりも大きく合理的にできている。

この年の10月24～25日に調査登山をした。氷ノ山は全国でも有名な豪雪地であるが、しっかりとした大きな断面の木が柱梁材として使われている為に構造材はびくともしていない。ただし土台が一部腐り、それを支える玉石が動いて不同沈下していた。それは小屋の西北側の土が一部崩れ土台が半部以上、土に埋まった状態にあったからである。もちろん窓や金物がやられて戸締りは大変であるが、たいしたことはない。台所および土間部分のコンクリートが痛んでおり、便所が暗く溜めます式となっているために扉が少し痛んでいるが、十分に使える。ただし、いずれは別棟に離して建て、大きな浸透枿を掘って汚物を溜め、浸透させる。できうれば、水を溜め水洗便所とすれば快適に利用できる。

以上をもとに、土台の腐った部分を取り替え、小屋周辺の土を掘って溝の状態にし、さらに土台に防腐剤を塗って腐らないようにした。また、台所の水周りを整理し、一部部屋が暗いので窓を設け、土間にコンクリートを打設することで補修は完了する。さらに、一部ストーブを撤去し、囲炉裏とフード及び室内を通して煙突を設けた。排気が計画通りに流れないので部屋中煙だらけになるが、この改善が課題である。

<中略>

2000年7月29日から8月6日の9日間、(業者を含め)約50人のボッカ隊が集まり、約5トンの荷物を担ぎ上げた。私も学生時代以来久しぶりのボッカであった。25KGのセメント袋をふうふう言ってボッカしていると、現役は2袋担いでいた。私の倍である。「俺も現役のころはそれくらい担いでいた」などと考えていたら、私が1往復する間に彼らは2往復していた。考えてみれば私の4倍運んでいたことになる。「若いって良いな」とつくづく思った。

<後略>

竣工式典

日時：2000年9月30日

会場：神戸大学氷ノ山体育所（千本杉ヒュッテ）

式次第：(略)

出席者 来賓、大学関係者、業者
会員 平井会長他42名

前日からの泊り込みで、午前の会は出席。午後は氷ノ山登山。散会で下山。下山後、それぞれのルートで散会。私達神戸のメンバーは車で帰宅。夜に神戸についた。

竣工式の日と同じ神戸市ということで山登りを一緒した。ふもとからヒュッテまでだ。久しぶりの山登りなので、ピッチもあまりあがらなかった。ヒュッテが近くなったところに、武田氏が、「私はもう少しゆっくり行くから先に行ってくれ」との話があった。それならということで少しだけ先に行った。ヒュッテについて少したって追いついてきた。

次の山頂に行った時は一緒に行った。下りも同じようなペースでヒュッテに帰ってきた。お互いに普段山登りをしていないので少しペースが落ちたようだった。

その日の帰り神戸に近づいた折、武田氏に「すぐ家に帰るか」と聞いたら「いつもよる所があるので、そこによって帰る」ということで別れた。

武田則明君は神戸市の名士であり、あちこちで武田君らしい仕事をしてきた。記念碑も数点ある。また神戸市で仕事をした人に与えられる賞もいただいている。

神戸新聞の「イイミミ欄」に記載されているように、(この欄は市民からの投稿でなりたっている)「港まち神戸を愛する会」を立ち上げている。

少し前のことと思うが、東郷賢治兄が、「最近、武田さんはどうしてる？」と聞かれたことがある。調べてみると最近では年賀状も行き来がなく「連絡がついていないようです」と返事した。家の方とも連絡がうまくとれないとのことで、しばらく東郷兄があたってくれた。しばらくして東郷兄から、「本人は無事に暮らしている」との連絡が入った。家が近いということで東郷兄が何度も行ってくれ、連絡がついたということだった。

2025年(令和7年)4月になくなったという新聞記事を見たとのこと。神戸を離れて2年ほどたつので情報が入ってこない。

新聞記事によると、近代建築保存に取り組んだ建築家の武田則明さんが亡くなられたとあった。「歴史的なものとどめながら街を再生する」という理念で市民団体「港まち神戸を愛する会」を立ち上げ、旧神戸生糸検査所など、多くの建築物の保存に尽力されたと記載されていた。

(追記)

1960年(昭和35年)3月16日～28日、南アルプス春山縦走隊ということで、村上勝リーダーのもと、メンバー久保谷、宇田、武田があがっている。二軒茶屋から入山し、東岳、中岳、前岳を經由して赤石岳を登頂。聖岳には日程の関係で断念と記載されている。山と人百年史による。

高屋義治氏を悼む

シェルピ・カンリ峰で一緒だった田中俊甫

高屋 義治氏は、令和7年11月23日 ご逝去されました。告別式は11月25日、川西火打ホールで行われ、弔辞は山本俊幸氏がよまれ、参列者で彼を偲びました。 謹んでご冥福をお祈りいたします。

彼は、学生時代、同学年の小林秀明君とよく宝塚駅近くの我が家に遊びに来てくれた。しばらく間をおいて1976年（昭和51年）神戸大学カラコルム遠征隊でシェルピ・カンリ峰を一緒に目指した。隊の行動では、テント間の荷揚げ、上へのルート工作など、2人1組が多かった。彼は25歳、私は35歳、私達は、ザイルパートナーだったが、私は高度障害でぶっ倒れたり、調子を崩したりして、彼の足を引っ張って迷惑をかけていた。

最終的には、井上・緒方パーティが登頂に成功した。私は勿論成功に歓喜したが、高屋氏に第二登でもさせてやってほしいと、隊長に頼むが聞き入れられなかった。彼に借りができて、それを返さなければならないと思っている内に、彼は逝ってしまった。

また、少し間をおいて、彼は、2010年（平成22年）より現在まで、NPO 法人 ヘルプ・ネパール・アソシエーション・ジャパンの理事として本会をリードしてくれて、なかなか辛辣な意見を発してくれた。それが無くなったのも淋しい。

2013年（平成25年）彼に講演を依頼したところ、演題は「葦編三絶（いへんさんぜつ）」竹に書かれた文章の竹片を綴じている葦（なめしがわの紐）が3回もすり切れるぐらい熟読すること。（「史記」の故事から）をしてくれた。その折、「この3年間の読書歴」を披露している。随分の読書家であることを知った。

またまた、仕事関係を通じての、随分のアイデアマンであること、随分の発明家であることも知った。

10年前ぐらいになるか、茅ヶ崎の方から大阪府能勢へ移ってきた。能勢には山岳会の仲間 和光広典氏がいる。和光氏は、能勢観光のガイドでボランティア活動したり、自給自足農法を取り入れた

り、「蓑庵」という建物を持ち、未来農園を目指している。その「蓑庵」を、「HNA」の「忘年会」会場に使用させてもらっていた。その時、必ず、高屋氏が手の込んだ料理を差し入れてくれた。なかなかの料理人でもあった。それを、もう味わうこともできないのは寂しい。

本当に、彼は他人を大事にして、紳士的で、素晴らしい人でした。もう少し長生きしてほしい。



三方五湖で遊ぶ

（前列真ん中 山本俊氏、右端丹波氏、中列右端 坂西氏、後列左から高屋氏、田中俊甫氏）

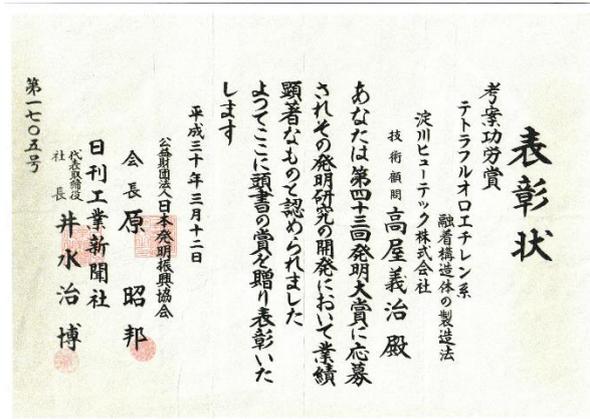


坂西俊一氏の墓参り（2022年夏）

（左から、河本氏、山口氏、高屋氏、居谷氏、田中俊甫氏）



左から古橋氏、高屋氏、鶴谷氏



高屋氏への考案功労賞の表彰状

高屋義治氏（20回生）を偲んで

居谷千春（22回生）

私が山岳部に入った時のリーダーシップはチーフリーダー山本俊幸さん、サブリーダーは木本義治さん（旧姓）、マネージャーは小林秀昭さんの3名であったが、なかなか厳しい代だと思われる。リーダーシップ3人はそれぞれが極めて個性的であったが、よく議論しよくまとまっていた。ヒマラヤ・カラコルムへの遠征を念頭に彼等の集大成の春山は黒部水晶岳をアタック目標として有峰方面から入山し太郎平のベースキャンプまでの物資の荷上げ、アタックキャンプ設営やサポートなどポーラメソッドの練習を兼ねて行い忘れられない山行になった。木本さんの指導でよく覚えているのは堡壘岩でのジッヘル練習だ、トラックのタイヤのようなものを担ぎあげて上から突き落としそれを確保するといった厳しいもので、麻の作業服のような上着を重ね着してザイルの熱に耐えていたことをいつも思い出す。通常の日行では、めしの際、小林秀昭さんとアルミの食器をスプーンで叩いて催促（ちゃんやかんや）、うるさいが賑やか、あの時代は結構歌も歌った。懐かしい。

現役時代では合宿を除く個人山行で一緒に行動したのは2年生春山の突坂尾根のみだったと思う。その時は宇奈月から尾根まで関電のトロッコでアプローチし猫又のトンネルをでたところで取り付くがトンネルの前で写真を撮った。その木本さんは後輩の私からみても可愛い（写真）。カラコルムの研究を始めてからは口はうるさいがなかなかの理論家で頼りになった。字体は独特だったが決して読めないということはなかった。部長や上の人には「それはですね〜」と説明を始める口調が彼らしく懐かしい。工学部化学工学科に属しており卒業後は淀川化成で随分ブイブイ言わせていたと思われる。出世ぶりからみてもなかなかのできる男だったと思われる。シェルピカンリ二次隊と一緒にだった。多分このところは田中俊甫副隊長がたくさん書かれるはずなので省略。ただベースキャンプあたりで「鉾を収めて」をテープに入れて持参したピアノ伴奏に合わせて絶唱したことが今でも思い出される。木本・広石・居谷がテントの前に一列に並び胸をドンと打って歌ったことが懐かしい。

その後は遠く離れていたが、双方が60歳近くなった頃、私が千葉東金で勤務していた頃、高屋さんも関東中心でエライさんの仕事で忙しく働いていたが、よく一緒に飲んだ。仕事が忙しいのでHNAの理事会の欠席は多かったが、来られた時はその博識ぶりを披露された。晩年までも化学科のご友人とよく飲まれておられたようだ。終の住処（ついのすみか）を能勢に定められた後、能勢在住の高校時代の私の友人とも親しくなり面白いところでご一緒した。

高屋さん（木本さん）を思い出そうとすれば、いろんな場面の様子が色々と臉に浮かんでくる数少ない方でした。本来ならばこの追悼文は小林秀昭氏亡き後、お互いの心を知り尽くしたリーダーシップのチーフリーダーの山本俊幸氏にも書いていただきたかったのですが彼も山岳会を辞めた身、不肖の部下が一文を書かせてもらいました。現役時代から色々世話になった先輩のご冥福をお祈りします。



突坂尾根取り付きの前、リーダー木本が抱負を述べます。(チャンヤカンヤ) 1972年3月



リーダーシップ仲間、小林秀昭氏(中)と(1972年3月春山、突坂尾根)

高屋義治氏を悼む ー関東での思い出

豊田寿夫

私は1973年夏に東京の団地から横浜市戸塚のドリームランドに隣接する神奈川県住宅公社の分譲アパートに引越した。5歳と3歳の幼児に加え赤ん坊を連れての引越し作業は大変だろうと、木本(後の高屋)君が手伝いに来てくれた。おかげで作業は夕方までに終わり、彼には引越し祝いの酒を飲んでもらった。後日談であるが、彼は団地から遊園地へ続く道路に入りその坂道を下ったのであるが、自転車のスピードが出すぎて坂下の車止めを飛び越してしまったと本人から聞いた。

彼がY化成の技術者として働き寮生活をしていたエリア(現在の横浜市営地下鉄立場付近)と当時私が子供3人を育て、東京に通うサラリーマンとしての生活圏は一部重なっていた。休日子供を連れ藤沢との間を流れる境川の方に遠出をして付近を歩くと、Y化成の工場の垣根越しに試作設備の前に立つ彼の姿を見たことがある。

1994年6月3-5日の谷川岳成蹊学園虹芝寮でのOB合宿は忘れられない思い出だ(本合宿ことはACKUニュース No. 20を参照願う)。昭和30年代後半の山岳部/OBの合同登山(1962年8月)以来の30年ぶりの谷川合宿で、関西・関東に加え新潟・高松・鹿児島からの参加者を含めOB17人が集まった。準備は西内・高屋及び和光(当時関東)が分担してくれた。谷川岳では主力パーティーは残雪が豊富に残る芝倉沢を国境稜線まで登り切った。

虹芝寮には「ダークダックスが歌って広まった寮歌”山の友によせて”」がある。我々もピアノがうまい高屋夫人に頼んで録音したテープを持ち込み、夕食では皆で合唱して盛り上がった。

その後彼は能勢に移り、その訃報は事務局からのメールで知った。ほどなくして彼の知り合いという近所の方が訪ねてこられた。聞いてみると、業界の集まりでY化成から出ていた彼と知り合い、約10人の仲間が今でも親しくしているとのこと。このグループは共通の技術上の問題の情報交換のために集まったが、その課題を終えたあとも今日まで続いているとのこと。また、彼が家族を巻き込んでやっていた盲導犬の里親(パピイ)運動もこのグループが契機になって始めたものとのこと。

みんなに敬愛された彼の冥福を祈る。

谷川合宿(1994)の参加者

横山千秋(本部) 前田精三('57)
 豊田寿夫('60) 久保谷幹夫('62)
 田中俊甫('62) 岡市敏治('63)
 坂本 亨('63) 篠原 均('63)
 田中信行('63) 壺阪祐三('63)
 川越靖曠('64) 有馬 誠('66)
 八田義一('67) 井上達男('70)
 和光広典('71) 木本義治('72)
 西内 博('73) 合計 17人



2025 年秋 ランタンヒマール・ヤラピーク登山

酒井 利直

1. 登山計画の経緯

私が初めてネパールの地を踏んだのは 2012 年秋、故高田和三さんが率いるヘルプネパールアソシエーション（以下 HNA）のトレッキングに参加した折であった。その時歩いたコースはランタン谷キャンジンゴンパ往復だった。それが私のヒマラヤトレッキングの始まりで、その後ネパール大地震の 2015 年とコロナ禍の 3 年間を除いてほぼ毎年ネパールに旅をしていた。旅の目的は、トレッキングと小学校の校舎寄贈および地震で被災した校舎の再建支援だった。2022 年のマルディヒマール（マチャプチャレ山塊の一角）からは、山岳部同期生の居谷千春さんもこの HNA ヒマラヤトレッキングに参加するようになり活動はより充実したものとなった。

また一昨年山岳部後輩の吉井修さんの紹介で、日本語に堪能なガイド・ラムカジ・タマン Ram Kaji Tamang やその長兄のツル・バハドゥール・タマン Tul Bahadur Tamang（以下ツルさん）と知り合いになった。

ツルさんには、2024 年秋にアンナプルナサウスに近いコプラリッジ・トレッキングのガイドをお願いし、色々情報交換をする間柄になった。そんな中で私の中に「トレッキングだけではなく、ピークに登りたい。アイゼン・ピッケル・ロープを使って山に登りたい」という思いが募ってきた。そして日頃一緒に山に登っている仲間と「ヒマラヤでの登山」を語るが多くなってきた。

話は前後するが、2024 年 4 月に ACKU の総会でネパールトレッキングについて話をする機会を頂いた。その時の話の趣旨は「シニアの方にはネパールのトレッキングを、若手や現役の学生にはトレッキング・ピークのクライムを楽しんでほしい」というものだった。

このような経緯を経て、一昨年（2024 年）12 月に、私からネパールでの登山に関心を持っている人に「2025 年ネパール・トレッキングピーク登山基本プランのご案内」を発信し、コアメンバーの確定に動き始めた。

この時点で対象の山はランタンヒマールのヤラピーク（Yala Peak 標高 5,500m）に決定した。なぜヤラピークを選んだか？というのとトレッキング・ピークの中で「ネパール登山協会の許可や入山料がいない」ということが最大の理由だった。つまり登り易い山ということである。

この基準に合う山としては、マチャプチャレ山塊のマルディヒマールも上げることができるが、同峰についてはトレッキングでベースキャンプ近くまで登っているの、今回はヤラピークを選ぶことにした。

またランタン山塊の登山口はカトマンズから車で 7 時間程度のところにあり、他の山域に較べてアプローチが短いというのもヤラピークを選択した理由の一つである。

昨年 8 月には大学山岳部の吉武裕登さんの参加が決まり、メンバー 7 名が確定した。

なお吉武さんの登山費用については、半額程度をヘリテージ基金経由で支援した。

2. メンバー 企画・リーダー 酒井利直（75 歳 ACKU）、石原敏雄（79 歳 阪大山岳部 OB）、居谷千春（75 歳 ACKU）、中川勝八郎（70 歳 ACKU）清水雄（68 歳 衝立岩等のクライマー）保険・小口現金管理 吉井修（64 歳 ACKU）吉武裕登（20 歳 神戸大学理学部）

3. 行動概要

（1）準備段階

2025 年 9 月 9 日、ネパール国内で Z 世代主導の大規模デモが発生し、オリ政権が退陣する事態となり、一時は今回の登山への影響が懸念された。しかし翌年 3 月に総選挙を実施するための暫定政権が発足し、治安は回復してきたので、計画遂行に問題はないと判断した。10 月 7 日にはエベレスト方面で天候急変により多くのトレッカーが閉じ込められるという事態が発生、その後今回の目的地であるランタン谷でも洪水によるトレッカーの事故が発生するなど異常気象による事故や谷沿いの道路の一時閉鎖などのニュースが流れ、例年になく現地情報に敏感になりながら出発日を迎えることになった。

（2）出発からヤラピーク登頂まで

1日目(10月29日) 全員7名がカトマンズ・タメル地区のホテル Ramada Encore に集合した。今回は出発地の違い等から直行便を含めて数便に分かれてカトマンズ集合となった。

2日目(10月30日) 午後、個人装備の登攀道具の点検。夜は旅行会社 Planholidays の社長宅でディナー。小雨。

3日目(10月31日) 登山口への移動日。8時チャーターバスでホテルを出発。途中ポーターを乗せながら、14時50分にシャブルベシ(標高1,460m)に到着。天候は小雨のち曇。

4日目(11月1日) トレッキング開始。夜来の雨が続けていたが小降りになり8時10分出発。ランタン川沿いの道を登る。13時40分バンブー(標高1,970m)到着。ロッジに泊まる。

5日目(11月2日) 天気回復し晴。7時20分出発。吊橋で溪谷を渡り標高を上げていく。16時40分タンシャップ(標高3,140m)到着。この日の夜から高山病予防にダイアモックスの服用を開始した。

6日目(11月3日) 快晴8時25分出発。前日の行程は登り降りが多く疲れたが、ここから先は谷が大きく開け、傾斜も緩やかになってきた。

10時55分ランタン(標高3,430m)に到着し、ランチ。ランタン部落は2015年の大地震で大きな被害を受けており、少し上部に新しい村ができている。我々は昼食の後、少し歩いてムンドゥという小さな部落(標高約3,400m)し、そこのロッジに泊まった。ここまで登ってくるとランタン谷奥の秀峰ガンチェンポ(標高6,387m)が大きく見えてくる。



7日目(11月4日) 快晴7時55分出発。ティープレイクを挟み、10時40分キャンジンゴンパに到着。ここが最後の集

落だ。午後はガイドの Manuman Gurung さんによるロープとアセンドー等を使った登下

降訓練を実施した。訓練後有名なチーズ工房などを散策した。

8日目(11月5日) 高度順応の日。8時過ぎにキャンジン・リ(Kanjin Ri)へ出発。「リ」は眺望の良い丘という意味のこの地域に多く住むタマン人の言葉だ。キャンジン・リには低い峰(標高約4,400m)と高い峰(標高4,773m)がある。若手チームは高い峰まで、年長組は低い峰まで往復し、それぞれ13時、12時15分に下山した。

9日目(11月6日) 快晴。ベースキャンプ入山の日。トレッキングシューズから本格的登山靴に履き替えて出発する。標高4,600m付近から雪に覆われた斜面をツボ足で登るようになった。14時50分にベースキャンプ(標高約4,800m)に到着した。先発したガイド・ポーターが二人用宿泊テントやキッチンテントを準備してくれていて快適だった。

10日目(11月7日) 快晴。頂上プッシュの日。午前3時朝食後、4時25分にアイゼンを



着装してメンバー6名が出発。朝はかなり冷え込んでアイゼン装着等の準備にやや手間取った。最初は緩い雪原歩きが続く。6時50分頃夜が明け明るくなっていく。傾斜がきつくなってきた斜面を登り、標高約5,200mに達した頃、私は軽い高度障害を感じた。そこでしばらく休憩し、そこから一人で先にベースキャンプに下ることを決めて、後から登ってきたサブガイドにその旨を告げた。これから先の登頂の様子について

は、吉井さんがヘルプネパールアソシエーションの会報（第78号2025年12月）に掲載された報告を引用させて頂くことにする。

「この日、先行して登頂を終えてきたポーランド人とドイツ人の2人組にすれ違い、その情報から、8時40分、ハーネスを装着した。その上、右へトラバース的に登り、9時15分頂上直下に出た。少し休んで、そこからは最後のピッチ、頂上直下、3本のFIXロープがあり、アッセンダーをセットして登った。9時55分登頂。頂上からはランタンリルン（7227m）を筆頭にランタン山群の山々がぐるっと一望され、北にシャシャパンマ（8027m）が大きく見えた。」

ヤラピークには、後期高齢者3名を除く4名のメンバー（吉井さん・吉武さん・中川さん・清水さん）が登頂することができた。

登頂メンバーがベースキャンプに帰還した時刻は16時10分。12時間近い行動時間だった。手頃なトレッキング・ピークとはいえ、ヒマラヤ登山はやはりタフだった。

(3) 下山

11日目（11月8日）快晴。8時25分にベースキャンプを出発し、キャンジンゴンパで昼食。ここで登山靴からトレッキングシューズに履き替え、足取り軽くこの日の宿泊地ムンドゥウに向かった。15時20分ムンドゥウ着。夕方、居谷さんが写真を撮ろうとして、ロッジの前の小川の橋で転倒し、左脇腹を強打する事故が発生した。

12日目（11月9日）快晴。8時に出発。往路とは異なるルート、つまりランタン谷の右岸を通るルートを通して下山することにした。このルートはガネッシュ・ヒマールの眺望が素晴らしいとガイドが強く推奨するので、こちらを選んだが、宿泊地のシェルパゴンまで登りが多く、時間がかかった。シェルパゴン到着は16時40分。途中ハヌマンラングールと思われる猿の群れを目にした。

13日目（11月10日）快晴。8時30分に出発し、途中ガネッシュ・ヒマールの眺望を楽しむ。登り降りの多い道だが、下山路として良かったという声が多かった。

16時40分シャブルベシに到着後、解散パーティを実施し、ガイド、スタッフ、ポーターにボーナスを支給した。

14日目（11月11日）快晴。7時にシャブルベシをチャーターバスで出発し、15時にカ



トマンズの Ramada Encore ホテルに到着した。到着後ただちに居谷さんをホテルに待機して貰っていた CIWEC 病院の救急車で病院に運び、レントゲン検査等を受けた。結果は「肋骨を 2 本骨折しているが、内臓等の損傷はなく、入院治療の必要なし」というものでまずは一安心した。

カトマンズでは帰国便まで 2 日半ほど余裕があり（利用する便によって違いはあったが）、分散して HNA の事業である学校訪問、市内観光、カトマンズ郊外の景勝地ナガルコト散策などを行った。

4. まとめとして

- (1) まず全体的な評価としては、旅行前の政治的混乱や異常気象など複数の懸念事項があった中で、目標であったヤラピークに 4 名が登頂できたことで成功だったと評価したい。これは登頂メンバーの努力や幸運に加え、プロジェクトをサポートしてくれたガイドやポーター、旅行会社の方々の献身的なサポートの結果であり、深く感謝したい。幸運という点では、今回ランタン山塊の山を登山対象にしていたことは、結果的にラッキーだった。何故なら異常気象でエベレスト方面やアンナプルナ方面では降雪が多く、トレッキングを断念して、比較的雪が少ないランタン方面に転進してくる人が多かったからだ。なお比較的雪が少ないランタンでも、我々はここ数年では滅多にみないような雪に合うことができた。過去の登山動画などを見るとガレ地や岩場を登ってヤラピークに到達しているものが多い。大雪原を辿ってベースキャンプ入りすることでヒマラヤらしい景色を味わった我々は運が良かったというべきである。
- (2) 今回旅行会社は、HNA と関係の深い Planholidays 社を元請けに、私が指名したツルさんをガイドとして、スタッフ（コックなど）やポーターを手配して貰う手管で動いてもらった。ただし元請けの Planholidays とツルさん（ツルさん自身 Janakchuli Treks Pvt. Ltd というトレッキング・登山に特化した旅行会社の社長である）との関係がしっくりいかず、Planholidays 社からお目付け役的なガイド Manuman さんが加わった。彼自身はエベレスト登頂者であり、ガイドとしても優秀で問題はなかったが、Planholidays のバラル社長とツルさんの間の溝は埋まることはなかった。それが金銭面（つまり儲けの配分）の問題なのかそれ以外のことなのかは分からない。個人的な意見だが、ネパール人は一族や同じ部族（タマン族など）間の結束は強いが、ネパール人として結束して、何か大きなことをするというのは不得意だと思われる。
- (3) 登山費用については、トレッキング・登山費用が参加者一人当たり US\$2,000 で都市滞在費（カトマンズおよびその周辺での宿泊飲食費）は平均 US\$600 だった。またガイド・ポーターへのチップは、メンバー 1 人当たり US\$185 となった。トレッキング・登山費用は、カトマンズから登山口までのチャーターバス費用、ガイド・ポーター代、登山中のロッジ代金、総ての食事代金、テント等の使用料など総てをまかなっている。ネパールでは、多くの旅行会社がコマーシャルベースでトレッキング・ピーク登山を募集している。料金は提供するサービスレベルによりかなり異なるが、今回の料金は概ね中の上位だったと判断している。ベースキャンプで日本風チキンカツが供されるなどキメ細かいサービスを考えると、コストパフォーマンスは高かったと判断している。今後トレッキング・ピークを登りに行かれる場合は、一般募集のトレッキング・ピーク登山の料金を参考にしながら旅行会社と交渉するのも良い方法だと思う。
- (4) 今回後期高齢者の 3 名が、体調不良が原因でヤラピークに登頂できなかった。体調不良の原因はそれぞれなので詳述はしないが、私の場合の大きな問題はベースキャンプでかなり寒さを感じたことだった。アンダーウェアからダウンジャケットまで装備に問題はなかったのに、加齢に伴う筋肉量の低下や末梢血管の収縮で、冷えを感じやすくなっていったと思われる。寒さを感じると筋肉は発熱のため、より多くの酸素やエネルギーを消費する。また高山病予防には 1 日 3 リットルの水を飲むことが 勧められ

ているが、寒さのため喉の渇きを感じず、ベースキャンプではそこまで水分摂取ができなかった。それが今回の高度障害に繋がったというのが私なりの見立てである。なお途中での撤退判断は、少し慎重すぎたかもしれないが、登山全体をマネージしている立場としては、それで良かったと私は考えている。

今回高齢者のメンバーの中に、アプローチ中熱中症になった人がいた。ただしその人がHNAの報告書でいうには、ガイドが熱中症ではなく、低体温症だという判断を下し、メンバーもその判断に従ったため回復が遅れたということだった。

高所登山やトレッキングにおける高齢者の体調管理は難しい、と改めて思った次第である。

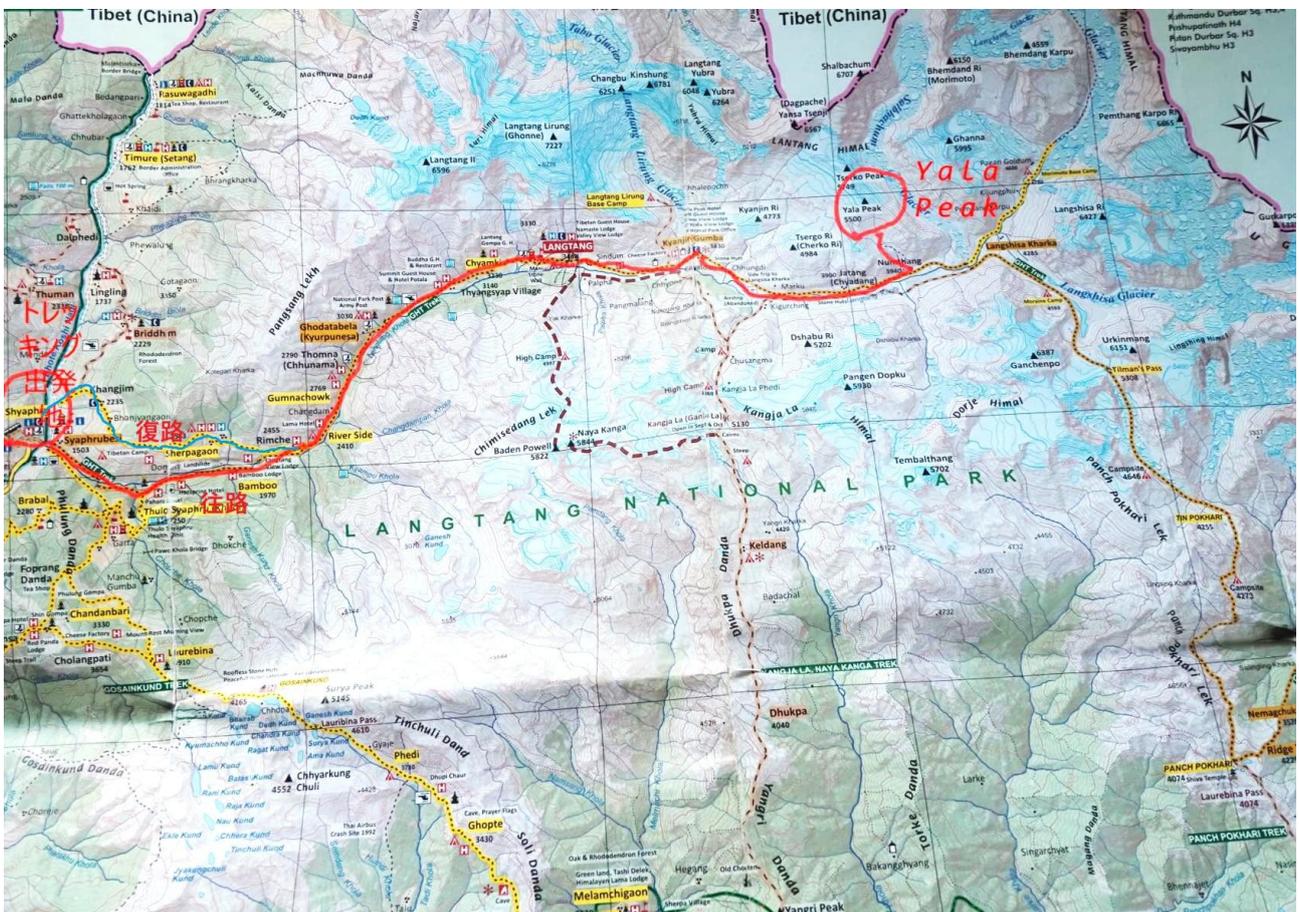
- (5) このようにして私たちのヤラピーク登山は終わった。私にとって62歳から歩き始めたネパールヒマラヤのトレッキング活動に大きな節目を迎えることができたと感じている。帰国して半月ほど過ぎた時、文藝春秋(2026年1月号)が届いた。その中で俳優の役所広司さんが師匠の仲代達矢さんについて「仲代さん、叱ってくれてありがとう」という一文を寄稿していた。名優仲代達矢さんは私たちがヤラピークに登っていた11月の下旬に亡くなられていた。

役所広司さんの文章の中で私が惹かれたのは、「仲代さんからは、役者で有る前にちゃんとした社会人でいなさい、と言われました」という箇所だった。「社会人としての最低限のルールを守り、他のスタッフやキャストへのリスペクトを持たなければ、何事もうまくいかないよ」と仲代さんは続けたそうです。

私は仲代達矢さんの言葉から「よきマウンティニアである前によき社会人であれ」という高木正孝先生の言葉を思い出していた。「パタゴニア探検記」の中で先生は「隊員の選考方針は、マナスル登山の時のものを踏襲して、はずかしからぬ人格・登山技術・パーティ・シップ(外国人との協調性をも含めた)の三点から検討する」と述べられている。

節目の登山を終えたいま、この言葉の重みを改めて噛み締めている。

以上



最近の中国登山協会

山田健

ACKUは1986年のクーラカンリ遠征以降、40年間にわたって中国チベット・四川の山とかかわってきました。クーラカンリに続いて1988年には四川省西北部の雀児山、2003年にはルオニイ遠征、2009年ロプチン遠征、2015年バダリ遠征と、ACKUが行ってきた海外登山は例外なくどれもチベット・四川で実施してきました。それは私たちが目指していた未踏峰登山の格好の舞台がそこにあったからです。このような登山をするときにACKUの友人としてサポートしてくれていたのが中国登山協会（CMA）でした。最初にクーラカンリに登った時、後にCMA主席となる李致新や副主席となる王勇峰らと築いた信頼関係をもとにしたサポートで私たちはどれほどの恩恵をもらったことか。それはカンリガルボ山群において世界で唯一の正式登山許可を彼らの努力でACKUにもたらしたということに最も現れています。もちろんそれに対価（中国登山は金がかかった）を支払ったのは事実ですが、それにも増した友情で結ばれた関係性があったと、40年間を見てきた私は感じています。その証拠に今年日本山岳会120周年記念式典（東京）に招待されて来日した李豪傑元CMA交流部長がわざわざ帰国前に来神し、私たちと旧交を温めたことに表れています。12月9日に神戸に到着して、その晩に私と木南会員（2003年隊員）とで会食を持ちました。私とは9年ぶり、木南君は10年ぶりの再会で大いに盛り上がりましたが、そこで彼に聞いた最近の中国登山協会とその支部であるチベット登山協会の変容ぶりには驚愕しました。彼の話では、中国登山協会、チベット登山協会ではコロナ騒動のあった後はもう積極的には外国登山隊を受け入れるようなことはしていないということでした。外国の窓口であった交流部も廃止になったようです。登山協会という名称は変えていないようですが、今の協会業務の主流になっているのは国内向けのアウトドアや山岳競技の振興で、特にスポーツクライミングや山岳スキー競技でオリンピックのメダルを獲得することに血眼になっていて、そうしないと政府予算が降りてこない、したがってもう高所登山のように面倒で危険なことはとくに上層部の興味からなくなっているそうです。李致新も王勇峰も李豪傑も定年退職した後、上部機関の国家体育総局から来た新しい主席、副主席は全く登山を知らなくて、他の競技をしていた人なので登山のような競争する、メダルを取るという要素がないものには興味がないということらしいです。中国の国自体もそうですが登山協会も急激な様変わりがしていくようです。クーラカンリに行った頃の中国は本当に貧しかった、上陸した上海で見たみんな薄汚れた人民服を着てぞろぞろと歩いていくあの様は本当に忘れられない光景です。その貧しい中で貴重な外貨を稼ぐことができる中国登山協会は国家体育総局の中でも特別な扱いであったようです。確かにクーラカンリ登山で協会に支払ったのはその当時でも数千万円規模でそれがドルで支払いですので中国にとって外貨集金マシンのように見えたでしょう。その頃はどんどん外国登山隊を受け入れること、それだけやっていたらよかったようです。それが今は北京もラサも業務が煩雑な高峰・未踏峰狙いの外国隊はむしろ来てほしくないというスタンスらしいです。カンリガルボで私たちと一緒に登った若い人たちは今どうしているのか聞いてみると、ロプ



チンと一緒に登ったチベット人のデチンやダンタ（二人ともチョモランマ4回登頂）も今は登山に関係のない仕事に回されている、さらにCMAに就職した袁復棟（ロプチンの時の地質大学の学生で北京オリンピック2008の聖火をチョモランマに持ち上げて英雄扱いされていた）は今では協会の資産管理業務をやっているとのこと。「なんということか、もうチベットの未踏峰もダメなのか」という言葉が浮かんできました。

神戸にて 左から木南、山田、李豪傑

日本山岳会創立 120 周年記念事業

第 6 回グレート・ヒマラヤ・トラバース(インドヒマラヤ横断踏査隊)

吉井 修

第 5 回 GHT までで、ネパール・グレートヒマラヤトレイルは完踏となり、第 6 回 GHT の行先はインドに移った。インドは当初、4 回踏査する構想があったが、パキスタン、中国共に国境を巡る問題を抱えており、入域の許可が得られない所もある。コロナで 2 年間活動が停止したことも鑑み、インドはこの 1 回だけとし、一筆書きに拘らず、以下の 5 つに分けて、踏査することになった。一つ一つの山域間はジープ他の交通手段を使って、移動した。

- ① ナンダ・デヴィ (7816m) の東からの接近
- ② ナンダ・デヴィ (7816m) の西からの接近
- ③ ヒンズー教の三大聖地巡り
- ④ ダラムサラ訪問とカレリ渓谷トレック
- ⑤ ラダック・カンヤツェ II 峰 (6240m) 登頂

期間：2024 年 10 月 1 日～11 月 25 日

メンバー：重廣恒夫 (77)、吉井修 (63)、飯田邦幸 (70)、中村三佳 (61)

① ナンダ・デヴィ (7816m) の東からの接近

10 月 1 日羽田空港から全日空の直行便でインディラ・ガンジー空港に降り立った。デリーでの 2 日間は両替や現地エージェントとの行程確認などであつという間に過ぎ去った。

10 月 4 日 晴 デリー (列車) カトゴダム (車) アルモラ (標高 1651m) 移動距離 523km 所要時間 (休憩・食事を含む) 12 時間

5 日 晴 アルモラ (車) ムンシャリ (2272m) 190km 7 時間 30 分

6 日 晴 ムンシャリ (レスト) 6.4km 2 時間

早朝のニューデリー駅から列車と車乗り継いでアルモラに移動した。未明のニューデリー駅はリクシャーで埋め尽くされて、車では近づけない。駅のホールには夜を過ごした人々がまるで死体のように寝転がっており、これが噂に聞くインドかとびっくりした。今いまの首都の駅とは思えない。驚くべき光景で、混沌の世界の一端を見た思いであった。列車に乗るのも大変かと覚悟を決めたが、私達の乗った列車の指定席はいたって平穏でほっとした。車窓からの景色は街並み、工場群、農村地帯と目まぐるしく変わったが、気になったのはどこまで進んでも、煙っている大気であった。広い国土を覆う大気汚染の深刻さに気分が滅入った。

アルモラからムンシャリまでの舗装道路は、日本の林道と変わらない感じで安心できた。やはりネパールとは国力が違うのだ。アルモラから 20km 位走った所から、ナンダ・デヴィとナンダ・コットが見えた。ムンシャリのホテルの北東方向にはパンチ・チュリ山群が眺められた。ムンシャリの一日は、片道 2 km ほどのナンダ・デヴィ寺院に出かけた。色とりどりに装飾された小さな寺院で踏査の安全を祈願した。



GHT 6 全体地図



10/4 未明のニューデリー駅

- 10月7日 晴 ムンシャリ (車) ラガリ〜ブグディアール (2438m) 38km 5時間 20分
 8日 晴 ブグディアール〜リルコット (3161m) 16km 7時間 30分
 9日 晴 リルコット〜ガンダール (3419m) 14km 7時間 10分
 10日 晴 ガンダール〜ナンダ・デヴィ東 BC 手前 (3917m) 5km 4時間 30分
 11日 晴 ナンダ・デヴィ東 BC 手前〜マルトリ (3394m) 14.5km 8時間 50分
 12日 晴 マルトリ〜ナラデヴィ (2746m) 18km 8時間 45分
 13日 晴 ナラデヴィ〜ラガリ (車) ムンシャリ (2272m) 42km 5時間 20分
 14日 曇 ムンシャリ (車) バゲシュワール (2320m) 125km 6時間
 15日 曇後晴 バゲシュワール (車) ジョシマート (1896m) 194km 8時間
 16日 晴 ジョシマート (レスト)

ナンダ・デヴィ (7816m) はサンスクリット語で「多幸の、祝福された女神」の意、インドで2番目に高い山 (インド最高峰はカンチェンジュンガ) で、山全体がインド領内にある山では最高峰になる。1951年「いつかある日、山で死んだら、古き山の友よ、伝えてくれ〜」という詩を残したデュブラが遭難死した山としても有名である。1976年に日本山岳会が東峰 (7434m) から西峰 (主峰) への縦走に成功した。縦走したのは高見和成と長谷川良典。重廣さんはこの時、東峰に登頂された。総隊長は渡辺兵力、隊長は鹿野勝彦。小原俊、寺本正史、加藤保男、小林政志、伊丹紹泰、桐生恒治、磯野剛太、梶正彦、丸尾裕治といった精鋭で、1984年のカンチェンジュンガ縦走にもつながっていく。神大の梶田君や市大の片岡さんを通じて、私はこのほとんどのメンバーと知己がある。是非、見てみたい山であった。

ナンダ・デヴィ東のBCまでは、ムンシャリから往路3泊4日、往復6泊7日の歩行である。自動車道路はガウリ・ガンガ沿いにガンダールの向こうミラムまで通じているのだが、ラガリの上方での山腹崩壊で通行不能になっていて、手前のラガリから歩き始めた。ブグディアールにはITBP (インド・チベット国境警察) があり、パスポートチェックを受けた。

ガンダールまでの道ではミラムからムンシャリに下る羊の大群と何度かすれ違った。春までの半年はムンシャリに下って過ごすのだという。ガンダールはオールド・ビレッジと呼ばれる美しい石造りの10数戸の集落であったが、現在は1家族しか住んでいない。

ガンダールからは山道となって、ナンダ・デヴィ東のBCに向かった。BCはモレーンの上にあるが、この時期、水が取れないとのことで、やや手前の台地にテントを張った。

到着した10日は厚い雲に包まれて、ナンダ・デヴィは見えなかった。心配しつつ、就寝したが、夜半、雲が切れていく気配がし、翌11日は見事に晴れた。朝焼けに輝く姿から、紺碧の空に白く堂々と映える姿まで、実に素晴らしかった。まだ旅の最初だが、これでもう、インドに来た甲斐十分と思うほどであった。奇しくもこの日は重廣さんの77歳の誕生日。多幸の女神が48年ぶりの重廣さんを祝福したとしか、思えなかった。

帰路はナラデヴィにあるもう一つのナンダ・デヴィ寺院に立ち寄るルートで、ムンシャリに引き上げた。



10/9 子羊を背負ってムンシャリへ下る老婆



10/11 重廣隊長とナンダ・デヴィをバックに。
 左が東峰 (7434m)、真ん中奥が主峰 (7816m)

② ナンダ・デヴィ (7816m) の西からの接近

- 10月17日 晴 ジョシマート (車) アウリ〜タリー・フォレストキャンプ (3351m) 23km 7時間20分
18日 晴 タリーフォレストキャンプ〜クアリ・パス (3722m) ~ダクワニ (3146m) 8km 6時間40分
19日 晴 ダクワニ〜パナ (2764m) 9.3km 7時間
20日 晴後曇 パナ〜セムカルカ (2633m) 14.8km 9時間20分
21日 晴 セムカルカ〜ラムニ・パス (3196m) ~ラムニ (2557m) 10km 7時間
22日 晴 ラムニ (車) ジョシマート (1892m) 109km 6時間

ムンシャリから2日かけてジョシマートに移動、計画では1976年の日本山岳会の登山ルートを通り、ダランシ・パス (4245m) まで往復する予定だったが、渇水期で水を得ることができないとのことで、西面のクアリ・パス (3722m) を越えるトレックに変更することになった。このコースは1905年ロード・カーゾン元インド総督が越えたと言われ、1936年シプトンとティルマンがナンダ・デヴィ初登頂の折に越えた峠道でもあった。

5泊6日の旅で、17~18日は東・中部ガリワール・ヒマラヤの7000m級の山々の展望 (ナンダ・デヴィ主峰を中心にチャンガバン、ドゥナギリ、カメットなどが見えた) を、後半はヒマラヤン・ゴールデン・オークの森やインドの山村の風情を楽しんだ。ネパールよりむしろ先に知られた地域であるが、よく知らなかった山域で、ヒマラヤは奥が深い、世界は広いと痛感した。



10/17 ナンダ・デヴィ主峰 (7816m) 西面



10/28 ケダルナート、中央奥が寺院

③ヒンズー教の三大聖地を巡る

- 10月23日 晴 ジョシマート (車) バドリナート〜マナ〜バドリナート (3141m) 52km 5時間
24日 晴 バドリナート (車) ジョシマート (車) ピパルコット (1391m) 76km 3時間
25日 晴 ピパルコット (車) グプタカシ (1447m) 132km 6時間30分
26日 晴 グプタカシ (車) ガウリクンド〜ケダルナート (3555m) 42km 12時間
27日 晴 ケダルナート (寺院参拝の一日)
28日 曇後晴 ケダルナート (馬・車) グプタカシ (1447m) 132km 6時間30分
29日 晴 グプタカシ (車) ウッタラカシ (1361m) 215km 9時間30分
30日 (晴) ウッタラカシ (車) ガンゴトリ (3077m) 93km 4時間40分
31日 (晴) ガンゴトリ (車) ウッタラカシ (1361m) 95km 5時間
11月1日 (晴) ウッタラカシ (車) リシケシ (377m) 168km 4時間30分
2日 (晴) リシケシ (車) デリー (300m) 241km 5時間
3日 (晴) デリー (レスト)

ナンダ・デヴィの後、11月3日にデリーに一旦戻るまで、ヒンズー教の聖地を訪ねた。四大聖地 (バドリナート、ケダルナート、ガンゴトリ、ヤムノートリ) のうち、前の3つを訪ねた。もう参拝も季節はずれ (11月初旬には寺院が閉まる) という話だが、いずれの聖地も大勢の人でひしめき合っていて、信仰の熱量は感じるものの、日本的な荘かさは皆無に近い。

一番印象に残ったのはシヴァ神を祀る最大の聖地・ケダルナート。ガウリクンドで車を降りて、徒歩で17km、標高差にして1600m登らねばならなかった。ちょうど富士登山くらいだが、1日数千人とい

うどえらい巡礼者数。背負われたり、担がれたり～、馬に乗る人の数は数知れず。頭上には参拝客を運ぶヘリコプターが往きかい、爆音が1日絶えることがない。道は馬糞にまみれ、馬に当たらないように絶えず注意が要る。私達は徒歩で10時間半を要した。翌27日は寺院の参拝に出たが、長蛇の列で本尊を拝むまでに5時間半を要した。並んでいる間、裸足でいるように言われるのだが、本堂に入る所は押し合いへし合い。中に入っても押され放しで、どれが本尊やら、見てる間もなく、拝む間もなく、押し出されてしまった。並んだ5時間半は一体何だったんだろうという感じだが、それでもこれまでの穢れが清められると信じられている。長蛇の列に対しても全くの無策だが、インドはこの混沌こそを楽しんだあかんのやとようやく腹が座ってきた。

聖地探訪の他には、ウッタラカシのネルー登山学校とビートルズも来たというヨガの本場・リシケシの町を訪ねた。

ネルー登山学校はダージリンに並ぶ、インドを代表する登山学校で、突然の訪問にもかかわらず、「1976年ナンダ・デヴィ・イースト初登頂、Tuneo Shigehiro」の名で、即座に所長会談となり、改装で閉館中の博物館も、開けるので是非見て帰ってくれという話になった。さすが～世界の重廣さんでした。

④ダラムサラ～2泊3日でカレリ渓谷トレッキング

11月4日 晴 デリー（空路）ダラムサラ（車）ナディ（1767m）

5日 晴 ナディ散策、マクロードガンジ往訪

6日 晴のち曇 ナディ（車）カレリ村～ジャムコット（2628m）移動距離42km、所要時間5時間20分。

7日 晴 ジャムコット～カレリレイク～カレリレイク下キャンプ（2900m）13km
4時間30分

8日 晴 カレリレイク下キャンプ～リヨティ村（車）カレリ村（車）ナディ 43km
6時間30分

デリーで後半の装備を整えて、11月4日チベット亡命政府のあるダラムサラへ飛んだ。翌5日はナディ村の散策の後、ノルブリンカ芸術文化研究所を訪問。チベットの伝統芸術・技術を習得・継承する取り組みが行われていた。次いで、マクロードガンジのドライ・ラマ14世の公邸を訪問。すぐ前にはナムギャル修道院、この修道院でドライ・ラマの法話会が開かれるという。その後、博物館も訪問し、チベットの歴史と文化に触れる一日を過ごした。

翌6日からは2泊3日でカレリレイクを目指すトレッキングに出かけた。初日、車で2時間弱のカレリ村の登山口から標高差600mを登る尾根ルート歩き、過疎化が進む集落の上、平坦な尾根上にテントを張った。夕暮れ時、ガスが晴れて、草地に岩塊が点在する美しい光景を楽しむことができた。2日目、昨夕の取水場であった沢まで200m下り、そこから沢筋をずっと登って行った。登りついたカレリレイクは以前は氷河湖であったのだろうが、この時期、水も少なく、藻がはえて美しいとは言えず、期待はずれ。寺院でシバ神を拝んで、少し下に戻ってテントを張った。インド人のトレッカーというか、参拝者が多いのか、周りには掘立て小屋のような売店が数軒。3日目は登ってきた道を1時間40分ほど下り、分岐を右へよく整備された道を下山した。2組の10人以上のデリーからのインド人トレッカーとすれ違った。中には到底、湖までは登れまいと思う太ったお婆さんもいた。下山口には食事もできる売店が何軒もあり、シーズンならば人気あるルートと伺えた。

11月9日 晴 ナディ（車）ジャンムー（384m）224km 9時間40分

10日 曇 ジャンムー停滞

11日 曇 ジャンムー（空路）レー（3448m）

ダラムサラから西北西に220km余り、ジャンムー・カシミール連邦直轄領の冬季の主都ジャンムーへ車移動、高速道路を走ったが、9時間40分を要した。翌日はラダックのレーに飛ぶ予定であったが、同時刻の別便は飛んだのに、私達の便は天候不良でやって来ず、空港に5時間以上いたあげく、フライトキャンセルになった。空港の待合いが都市間移動の軍人で埋めつくされるのに驚く。手荷物検査も厳しい。国境紛争のある地域、陸続きで対峙しているとはこういうことなのかと重苦しさを感じた。翌日は検査に少し慣れ、遅れはあったものの、レーに無事到着した。現地ガイドによる装備のチェックを受け、翌日からの登山に備えた。

⑤カンヤツェⅡ峰(6240m)登頂

- 11月12日 晴のち曇 レー(車) サラ~マルカ(3757m) 95km 7時間
13日 晴 マルカ~タチュンツェ(4230m) 15km 8時間
14日 晴 タチュンツェ~BC(5057m) 6km 5時間30分
15日 晴 BC滞在 4km 4時間30分
16日 晴 BC~カンヤツェⅡ峰頂上(6240m)~BC 11km 17時間
17日 晴 BC~ハンカー(3996m) 13km 8時間
18日 晴 ハンカー(車)レー 106km 5時間30分
19日 晴 レー滞在

欠航で1日遅れが生じたので、レーでの停滞日を設けず、11月12日、カンヤツェⅡ峰目指して出発した。レーの町を離れると、軍事施設が目につく。インドは国境方面に仮に民家が3軒しかない集落であっても領土保持、軍事目的の為に車道を作っているとガイドから説明を受けた。道はインダス川に沿って舗装道路を快調に走り、ザンスカール川との合流点からはザンスカール川を遡った。30分ほどでダートに変わり、さらに1時間20分走って、サラで車を下りた。1軒の民家兼売店でひと息入れてから、歩行開始。車道はまだ先へ続いているが、隊員は高度順化の為に歩く形だ。スノーレオパード捕獲の為に石積み(落とし穴になっている)等を見つつ、荒涼とした道を3時間、マルカ村のキャンプサイトに着いた。

翌13日は9時出発、5年前の大雨で学校や病院が流されたマルカの村を抜け、その上にあるゴンパ(僧院)にお参りした。ウムルン、ハンカーで村人と話しつつ、ティー休憩。ウムルンの先から目指すカンヤツェ峰が見え始めた。アッパーハンカーを過ぎて、タチュンツェのキャンプサイトに着いたのは17時であった。

翌14日朝、レーに入った夜から咳が出ていた飯田隊員は咳の回数が増え、下山することになった。3隊員で9時すぎ、BC目指して出発。午前中は近づいてくるカンヤツェ峰を何度も仰ぎつつ、順調に進んだ。スノーレオパードの足跡を見たり、ブルーシープの群れに出会ったりして、12時前、BCまでの中間点というカンヤツェ峰をバックに神が祀られている池に着いた。BCに着いたのは14時30分であった。

翌15日はBC滞在。高所順応を兼ねて、雪を踏む地点まで、アイゼン・ピッケルをデポに出た。5000mを越えて中村隊員が苦しそうだ。実際にはデポ予定地点までは行かず、2時間ほど登った5400m付近で小1時間を過ごし、14時にはBCに戻った。明日のサミットプッシュは午前1時出発と決まった。夕食までは眠らないようにして体を慣らし、夕食後はすぐ寝ることにした。

16日予定通り起床、しかし、中村隊員は昨日の登降から体調が悪化、残念ながらBCに留まることになった。山頂へは重廣隊長と私、現地ガイドのドルジェを頭に、メインガイドのマディ、それにアシスタントとしてタシが加わり、5人で向かった。BC出発時の気温は $\Delta 20^{\circ}\text{C}$ 。暗い中をゆっくりではあるが着実に登り、雪面の手前に着いたのは5時30分。寒さで固まったアイゼンを履くのにひと苦労し、夜明けの6時、雪の上に出た。斜面は堅雪と氷のミックス。マディ、重廣隊長、吉井、タシ、マディの順で5人のコンテニューアスで進んだ。8時の交信で中村隊員の不調が伝えられ、マディは中村隊員を下ろす為に引き返した。そこからは4人のコンテニューアスになった。途中アンカーを取ったのが2ピッチ、あとクレバスと完全に氷になっている所の通過はスタカットで登高を続けた。最後の急斜面を登り、頂上への稜線に出たが、頂上は思ったより遠かった。重廣さんが何度も立ち止まられる。私も苦しかったが、14歳も若い自分が先に根を上げる訳にはいかないと頑張った。頂上は12時30分、下りは一歩一歩、とにかくアイゼンをガッチリ食い込ませることだけを念じて下った。BC帰着は18時、17時間のロングランであった。

登頂の翌17日はハンカーまで下りて、車の手配を依頼した。神が祀られていた池はこの3日のうちにマディが渡るほどに凍結し、迎えのジープも凍結した川を渡れず、2時間遅れ。私達を乗せての帰路も氷の川を渡る際に冠水して、修理を余儀なくされた。が、レーに戻って、飯田隊員、中村隊員の無事な姿を確認し、互いに安堵し合った。

カンヤツェⅡ峰はシーズンであれば、それなりの登山者を集めるトレッキングピークであるが、もう晩秋の11月中旬はトレッカーも皆無であった。行動時の気温は $\Delta 20^{\circ}\text{C}$ ~ 30°C 、長時間行動だったこともあり、重廣さんは両手中指に凍傷を負われた。稀代の登山家にも年齢の壁はあるということか。

「残照のヤルンカン」で当時70歳の西堀隊長に関して「70歳の5000mは青年の8000mに相当する」という記述を読んだことがある。今、重廣さんは77歳で6000m峰。心肺の負担は相当であったろうが、私が下りに対する技術的な不安で落ち着かなったのに対し、重廣さんは頂上を見据えて終始落ち着いておられた。「ひとたび立てた計画は力を尽くして完遂する」、重廣さんの登山に対する姿勢を見た

気がした。



11/5 ダラムサラにあるダライ・ラマ 14 世の公邸



11/16 カンヤツェ II 峰、頂上を目指して
(重廣恒夫隊長撮影)



11/16 頂上直下の稜線



11/17 登頂翌日、BC から
カンヤツェ II 峰 (右) と同 I 峰 (左)

- 11 月 20 日 晴 レー (空路) スリナガール
- 21 日 曇 スリナガール滞在
- 22 日 晴 スリナガール (空路) デリー
- 23 日 晴 デリー滞在
- 24 日 晴 デリー (空路) 翌 25 日羽田着

あとの日程はレー、スリナガール、デリーを1日ずつ観光した。リトルチベットと言われたレーの町は小奇麗な観光の町となっている。ドルジェの案内でレーの町中を歩き、ヤマケイ文庫の「懐かしい未来」(H・N・ホッジ著)に出てくる「ラダック生態開発グループ (LEDeD)」を訪問した。未来は近代化という単一のものではなく、多様な道が選択しうるはずだという理念から再生可能エネルギーや生活の向上、環境問題に取り組む団体である。

現地ガイドのドルジェはレーの東方 135 km の山村出身の 32 歳、子供の時からレーに出て、今、ひとかどのガイドになった。自給自足の生活から急激な時代の波にさらされて、彼や彼の村はこの先どうなっていくであろうか？ その未来を思う時、第 5 回 GHT で見たドルポやフムラのことも含め、本当の豊かさとは何かを考えざるを得ない。それは先進国とされる日本の中にいる自分自身の足元に対する問いでもある。

水の都・スリナガールと首都・デリーは観光よりも大気汚染が気になった。スモッグに覆われて町がくすんでいる。イスラム色が一気に高まったスリナガールでは早くも次の第 7 回 GHT (パキスタン (カラコルム)) に思いを馳せたものの、深刻な大気の状態を知り、大国インドの行く末、はてはトランプ大統領の再選もあり、世界の行く末に一抹の不安を覚えつつ、第 6 回 GHT の地を後にした。

以上

再び 200 マイルの旅へ

大滝義郎

【プロローグ】

アメリカ 50 州マラソン完走→ウルトラマラソンの世界へ→50 マイル完走→100 マイル完走→世界最大の 100 マイル山岳レースである Ultra Trail du Mont Blanc (UTMB)完走→アメリカで最も歴史のある 100 マイルレース Western States を完走→そして昨年、初めての 200 マイルレースを完走する事が出来た、、、はずだったが、山火事の影響のため、50 マイルコースを 2 往復するという、かなりコース的には残念なものとなった。レース参加前はかなり全コースをイメージトレーニングしていたこともあり、『2024 年の変更コースに参加したものには、優先的に 2025 年のオリジナルコースでの出走権を与えます』、のメッセージを受け取ると、反射的に 2025 年レースのエントリーを済ませてしまっている自分がいた。

仕事の方は、オレゴンに赴任してから相変わらずの忙しさなので、普段あまりレースには参加できない状況なのだが、4 月の 100 km のレースを完走、7 月の 100 km のレースは DNF(do not finish)であったが、長めのトレランコースを練習に組み込んでいった。また、いつも問題児の自分の胃腸を、かなり理解できるようになってきた。残念なことに、今年もレース 3 日前にコース後半近辺で山火事が発生したため、コース変更があるとの連絡が入ったのだが、昨年とは異なりマイナーな変更となりそうだ。距離は 198.5 マイル、登りは 14,000m、エイドステーションは合計 12 か所、最長で 25 マイルの区間があるというチャレンジングなコースだ。

7 月は記録的な月間手術数で、体も疲弊しているのだが、レース前日の木曜日には、ゴール地点となる Randle, WA に入ることが出来た。健康チェック、装備チェック、ゼッケンのゲットの後、記念撮影を済ませる。レースの説明などを聞いた後、今年は駐車場での車中泊とする。しっかりと夕食、翌朝もご飯を食べた後、ランナー専用バスに乗り込み、スタート地点への 3 時間のドライブがスタートする。体と気持ちを休めるために、極力睡眠を取るようにした。朝方の Randle の気温は低かったのだが、日が差してくる Marble Mountain は、かなり気温も上昇してくる。クーラーの車で現地入りしているランナーも多く、徐々にランナーも集結してくる。そして国家斉唱、正午にいよいよレーススタートだ。向かう先は、200 マイル先の Randle だ。

【1、Marble Mountain~AS1 Blue Lake (12.2M)】

まずは樹林帯の緩やかな登りだ。ここは Volcano 50km でも走っている部分なので、ペース配分も気楽だ。まだまだ先は長いので、ポールを駆使して、ゆっくりとしたペースで登っていく。2 マイルも登ると、Mt. St. Helens を一周する水平道に入っていくのだが、ここは溶岩地帯もあって非常に迷いやすいトレイルだ。案の定、最初からとぼしていきランナーはロストしているようだ。自分ではゆっくりと進んでいるつもりなのだが、勝手に順位が上がってってしまう。左下方に Bute Camp Dome を俯瞰できる場所まで回ってくると、南西への下りのトレイルが始まる。スイッチバックを伴った快適なダウンヒルを走って、快適な水場のあるキャンプ場を過ぎ、平坦なコースとなってくれば、AS1 である Blue Lake に到着する。ここまで 2 時間 55 分、予定ペースよりも 45 分程早いようだ。日本人の有名ランナーよりも先に到着してしまっている状況に、とにかくペースを下げることが意識する。

気温もかなり上昇してきているので、このコースの核心ともいえる 25.2 マイル区間に備えて、しっかりと食事を入れるとともに、いつもより余分に水を背中のバッグに放り込む。そして、10 分程度で次のセクションに入っていく。

【2、AS1 Blue Lake~AS2 Coldwater Lake (25.2M, Total 37.4M)】

AS1 を出てしばらくは、ゆったりとした樹林帯の登りだ。谷には水も流れているので、それほど暑さも感じないトレイルだ。徐々に Mt. St. Helens の西側を時計回りに回り込んでいけば、大きな溪谷に向けての下りだ。最後はロープを使って溪谷に降り立ち、雪解け水の渡渉、再びロープを使用しての登りだ。ロープ渋滞もあるので、気にせずじゃぶじゃぶと川を渡っていく。6 マイルを過ぎてここからは火山の爆発エリアで、一切さえぎるものがないトレイルが続く。つづら折りを登っていけば、Mt. St. Helens の素晴らしい景観が迎えてくれる。暑いセクションなのだが、17 時を過ぎてきているので、それほど負担にはならないであろう。ただ、25 マイルとの長いセクションなので、自重に努める。Volcano 50km でも走ったことのあるコースだが、少々アップダウンのあるものの、ほぼ平坦のコースだ。

10 マイルを超えて、右からの滝を経由した雪解け水を渡れば、Johnson Ridge に向けて左折だ。このセクションは、Split Lake の水抜き工事のために、立ち入り禁止となっている部分だ。かつては細い緩い下りのトレイルがあった部分だが、踏み後はかなり不明瞭になっている。GPS を頼りに右に右にと寄っていけば、新しく敷設された大きな林道に出る。大きな砂利のために走りにくいのだが、林道を緩やかに下っていく。そしてやや登りになってか

ら Johnson Ridge に向けて登っていかねばいけないのだが、分岐には小さな標識が一つあるだけで、ここでもロストが多く見られたようだ。林道自体は、Split Lake に向かっている。現在 Johnson Ridge Visitor Center が、土砂崩れで復旧の目途が立っていないこともあり、このセクションの草木はかなり生い茂っていた。高度差 200 メートルくらいの登りで、リッジに出ることが出来る。スタートから 8 時間経過し、時刻も 20 時だ。眼前には、夕焼けに染まる Mt. St. Helens が広がる。Johnson Ridge Visitor Center は完全閉鎖、駐車場にも多くのペンペン草が生えていた。ここではロストしてしまっていた日本人ランナー達に抜かれるが、まだまだ先は長いので、自分のペースで下っていく。この標高差 500m の下りは、かなり走りやすいトレイルだ。正面に夕日を見据えながら、尾根上を主に左から巻き込むように下っていく。そして、AS2 に到達する直前にヘッドランプの投入となる。緩やかな周遊トレイルを回り、最後に舗装路を走っていけば、Coldwater Lake だ。

ここにはかなりのランナーが集結している。私より先にいるべき日本人ランナーも AS には見受けられ、自分のペースがやや早目であることを再認識させられる。ここで食事を入れようとするのだが、ランナーが多いせいだろうか、美味しくないとハンバーガーくらいしか置いていない。やや胃もびっくりしているようだが、疲労もややたまっているので、少しの仮眠も入れて 45 分の休憩を入れる。ここでしっかりと寝る作戦もあったのだが、時刻は 22 時 30 分、まだ 10 時間も走っていないので、眠気はあまり無い。このまま夜通しで山越えをすることを選択する。次のセクションは 18.7 マイル、1,200m 近くの登りで、コースの最高点を通過する第二の核心だ。

【3、AS2 Coldwater Lake～AS3 Norway Pass (18.7M, Total 56.1M)】

まずは Coldwater Lake 沿いの平坦な道だ。月の光が差し込む湖は、独特の雰囲気を醸し出している。ここは数回走ったことのある心地よい 6 マイルのトレイルだが、まだレースは始まったばかり、更にこの後大きな登りがあるので、歩き通して進んでいく。同じような考えのランナーも多く、トレイルを組んで進んでいく。そして溪谷を左岸に渡って、本格的な登りが始まる。ここは夏も冬も来たことがあるので、ペースも把握しながら登っていく。スイッチバックを登り、三叉路を左にとれば、ここにも快適なキャンプサイトが現れる。これを更に登れば森林限界だ。急斜面に切られたトレイルを右にトラバースしていけば、コルに出る。この辺りからは、暗闇の中にハックルベリーの実が散見される。かなり胃もやられて、ここで初めて嘔吐が入るのだが、ハックルベリーで栄養を取りながら進む。Johnson Ridge への分岐を過ぎれば、右下には St. Helens Lake が月光を映している。晴れていれば凄惨な景色なのだろうが、ほぼ満月に照らされた景色は、更に荘厳な風景だ。延々と続く緩やかな登りをゆっくりとこなしていけば、左に Margaret Peak への道を分ける。5 分の登りをこなせば、頂上だ。風は強いのだが、風下に回れば対処可能だ。時刻は 3:55、明るくなる前に次の AS に到着したいと思っていたが、どうやらかなり時間をかけてしまったようだ。

ここからは Norway Pass からラッシュアタックしたこともある、既知のルートだが、怪我をしないようにさくさくと下っていく。完全に一人旅になってくるのだが、時には壊れたランナーを追い越していく。下りの途中で朝日を見据えながら、6:00 には Norway Pass に到着する。嘔吐も入りかなり苦しいセクションだったのだが、もうここまで来ればランナーもばらけてきて、閑散とした AS だ。自分にとっては消化も腹持ちもいいスクランブルエッグをオーダーして胃に流し込む。ここで睡眠を予定していたのだが、完全に日も差してきて、眠気は全く無い。ここから先は大きな登りも無いので、100 マイル地点を目指して 15 分程度で先に駒を進めることにする。

【4、AS3 Norway Pass～AS4 Elk Pass (11.1M, Total 67.2M)】

しっかり食べたので、ゆっくりとまずは登りに取り掛かる。平坦区間もあるのだが、朝の涼しい冷気を浴びながら、緩やかに登っていく。右下には林道が見下ろせるのだが、左から沢を 2 本巻き込んで舗装道路のある峠に出る。ここから反対側のトレイルに入るのだが、どうもこの辺りは多くのオフロードバイクが走っているようだ。歩きやすい道ではあるのだが、でこぼこの多い道だ。樹林帯の気持ちのいいトレイルを進んでいくと、またしても最速の日本人ランナーに抜かれる。Norway Pass で睡眠を取っていた軍団にあつという間に抜かれるのだが、自分のペースを刻むことにする。最後は下りのトレイルをこなして、AS4 Elk Pass に 10 時に到達する。

寝ていないので、ここではしっかりと休息と食事を取る。次のセクションは簡単だと思っていたのだが、どうやらアップダウンが多くて曲者の区間との情報を頂く。改めて自重を意識しながら、次の区間にとりかかる。

【5、AS4 Elk Pass～AS5 Rd 9327 (15.0M, 82.2M)】

ゆったりとした樹林帯の登りから始まるのだが、トレイルは右側斜面を這うように登っていく。標高 5,000 フィートくらいの山々が連なるのだが、前方には岩峰も見えてくる。なかなか複雑な地形なのだが、Badger Peak 手前では、美しい山上の湖が現れる。驚いたことに、この辺りからはオフロードバイクがかなり盛んなトレイルのようで、オフロードバイクの連中がぶいぶいわしている。ひかれないようにしながら、登りは耐えて下りを走る。アップダウンが多くて、体にはこたえるトレイルだ。Shark Rock までくると、Mt Rainier, Mt. Adams の姿が素晴ら

しい。ピークを過ぎれば、残雪の残る斜面も下りながら、どんどんトレイルをリズムよく下っていく。16:30には、AS5に到達する事が出来た。

しっかり食べているので、嘔吐も全く無くなってきた。ここで寝ることも出来るのだが、当初の計画通り、あと2つのセクションを片付けることとする。

【6、AS5 Rd 9327~AS6 Spencer Butte (11.2M, 93.4M)】

ここから次のセクションへは、距離的には短いのだが、回り道をするアップダウンのあるセクションだ。まずは森の中の下りをこなして谷に降りた後、同じ距離を登っていく。風も少なく、暑さも和らぎ、心地のいい森のトレイルだ。登り切って林道を渡る場所でヘッドランプを装着、ここで日本人ランナー含めて軍団に抜かれるが、250mくらいの登りを自分のペースでこなしていく。だらだらとピークに到達し、そこから250m下れば、AS6 Spencer Butteだ。またしっかりと栄養を取った後、100マイルの中間点を目指すべく足を進めることにする。予想していた時間よりも、3-4時間は貯金があるようだ。

【7、AS6 Spencer Butte~AS7 Lewis River (7.6M, 101.0M)】

まずは林道を2マイル進むのだが、ここでヘッドランプの電池を最新のバッテリーに交換して下りに備える。そして、右の急斜面に入っていく。踏み後は下り専用トレイルみたいな感じで、踏み後は僅かだ。登るとなると大変なトレイルで、道を間違えたら大変そうだ。うまくブレーキを駆使しながら、500m近くの下りを走ってこなしていく。気温も下がってきて体は動き始めてきたので、ここでは数人のランナーを抜き去っていく。下りをどんどんこなしていけば、三叉路に出る。これを左に進み、橋を渡り、以前訪れたことのある舗装路を渡る。明るければ、Lewis River Fallsが見れるのだろうが、完全に暗闇の中だ。川沿いの道を2マイル以上歩いていけば、左の道を登り道路へ。最後は左のゲートをくぐって、1マイルの登りの林道をこなせば、念願の中間点AS7だ。時刻は25時を回った頃だ。多くの後続ランナーがいるのはわかっていたので、まずは寝場所の確保をした後、いつもの卵定食を食べまくる。そしてベッド台のあるスリープテントで、ブランケットにくるまって眠りにつく。1.5日進んできたので、特にタイマーをセットせずに、寝たいだけ寝ることとする。

【8、AS7 Lewis River~AS8 Quartz Ridge (17.2M, 118.2M)】

3時間ほど爆睡したであろうか、更に1時間弱おかわりをした後、明るくなってきたのでテントの外に起きだす。靴下の交換、足の手入れ、朝食を取った後、6時過ぎに出立する。まずは1マイルの下りで先行ランナーを抜き去る。しっかりと疲れも取れているようなので、体も軽い。川沿いに出た後は、ここから14マイル、1,200m近い鬼の登りだ。前半はアップダウンもあるので、なるべく下りは走って時間を稼ぐ。ここからは川をまっすぐ渡るセクションもあるので、気を付けなければいけない。一度はロストしかかり、GPSに助けられる。今日はかなり気温が上昇されると予想されていたのだが、10時を過ぎてくると強烈な熱波が押し寄せてくる。かなりの急傾斜でもあり、一マイルあたり30分を費やす場合もある。時折横切るクリークで水分補給をしたり、帽子を濡らして登っていけば、バイクも走れそうな道に12時過ぎに合流する。ここからは暑さに苦しみながら頂上へ、そしてQuartz Ridgeへ向けて下っていく。うだるような風の無い暑さで、気分はWestern Statesだ。日陰の少ないリッジのトレイルを下っていく、結局このセクションに8時間近くかけてAS8に到着する。

エイドでは食事をしっかりと摂るとともに、水分補給も行う。日に当たっていると、すぐにしおれてしまいそうだ。暑さでかなり消耗しているのだから、氷をここで投入する。今日は150マイル地点まで進みたかったのであるが、どうやらあまり進め無いようだ。気を取り直して、先に駒を進める。

【9、AS8 Quartz Ridge~AS9 Chain of Lakes (16.2M, 134.4M)】

15時過ぎに再び暑さの最高潮のQuartz Ridgeを登っていく。そしてここから東に下っていく。ゆっくりとしたランナーとともに進むが、このペースだと22時近くまでかかってしまいそうな計算だったので、気を取り直して別れを告げ、体にむちを入れて駆け下っていく。しかし、ここでポールの手首の紐が切れてしまう。まだまだ厳しい登りがあるだけに、先行きが不安になる。気を取り直していったん沢まで下った後、また登りだ。それをこなせば、Council Lakeだ。ファミリーキャンプの人達も散見される。このアップダウンをこなしていけば、しっかりと林道だ。これをしっかりと走り下っていけば、以前偵察に来た時に見た、NF23の林道だ。これを早歩きとジョグでこなし、右のトレイルに入っていく。最後はヘッドランプを投入して、AS9に21時過ぎに到達する。

ここでも定番になったスクランブルエッグ定食を頂くとともに、ホットミルクで水分栄養補給を行う。時間的にはまだ次のセクションまで進んでもいいのだが、しっかりと寝ておきたかったので、スリープステーションのあるここで4時間の睡眠をとる。

【10、AS9 Chain of Lakes～AS10 Cispus River (12.2M, 146.6M)】

2時過ぎにごそごそと起きだし、出立の用意をする。切れていたポールの紐は、上手くエイドスタッフと一緒に修理する事が出来た。そして月明かりの中を、2:30にトレイルに足を踏み入れていく。分岐の道路まで戻ってくると、緩やかな登りが始まる。三叉路を右に進めば、リッジ状の尾根の登りとなる。振り返れば、月夜に浮かぶMt. Adamsが美しい。緩やかなピークを超えれば、下りが始まる。トレイルをどンドン下っていけば、林道へ。この林道を更に下っていくと、右のスイッチバックのトレイルに入っていく。元気であればトップスピードで下れるトレイルであるが、自分のペースで確実に進んでいく。このセクションで日の出を迎える。このトレイルをこなせば、またしっかりと林道に出る。これを2マイル走れば、ゲートのある林道で左折、そして7時過ぎにAS10だ。

【11、AS10 Cispus River～AS11 Twin Sisters (22.9M, 171.1M)】

次のセクションは大きな登りがあるので、ここではしっかりと食事をとり大休止をする。エイド間の距離が23マイル、暑い登りの林道だと思っていたのだが、14マイル地点に給水ポイントが設置されたとのありがたい情報を頂く。水をかなり持っていかなければいけないと思っていたのだが、通常量で出立する。この部分はコース変更があった部分で、林道の走りやすいコースではあるのだが、何の特徴も無い10マイルのコースは、修行以外の何物でもない。フィジカルがかなりやられてきた現在、メンタルに頼るわけだが、何も思い浮かばない。今まで参加したレースなども考えるのだが、こういう極限まで追い込まれた時に考えるのは、やはり家族のことなのだ痛感する。不思議なことに、毎日の仕事については、一切思い浮かべることがなかった。早歩き、ジョグを繰り返して10マイルの平坦部分を処理すると右折、橋を渡った後、すぐに右のトレイルに入っていく。それを1マイルで、道路を渡った場所に給水ポイントがあった。暑さも増してきて、ここで5分間の仮眠を入れる。上を見上げる余裕が無かったが、青空が美しい。少し体温を下げてから、更にここから2マイルのトレイルをこなせば、1,200mを超える登りの林道が始まる。直射日光もかなり浴びるので、きつい部分だ。沢が流れ込む部分もあるので、流水で体を冷やすのだが、体が悲鳴を上げている。異常事態が発生しているのだが、ふと右足に違和感があるように思えた。今までこの靴と靴下では異常はなかったのであるが、右足底部分に大きな水泡が出来てしまっていた。痛みのためにバランスがかなり悪くなっていたようだ。急遽安全ピンで体液を排出すると、かなり楽になってきた。他のランナーに抜かれるばかりではあるのだが、ひたすら自分の登りに徹して高度を上げる。三叉路を右にとれば、平坦となり、そして再び急登となる。道の両側にはハックリベリーが生い茂り、それをつまみながら歩を進める。そしてようやく慣れ親しんだTwin Sistersに17:30に到着する。

【12、AS11 Twin Sisters～AS12 Owens Creek (16.0M, Total 187.1M)】

ここでもしっかりと食事を取った後、30分の仮眠を頂く。第一目標が完走=107時間だとしたら、Western Statesのqualificationになる100時間以下が第二目標、4日以内=96時間以内が第三目標、そして80時間台が第四目標であろうか。もう残り2セクションの下りであり、今までの睡眠時間、体の状態を考慮して、ここから一気にゴールを目指し、明るく前にゴールする計算をする。そして、まだ日の落ちていない19時前に出立する。ここからは200mくらいの登りがあるのだが、去年4往復もしている区間なので、いいペースで登っていく。去年は多くの倒木があったのだが、全て奇麗に整備されていた。登り切って分岐を左に道を取り、Twin Sistersの下のお花畑を通過する。次のピークを超える頃に、日没を迎える。夕日に染まる山々が美しい。そしてヘッドランプを装着して、下りに取り掛かる。そして去年4回も登ったPompey Peakへ。頂上からは、下界の灯りが散見される。そして下りやすくなっているトレイルを、林道を目指して駆け下っていく。かなりの倒木をまたいで通過するのだが、よくこんな場所を去年は2回も登ったものだ。ここでのロストを警戒していたのだが、無事に林道まで下りてくることが出来た。林道の前半は石も多くて走りにくいのだが、後半は走りやすい道だ。リズムを切らさないように足を進め、沢を渡って車の入ってこれる林道に出る。トレイルの両脇には、死んだように眠る人もいるのだが、アドレナリンも出ているのか、自分は眠気は感じられなかった。ここから1マイル強で、場所の変更された最後のAS Owens Creekに1:25に到着する。ここまで6時間ちょっと、いいペースで下ってこれた。

【13、AS12 Owens Creek～Randle Finish (13.0M, Total 200.1M)】

随分前に抜かれたランナーも、ここで大休息しているようだ。さっさとご飯をたらふく頂いた後、20分程度で出立する。下りの林道だが、これもリズムカル処理していく。そして2時過ぎに舗装路に出てくる。残りは9マイル弱、残り時間を計算しながら、ラストスパートに入っていく。ここからは、1マイルごとに標識があるので、うまくリズムを取りながらアップダウンをこなしていく。道端で眠るランナーもいるのだが、とにかく前に進む。そして右折X2回を行い、橋を渡り、国道を横断する。最後の直線をこなして、暗いうちにトラックに帰ってきた。そして、拍手と歓声に迎えられて、200マイルのゴールを迎える(4:36)。

Finish (200.1M)、88:36:44 (86/216 位)。

フィニッシュラインでは、オフィシャル写真をたくさん撮られる。バックルは自分で選べるのだが、月夜の青をイメージしたものとした。今年の完走率は、216人中159人(73.6%)であった。一昨年の完走率が70.7%、昨年が61.6%だったのだが、今年は暑かったものの、いいコース状況だったといえよう。

【エピソード】

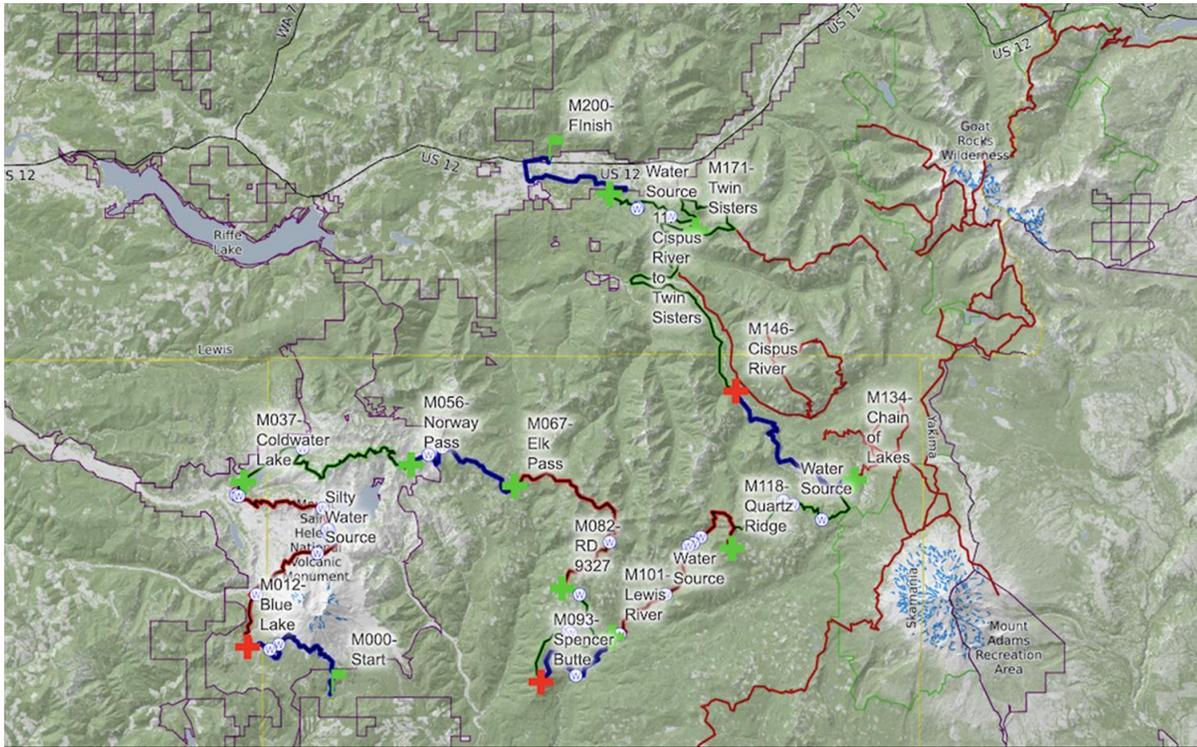
最近のレースでは、いつも胃腸の問題が生じているのだが、200マイルレースの特徴として、自分の食べたいものを自分好みに調理してくれるという事であろう。かなりエイド間の距離が長いものもあるのだが、しっかりと食事をエイドで取り、適時コース中に水分栄養を補給するというスタイルだ。また睡眠時間に関しても、かなり作戦が必要となるであろう。

今回の体の出来は100%では無かったのであるが、全体としてはかなりまとめることが出来たレースだったといえよう。本当のオリジナルコースではないのであるが、気持ち的にはBigfoot 200Mはもう卒業できたかなとの、大きな充実感のあるレースであった。

一つの目標であった地元の200マイルレースを2回完走した今、次はどこに向かうのであろうか？ どちらかという時計を気にせずにロングトレイルを楽しむというのが、自分にはかなりフィットしているように思う。野営の準備をしながらのロングトレイルもいだろうし、森林限界を超えてのキャンプ旅もいだろう。もちろん100マイルレースにも、それに見合った楽しみがあるのだが、今後はまた別の200マイルレースに向かっていこうと思う。具体的には、Lake Tahoe 200M, Moab 240M などがあるのだが、砂漠系のレースにはあまり興味が沸かない。山の風景や雰囲気はやはり癒されるので、次の目標としてはTor des Geants = 330km, 制限時間150時間、登り24,000mではないかと思う。3,000mの山を8回登るといえるものであるが、しっかりとフィジカル&メンタルトレーニングを行いながら、レジストレーションを進めていこうと思う。

【メモ】

- 靴 いつものiNov8 Roclite 275 でいったのだが、数回短距離のレースを走った靴であり、ややクッションが劣化していたのではないかと思われる。4本の爪が被弾するとともに、右足底部に水泡が出来てしまった。大きなレース前には、やはり新品に近いものを投入した方がいいのであろう。今回はブーツカバーの不調で装着しなかったのであるが、トレイルランでは必携であると思われた。
- ソックス Inner Fact で行ったのだが、チェック不足で、指間に小さなほころびがあった。100マイル地点で交換したのだが、一番いい状態のものを用意するべきだと思われた。
- ブーツカバー 今回は以前の反省から装着したが、靴の中に全く砂が入ってこず、かなり有効であったと思う。
- 服装 温度が高いため、半パン仕様とした。ややブッシュで擦り傷が出来たが、寒さを感じることは無かった。今回は前回の反省からゲーターを使用した。後半はかなり足が張ってくる。ワンサイズ上のゲーターを用意しなければいけないと思う。
- ザック Mont Bell, Cross Runner Pack 7.
- ポール Black Diamond、今回はエイドで修理が必要であったが、予備を用意しておいた方がいいだろう。
- ハイドレーション 長いエイド間距離を考えて、1.5Lのバックパックと、ソフトボトル500mL X 2とした。また予備としてペットボトル2本を、長いセクションで用意した。フィルターを持参したが、使用はしなかった。
- 氷入れ首掛け、アームカバー、自転車用手袋 暑いレースだったので、非常に有効であった。
- ヘッドランプ 初日の夜にLed Lenserの小型のもの、それ以後はLed Lenser H8R、600ルーメンを使用した。予備電池を交換しながら進んだが、これで充分であった。バッテリーパックも持参したのだが、充電する機会は無かった。
- GPS 時計 Coros, Vertex 2. 85時間を過ぎてから、マイル表示が無くなってしまった。GPSが必要な長いレースを走る場合、2台用意するか、ASで適時充電する必要があるだろう。
- 蚊よけスプレー 今回は100mLのものをずっと持参して適時使用したが、虫刺されは回避できた。軽量化のために2-3か所に分散してデポするのがいいだろう。
- 上にウインドブレーカー、下もウインドブレーカー、これはずっと持参した。
- 今回もコンタクトレンズではなくて、眼鏡を装着した。



BIGFOOT MAP



Mt Adams



Mt Rainier



Mt St Helens



ゴールでの写真

第五章 紀行・随想・活動報告（国内編）

一ノ倉のふるさとへ

—29年ぶりの第Ⅱルンゼ・ザッテル越え— 高木正孝（遺稿）

豊田寿夫編

1.

とうとう私は帰ってきた。このわたしをはぐくんでくれたふるさと谷川岳に、そしてわたしたちが自分で建てた家、虹芝寮の小屋に帰ってきた。30年に近く世界を放浪したあげくのはてに、わたしは帰ってきたのだ。もうわたしは50に近い。

1961年、8月5日（土）午後、わたしはうちの若いOB・ウマさんと虹芝寮にむかっていた。雨が降っていた。下の川ぞいの細い道をたどる。すこしも昔とちがっていない。雨にぬれた緑は目にしみるよう。

土合の駅もかわったし、新しいコンクリートの橋ができ、バスさえ通る。そしてダムができて池になっているのもおどろきだった。伝書鳩小屋があり、駅の切符売り場のようなところに行く先を記入させられる。でも山の家の中島喜代志とはなつかしい再会をよるこぶ。

西黒沢の出合をすぎてからは昔のかよいなれた道だった。マチガ沢、そして一ノ倉の出合いもそんなにかわっていない。しかし遭難碑の多いのには胸がいたむ。魔の谷川岳といわれるのもむりもない。だが、岩をうまく利用したり、ケルンだったりして道しるべになっているのは御遺族の方々のお心づかいがうかがわれてうれしい。きれいに整理されている感じで、思ったより自然がよごされていないのに、なにかしらほっとする。

雨雲は低くたれて、ひとめみたいと思う岩壁の姿はかくされたままだ。雨のおかげか、人通りはほとんどない。山はわたしのふるさと帰りをそっといたわっていてくれるのだろう。

幽ノ沢をこえて芝倉沢に近づくと、昔の河原にでる道は廃道になっていた。その昔、わたしたちが虹芝寮を建てたとき、この自分の手で作った小屋への道が本道になっていた。さすがにこの道の登りはいうにいわれない感動に心をゆさぶられる。あれ以来のわたしの人生行路が走馬燈のようにかげめぐる。

東電小屋もなつかしい。その前を道は通る。その奥に、まるで物置小屋のように風雨にさらされてくすんだ小屋をみだしたときはうれしかった。そばによってみると、昔とすこしもかわらない。なかには先発した成蹊の若いOBと他に2、3人の人しかいない。あたりをながめまわし、柱を手でなでてみる。柱はすこしもかわらず、黒びかりさえして、小屋全体が落ちつきと風格をにじみだしている。それは同時にわたし自身の人生行路の長さをも示しているのだ。

たのしいストーブをかこみ若い連中と昔のように飯を喰う。ランプの灯影で戸棚のなかの小屋帳をよむ。おどろいたことには小屋が建てて以来の全部のヒュッテン・ブーフが製本されてとってあるのだ。わたしの若き日の姿が思い浮び、輝く瞳の若者たちとの話はつきない。

8月6日（日）。曇のち雨、雨はやんで雲も高い。初めてなつかしい堅炭岩の岩峯が小屋の上に姿をあらわす。ひとつ登ってやろうかという気がしたが、夜行でくるあとの仲間をまつ。まもなく3人やってきた。一緒にパタゴニアに行った仲間〔補注-1参照〕や、神戸大学第2次中央アンデス遠征に行った若手のOBどもだ。

谷川を知るためにみんなで小屋の上の旧道に登り、一ノ倉沢に行ってみる。幽ノ沢の出合からは右股のルンゼとその垂壁に薄日があたってすばらしい。また登攀欲がむずむずわいてくる。旧道はヤブが切られ、すばらしいプロムナードになっている。一ノ倉の出合には、さすがにテントが多く、人がいっぱいだ。雪渓に登ってみると、昔とかわらず氷化していることが判った。アイステクニックの練習をしてあそぶ。日本で夏に氷の技術を学べるのはやっぱり谷川だけだ。

飯を食べ終るころ、また雨がひどくなった。出合であとからきた2人を加え、わたしたち7人は雨のなかを小屋に帰る。翌日は1日中雨が降り、わたしたちは静かな小屋生活を心ゆくまで味わう。昔と同じように谷川は雨が多い。静かにねていると、いつのまにか昔に帰ったよう。夕方、雲が切れだし明日の天気を約束した。みんな初めての一ノ倉にはりきる。

2

わたしは谷川が初めての若い人たちに、まず谷川岳、一ノ倉のスケールを知ってもらおうと思い、やさしくて大きな壁をと考えた。そしてそれには一番長い第Ⅱルンゼ、ザッテル越えが最適だ。まずこれをやっつけよう。

それにこのルートは、わたしと渡辺兵力が開いたとっていい。小屋ができた1932年（昭和7年）

の頃には、すでに第Ⅳルンゼ(本谷)も、第Ⅲルンゼも登られていた。しかし滝沢は、下部のオーバーハングの滝にはばまれて、滝沢上部の広い地域が、まったく未知のまま残されていた。

下の滝の直登はあきらめて、この広い未知の領域になんとか第Ⅱルンゼ側から入りこめないだろうか、というのがわたしたちの最大の関心事だった。そこですでにわたしと兵力は1930(昭和5年)6月に一ノ倉の第1回試登を第Ⅲルンゼと第Ⅱルンゼ間の壁に向けた。そこから左に入る道をさがすためだった。しかし雨のなかを第Ⅲルンゼ左側リッペにおしつけられ、例の上部の大胸壁にさえぎられて敗退した。

小屋ができた年、1932年には、本谷テラスから直上、左にトラバース、そして直登する。ちょうど壁の半分ぐらいの高さで、ザッテルを確認、そしてトラバースの目じるしの岩の突起を発見する。ケルンを積む。しかしそのまま直登して、上のかぶりぎみの胸壁をリスによるむずかしい登攀ののちに、稜線にて、初めて壁を完登した。

翌年は、滝沢上部に必ず入れる確信のもとに兵力と準備をした。ところが当時慈恵医大山岳部にいた兄貴がこれをねらっていて、しかも3日前に学校が終って、先にでかけることになった。わたしは詳しくルートを説明し可能性を兄貴に全部教えた。彼のパーティーは7月20と21日に、滝沢上部Bルンゼ下の岩小屋にビヴァークして初登攀に成功した。わたしたちは3日後にあとを追い、Bルンゼを登って、15時間かかって1日で登りきった。こうしてわたしたち兄弟の前に、あの滝沢上部の広大な未知の領域がひらかれた。

その年の冬12月28日、29日にはわたしと兵力が、氷壁と吹雪、雪崩のなかをザッテル越え、Dルンゼ右稜を登り、2日ばかりで国境線に登りきり、帰りに幽ノ沢の大滝を雪崩とともに落下して九死に一生を得た。

翌1934年(昭和9年)3月には兄貴とわたしは、滝沢下部が雪崩のデブリーと氷でつぶいたのを見ずまして直登を企て、氷滝を登りきったところで、第一発目の雪崩に会う。一日中ハーケンに体を結びつけ、一ノ倉の雪崩見物をして無事退却する。この年の4月の末に、この同じルートをねらった日本登山会の中村、宮北パーティーの雪崩による墜落死という事件が起きた。

その年の夏は、今度は兄貴とわたしの相棒兵力が組んで、ザッテル越えを2回も登り、ついに滝沢上部Aルンゼの登攀に成功した。しかし兄貴の打ったハーケンにセルフ・ビレーしていた兵力が、ハーケンが抜けて墜落し、腰をひどくうつという事故にみまわれた。わたしがリーダーをおしつけられた東大の仲間とカクネ里に入っていた時だ。

父を早くなくしたわたしたち兄弟は、こんなことはみんな自分たちだけの秘密にしていた。こうした因縁がこの第Ⅱルンゼ、ザッテル越えのルートにはある。

3

1961年8月8日(火)。この日は予想通り快晴にあけた。わたしたち7人のさむらいは、朝5時50分に小屋を出発した。おととい通った上の大きなプロムナード、旧道を通って一ノ倉に入る。

ウィークデーと雨が幸いしてか、人影はさらさない。おとといの日曜は沢山の人がいて、よくみると氷化した雪渓を見物にくるハイカーが多かった。スイスのグリンデルワルドで上の氷河の末端を見物にくる観光客が多かったことを想いだす。谷川も観光地になってきたのか。

だが今日は人がいない。さっそく踏みあとをたどって雪渓まで登る。踏みあとといっても昔は文字通り細いものだったが、今は幅1メートルはある道だ。雪渓の溶け方はおそろしく速い。おとといは安心してその上にのれたのに、一ぷくしているあいだに轟音をたてて、まんなかが崩れおちた。

7時、右側の道をたどって、まわりこみ、雪渓の上におりて、それを登る。しかしヒョングリ滝はでてしまって、雪渓通し登れない。みると真正面に衝立岩中央稜の裾尾根の末端がこんもり緑の帽子をかぶって立っている。そのまんなかに大きな道がついているのがみえる。

雪渓の端から岩におり、ザイルをつけて、北稜の裾尾根のスラブをからみぎみに登って、中央稜の裾尾根の末端にとりつこうというわけだ。7人なので、2人、2人、3人のザイル・パーティーだ。わたしは2人組の先頭で、昔なつかしい逆層気味のスラブにとりつく。目の下はヒョングリ滝の滝つぼだ。この時4、5人の1パーティーがザイルもつけずに追いこしていった。

中央稜の裾尾根の頭に登ってみて、おどろいた。いい道がヤブのなかに切り開られ、その上、板座敷がのこっている。4、5日前テレビ中継をやって、カメラをすえたあとのことだ。このヤブ尾根の両側は、昔よく遊びにきた衝立スラブだ。この尾根の登りにももの凄く汗をかく。こんな暑い筈はなかったのと思う。昔はもっと寒かったようだ。中央稜のつけ根から、左ななめに初めて岩の感触をたのしみながら、南稜テラスにはいあがる。

先に登ったうちの連中は、すばらしい眺めにすっかりよろこんでいる。見知らぬパーティーは南稜登攀にとりかかる。昔は南稜テラスの存在なぞ知らなかった。わたしも初めてだ。なるほどこいつは

素晴らしい。目の下では、例の本谷の雪渓がにぶく光り、ブロックが豪音をたてて崩壊している。まるで氷河雪崩そのままだ。

この中央稜裾尾根—南稜テラスが本道となつたとすると、一ノ倉もずいぶんやさしくなってしまったものだ。本谷の氷化した雪渓とブロック崩壊の危険や、スラブにシュルンドをおりてうつるのに、アイゼン、ピッケルで身をかため、氷のブロックピンでアプザイレンした昔の苦勞と面白さは今はない。わたしたちがもってきたアイゼン、ピッケルはむだになった。一ぶくしたのち、9時40分に出かけて、これも立派な道を本谷バンドにおりる。しかし昔の本谷バンドはどこにいったしまったのだろうか。

そこはきたない岩くずに被われている。あのすべすべした浮石一つない段に腰かけて、目の下のスラブで流した汗を後ろのすんだ水たまりでいやして、一ぶくしていると、左、右の岩壁を、シュー・シューと音をたてて岩燕がとんでいたはずだ。

休む気もしないのですぐ登攀にとりかかる。第Ⅱルンゼは昨日の雨で水量が多く、ぬれるのがいやなので、昔のように右手の壁にとりつく。3つのパーティーは思い思いのルートをとる。

わたしの相棒ウマさんは、一番右でカミン状のところを直登する。こここそ29年前わたしたちが12月の奥壁を攻撃したときのとりつきだ。わたしが氷に手がかり足がかりを切り、氷からでている岩にハーケンをたたきこんだところだ。あの当時の記憶がまざまざとよみがえってくる。ウマさんのカミンの出口に打つハーケンの音も心地よい。

上の外傾した岩棚にでて、左へトラバースする。ここもあの時はつるつるの蒼氷だったところだ。すると3人組の先頭の中家がすばらしいバランスで登ってくるのが目の下にみえ、向うでは2人組のトップ〔補注-2参照〕の図体の大きいギーさんが、あざやかなクライミングをみせている。これだけ足のそろったパーティーで登るのはほんとうにたのしい。みるとこのバンドの右壁に真新しい埋めこみボルトがうめられている。確保にはいいが、銀色の環はまるで壁とチグハグだ。

みんなをまって、これからは冬と同じようにやさしい岩を左斜め上へと、第Ⅱルンゼに入るべく登る。浮石があり、最後のわたしは、向う脛をこぶし大の落石にかすめられる。とんでくる石に目をはなさなかったのだが、目の前の石にあたって、バンドがかわり浮かしていた左足をかすめた。少しのぼると血がにじみだしたので手当をする。ほんのかすり傷だが、向う脛は古傷だらけだ。グリンデルワルドのスキーで、牧場の柵にぶつかり、骨のかわりに柵を2本折った脛だ。脛に傷をもつとはこのことか。

第Ⅱルンゼに入る岩の突起もみおぼえがある。そこからは立派な道をたどればいい。滝沢右稜側からんで道をたどるとザッテルへの小沢になり、いわゆる峭壁門といわれている大きな石でふたされたトンネルをぬけて、ザッテルに立つ。このトンネルもおそろしく広がっていて、なんだかものたりない。昔は、ほんとうにトンネル内で、体をくねらせて上にポッカーでたというおぼえがある。

わたしたち2人が一番先きにザッテルに立つ。ここでもまたびっくりした。昔のたけの低い緑の草原とはうってかわって、夏草とヤブが、1メートル以上もおおいげっている。滝沢右稜の左手の頭に登ってみると、道がついていて、休み場になっている。この30年間に決定的に山はそして日本はあたたかくなっているのだ。すっかりがっかりしてみんながくるのをいっぶくしてまつ。

そこからまた大きな道に導かれて、滝沢の「広河原」におりる。しかしここも、どこをさがしても、もはや昔の広河原などはない。大きな岩くずに埋められた傾斜地だ。昔はほんとうにまったいらな、白い丸石のしきつめられた広い河原だったのに。

1時20分になったので飯にする。みんなは、高度感にすっかりよろこんで「すばらしい!」と感激している。「しかし、ながいですね! スタミナの問題になってきますね」という。でもアルプスやヒマラヤの経験が高度感や壁の大きさをわたしからうばってしまったのだ。そこを2時すぎ出発して、Bルンゼを登る。天気がおかしくなつて稜線がガスにつつまれたから。

なつかしいマッテルホルンも霧の中にも見えなくなつた。あの岩小屋も人のねたあとがある。踏みあとの道がよくついている。ガスの中をマッテルホルンの頭に登る。道はわたしたちが初めて登った通りについているのにはおどろいた。マッテルホルンのうしろのやせ尾根は、エーデルワイスや、高山植物、這松はどこへやら、ヤブが下からすごく生え登っている。山はたしかにあたたかく、そしてきたなくなつてしまった。

頭の上でガスの中に仲間の声がある。まもなくみんなのまつ稜線にぼっかり出た。午後5時だ。ザイルをといてまわっていると、南稜を登ったパーティーが国境線をたどってきたのに出会う。そういえば、今日の一ノ倉には、その他2人パーティーが第Ⅴルンゼを登っていたのがみえ、4、5人が第Ⅳルンゼあたりから下つていったのをみただけだった。ザッテルから滝沢上部には、わたしたちの他には誰もいなかった。

山はわたしのふるさと帰りを静かに祝ってくれたのだろう。それにしても、雪溪のとりつきからやっぱり 10 時間かかっている。スケールは大きい。満ちたりた気分がガスのなかをオキの耳、トマの耳へと大道を行く。しかし風にガスが切れてみえる越後側の青々した這松の海は昔とかわらず美しい。初めて頂上小屋をみる。それから西黒尾根の大道をかけ下りる。ザンゲ岩の鎖をみつけてなつかしがる。いそぎ足でガンゴウ新道をマチガ沢出合いへと下る。ここも始めてだ。途中から暗くなりデンキをつけておる。マチガの出会の旧道にでた時はほっとした。また雨がふりだした。雨の中をいい気分であらぶら小屋に帰る。もう午後 10 時だ。16 時間のアルバイトに、さすがに腹がへり、疲れを覚える。

小屋は今日は誰もいなくなるはずだ。東電小屋から鍵をかりてあけて入る。ランプをつけて、さて飯をたこうか、という段になって、食卓の上に、トマトやキュウリ、ソーセージが切って、きれいにお皿の上にのせてあり、新聞紙がかかっているのを見いだす。成蹊の若い人たちが、わたしたちが一ノ倉に登りに行っているのを知っていて、疲れて帰ってくる私たちへの心づくしなのだ。余った食料だとはいえ、この小屋でわたしたちがはじめたしきたりと精神が、この 30 年間立派に生きているのを見て、心あたたまる想いがする。暇のない若い仲間 2 人はその晩帰ったが、この小屋は、あたたかい飯にみちたりたわたしたちを、昔のようにいたわり、そして快よい眠りにさそってくれた。外は雨の音が激しい。

翌日は雨だったが、わたしは去りがたく、2 人の仲間とまた昔がたりに一日をつぶした。この小屋のしきたりと道徳と伝統について質問に答えた。そうしてみんなで小屋を徹底的に掃除した。

わたしたちはいつもそうしていた。まず小屋に入ると、ヒュッテン・ブーフの宿帖の方に署名し、前にきた奴を知る。そうして小屋を点検する。食糧、米はあまったら、いつも次の人のためにのこし、マキも外のぬれたのからとりこみ、危急の場合、小屋に入って、いつでも手近の乾いたマキをたけるように配慮する。わたしたちにこんなに自由な快よい生活をさせてくれた小屋なのだ。あとからくる人はだれだか知らなくとも、わたしたちと同じ自由を享受する権利をもっているはずだ。そのためにわたしたちは、入ったときの状態に小屋をしておく義務を負う。

他人の自由と、わたしの自由は等価交換であり、権利をもつと同時に等価の義務を各人は負う。これが民主主義だし、ヨーロッパのアルプスの山小屋でもある。この伝統がここ虹芝寮には、人知れず 30 年のあいだ引きつがれ、うけつがれていたのを発見した。この黒びかりする柱がすべてをみ、すべてをきいてきたのを想うとき、静かなストーブのほとりの晩は、雨とともにひとしを感動的だった。

翌日は快晴にあけた。もう一度、一ノ倉に入り雪溪のところであそんで、壁をながめた。そして満ちたりた心をいだいてついに汽車にのった。「またあいましょう!」と山に別れをつけて。

〔補注〕

本稿は神戸大学山岳部長であった故高木正孝先生がアルプ第 54 号(1962 年 8 月)に寄稿されたものである。先生はその掲載誌が発行された'62 年 8 月には大学が派遣した調査チームのメンバーとして南太平洋に滞在中であったが、活動中に行方不明となられた(現地政府の死亡確定は'62 年 10 月)。学生時代からの谷川岳登攀のパートナーであった渡辺兵力氏は自著「山・スキー・みち」('65.12.20/泰文館)にアルプ記事を転載、遺稿として出版された。本稿はこの遺稿を再編して ACKU-News 49 に紹介するものである。

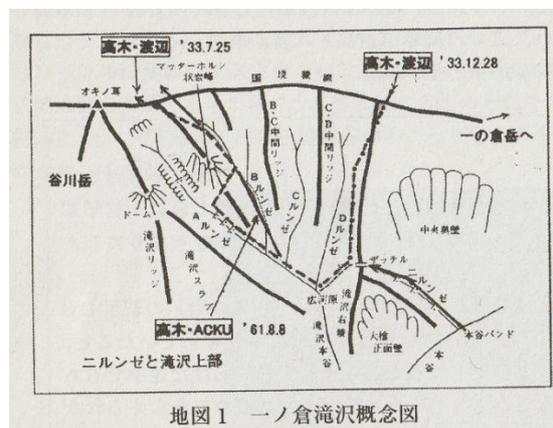
昭和 30 年代の中頃(1960 年)には関東に在住する ACKU メンバーが多くなった。この関東勢に当時計画されていた海外遠征の参加予定者も加え、高木先生をガイド役に迎えて実現したのが本稿に記録された'61 年 8 月の谷川山行であった。文中には 30 年ぶりの滝沢で自ら切り開いたルートを OB 達と再登し、嬉々として 3 パーティーを先導する先生の姿がある。

'61 年 8 月 8 日の滝沢登高のパーティーの編成は:-

- ① 高木正孝・山内敦人(ウマさん)
- ② 金井健二・川口俊幸
- ③ 水口一義(ギーさん)・中家 章・豊田寿夫
(第 2 次中央アンデス遠征に行った若手 OB)

文中の〔補注-1〕(P38)前田精三 OB は 8/7 下山済(8/20 再入山/滝沢完登)。〔補注-2〕(P40)水口 OB は③パーティー/ラストで登った(高木初稿の誤記)。

なお、62. 8. 12-17 の ACKU 谷川合同合宿では山岳部 3 人・OB3 人混成の 2 パーティーが滝沢を完登した。また、滝沢における高木先生他の登攀記録は右図(News 37 より転写)を参照願いたい(豊田寿夫記)。



記憶に残る 1000 山登山の一つ 鈴鹿の天狗堂 988m

井上達男

ACKU news も 49 号になった。1975 年 10 月 1 日創刊から 50 年、半世紀続いている。創刊の動機に第一次シェルピカンリ遠征の報告を会員の皆様に届ける場が「山と人」以外になくタイムリーに行えなかったことがきっかけだった。それから 50 年。伝統の継承が絶えることなく今後も続いてほしい。

我が 1000 山登山も老齢と体調不良で幕を閉じたが、記憶に残る山行を ACKU news に発表させてもらっている。今回は恩師故平井一正先生と珍しい体験をしたので紹介したい。2025 年 11 月 15 日記



日 時: 2006 年 7 月 9 日
メンバー: 平井一正 井上 達男
天 候: 曇 下山後雨

何年ぶりの H 先生との山。平均年齢 66 歳だ。I 君や Y 君を誘ったのだが皆予定が合わずに二人だけの山となった。九州西方海上を台風が北上中でそれに刺激された前線の影響で各地に大雨の予報が出ていた。今回の山は中止かと思っていたが、朝から薄日の射す天気。南風が湿気と暖気を運んできて日本の梅雨とはこれだと範を垂れているがごとき一日が始まった。

村は総出で道の草刈をやっていた。政所から上流のどの部落も総動員がかけられているらしい。草刈機を持った男たちと刈り取った草を片付ける女たち。若い人たちが混じっているのにはちょっとした驚き。

谷の最奥の部落、君ヶ畑は清和天皇の時代に木地師が発祥した土地である。大皇器地祖神社は 880 年建立。樹齢数百年の杉林に囲われている。神社の前には村人が 4 人ほど休んでいた。挨拶すると、「天狗堂ですか」と声をかけられた。ここでもっと村人とコミュニケーションを取っておけば最近の山の事情が入手できて被害を最小限に止めることが出来ただろう。それは鹿の生息する山には必ず住んでいる。

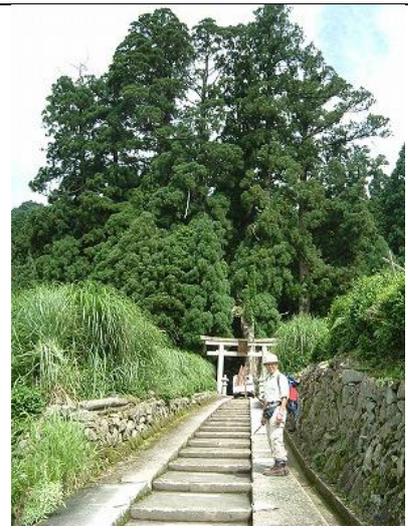
判っていることだが、災難とは忘れたころにやってくる。鈴鹿は名のごとく鹿が多い。今日も登山道に沢山足跡があった。だから当然予測できたことだ。これは反省点。Lessons Learned-1

昨日の雨露が落ち葉に残っている尾根筋。蒸し暑さは梅雨後半独特のもの。鈴鹿はやつらの住处であることはよく知られているのだが、襲われてからそれを思い出した。慌ててズボンの裾を靴下の中にしまい込んだのは靴から取り付いてズボンを信じられない速度で登ってくる二三匹を発見してからだった。

最近スリムになった H 先生、体重が 48kg になったそうだ。きっと上りは強いだろうな、でも長時間はエネルギー切れが起きるのではないかな、などと往年のヒマラヤニストのシニア度をチェックしているのだが、こちらも四捨五入 60 歳、最近の衰えは隠せない。先頭に行く H 先生はやつらの生息地帯を早く抜け出さんとピッチを上げる。身体からは蒸気と汗が吹き出る。H 先生、急坂を登る速度は 74 歳とは思えない速さだ。いくら急いでも靴から這い上がってくるのは止められない。熱感知器を持っているのか、獲物を良く知っている。我々はやつらには格好の獲物だ。稜線に出るまでおそらく何百匹という軍団が二人を襲ったことであろう。一生懸命追い払ったのだが、何匹かは防衛線を突破して二人の美味しい血をたっぷり吸った。傷口が H 先生の足に 2 つ、手に 2 箇所、私は右足に 2 箇所。天狗堂の頂上に着いて、シャツやズボンを脱いで点検したが、二枚の靴下の間に潜り込んだやつは下山するまで判らなかつた。靴下の上からうまく吸えなかつたやつもいる。一番憎いやつは神社から取り付いた尾根の登りで気付いた時、すでに右足のズボンの中に入っていた。それから頂上に着くまでじっくりと血を吸ったらしく、丸々太っていた。山頂で昼食休憩に入った時、H 先生にズボンが真っ赤な血に染まっているのを注意された。時すでに遅し。君ヶ畑に下山後、早速道端で靴とズボンとを脱いで点検。するとまた 4 匹も出てきた。H 先生は帰りの車の中で手の指を最後のやつに吸われてしまった。



大皇器地祖神社



神社の森と大杉



天狗堂 988m 頂上



平井一正先生

山頂は涼しい風が通って気持ちよい。最近運転するので考え付かなかった品が H 先生のリュックから出てき。発泡マットに包んだアルミ缶は今日の熱気も遮断して喉越し快感、カップ一杯を恵んでいただき感謝。次からは私もそれを忍ばせていこう。Lessons Learned-2

下りは湿った登山道が滑りやすい。スベラーズという道具を靴底に装着した H 先生、快適に下降を続ける。「君もどうだ」と採用を進められたが、内心「俺はまだまだ若いしバランスもいいぞ」と粋がって「いいえ遠慮しときます」と答えた。今度登山用具店に寄ったらチェックしよう。尾根筋の松林に出た。空が開けていたので通った覚えがなかったのがいけなかった。そこで下山路に迷いが生じた。左手の斜面に下っている踏み跡には赤と黄色の目印テープがあったがなんとなくあやしいと思ってしまう。これに従わずに右手の尾根筋を下った。しかし、すぐに間違いに気付いて引き返した。これで 15 分はロスしたか。再び下り始めると記憶のある松に出会った。天狗堂の姿を写真に収めた場所だ。話し込みながら登っていたので道を詳しく観察しなかった罰だろう。山は藪山でも甘く見てはいけな。これは Lessons Learned -3

大皇器地祖神社まで下った。二人してお参りする。杉が大きく育っている。数百年は経っているのだろう。神社も古くて神秘的な佇まいだ。境内の清水は飲めた。君ヶ畑は古い村だ。茅葺の家は一軒だけ見た。大半がトタンで屋根を覆っている。バス停には小さな木地師の作品の展示場があった。直径 7-80cm の盆は値打ちものだと思った。

君ヶ畑を出発する頃、梅雨空から雨が落ちてきた。蒲生野を横切る頃には本降りになった。今日の登山中に降らなかったのは幸いか、不幸か。少なくとも雨だったらやつらは出てこなかっただろう。登山中は体中に取り付くやつらに大半の神経を使った。実は、へびも沢山出てきた。7 匹は数えた。マムシだったかも知れないが、今日は彼らに気をとられている暇もなかった。

山のあとは温泉。滋賀には温泉が少ない。十二坊温泉まで足を運ぶことにした。温泉にゆっくり浸かって、休み場でルオニイ峰の標高について地図や写真を使って議論していたら、一旦閉じていた傷口が開いて鮮血が流れた。やつらは神経を麻痺させ、血の凝固を妨げる薬液を注入するのだそう。H 先生も血が流れている。温泉客は奇異なるものでも見るような目で我々を見ていた。私のズボンの右足は真っ赤に染まっていた。

あれからもう一週間が経ったが、まだやつらに咬まれた痕が痒くて腫れている

※2006 年 7 月 9 日の記録

9:12 君ヶ畑 下 parking

9:18 大皇器地祖神社

9:51 稜線 旧 NHK テレビアンテナの Cable 敷設尾根沿いに登る

10:12 尾根の松

10:48-11:30 天狗堂 988m

14:20 稜線からの下山口

14:43 大皇器地祖神社 お参りする

14:55 Parking

鈴鹿の山や湖北の山は鹿の被害が凄まじい。稜線の山野草は笹も含めて食べつくされ、残っているのはトリカブトのみという場所もある。また、鹿は足に付けてヤマビルを運び至る所に繁殖させている。厄介な蛭の話でした。

十勝岳・赤岳・黒岳登山報告 (2025.7.13~7.17)

大竹口誠治

北海道の百名山で唯一残っていた十勝岳を単独で登り、その後、元の会社の山の会の人と大雪山系を縦走しましたので、以下の通り報告いたします。

1. 行程

7/13 (日) 北海道へ行くのは普段は飛行機であるが、一度は、鉄道で移動してみたいと考え、大宮から7時頃の新幹線に乗り、函館まで行き、後は、在来線を乗り継ぎ、旭川経由で美瑛駅に17時過ぎに到着。そこからバスで白金温泉へ移動し、18時過ぎに白金温泉のキャンプ場に到着し宿泊した。広くて気持ちの良いキャンプ場で、事務所の人も愛想が良く、いい人であった。

7/14 (月)

十勝岳登山

0400.キャンプ場発 0415.登山道入口 0505.望岳台着、0525.望岳台発、0625 十勝岳避難小屋、0750 昭和噴火口 0900.十勝岳山頂着、0910 山頂発、1035.十勝岳避難小屋着、11.20.望岳台着、1135 同発、12.20 キャンプ場着

朝の3時ごろには既に明るくなっていた。キャンプ場から望岳台への道(望岳台歩道)はまっすぐ伸びており、ずっと登りであった。1時間近く、かかって望岳台に到着。そこまで車で来て登る人が結構いた。最初は緩やかな登りであるが、十勝岳避難小屋辺りから傾斜が急になった。結構若い人が登っているためか、どんどん抜かされた。今年初めての本格的な登山だったので、調子はもう一つだった。途中まで暑く、熱中症のなりそうであった。昭和噴火口辺りから風が吹きだして、暑さがようやく収まった。9時頃に十勝岳に到着。頂上からは昔登ったトムラウシや旭岳方面が良く見えた。

頂上からは、途中1回休んだだけで、11時20分頃に、望岳台に到着し、水分補給を行い、望岳台歩道を歩きキャンプ場に12時20分頃に戻った。その後、事務所棟で生ビールを飲み、携帯の充電をセットした後、白金温泉ロイヤルパークホテルで日帰り温泉に入り、コインランドリーで洗濯、乾燥をして15時頃にキャンプ場に戻った。キャンプ場の標高が600M、十勝岳山頂の標高が2077Mあるので、標高差1500M弱の日帰り登山になり、結構、疲れを感じた。

7/15 (火) キャンプ場から層雲峡 Hostel へ移動。

7/16 (水)

0450 発、0540 銀泉台着.0618 同発、0728 第一花園上着 0740 発、0900 駒草平、0925 雨具を着る、11:00 赤岳着、11:10 赤岳発、1200 白雲岳分岐、1310 白雲岳避難小屋着

5時前に車で、銀泉台に移動。トイレや登山届を提出して6時20分頃に出発。道は、最初は緩やかであったが、駒草平を過ぎた地点から徐々に傾斜が急になった。途中で雨が降って来たため、雨具を着る。その頃に、昨日、同じ Hostel に泊まっていて、5時発のバスで移動して来た10名以上の一行に抜かされた。赤岳までは途中、雪渓があったりして、意外と時間がかかり、11時頃に赤岳山頂に到着。雨で視界は聞かず、眺望はゼロで

あった。小泉岳までの途中で一時、風雨が強くなった。12時頃に白雲岳分岐に到着するも、視界が効かないので、白雲岳登頂は諦めて、避難小屋へ向かう。途中、雪渓を横切ったり、避難小屋の手前で水汲みをしたりして、13時過ぎに白雲岳避難小屋に到着。避難小屋は雨でキャンセルした人がいたため、30名で満員の予定の所、20名弱の宿泊だったため、ゆったりと寛げた。

7/17 (木)

0520 発、0555 分岐着

0645 北海岳着、0755 黒岳小屋、0815、黒岳山頂着、0825 発、0915 リフト乗り場着、0925 発、10:00 ロープウェイ駅着、1020 発、10:30 層雲峡着

4時に起床して、大竹口だけ、5時20分頃に小屋を出発。霧の中、順調に進み、6時45分に北海岳に到着。そこからは、徐々に霧が晴れて来て、黒岳小屋への続く道は、お花畑が綺麗だった。黒岳小屋に立ち寄ってみたが、ネパール人らしきスタッフが忙しそうにしていた。きっと、吉井君の知人だと思った。黒岳山頂からはかなり急な下りで、リフトから登って来る人が多く、時間待ちが多かった。リフト乗り場から予定と通り、登山道を下るも、ほとんど人が通らないためか、整備されておらず、途中、落ち葉で見えなくなった穴ポコに入ってしまう、足首を捻挫してしまった。かなり痛かったが、ロープウェイ乗り場までもう少しだったので、何とかロープウェイ乗り場まで歩いて、後は、ロープウェイを利用して、10時半頃に層雲峡に到着した。その後、預けている荷物を取りに Hostel へ行き、パッキングをした。Hostel ではシャワーが出来なかったので、11時からオープンしている黒岳の湯へ行き、温泉に入り、着替えを済ませ、ビールとおつまみで、下山を祝った。



積雪期の甲斐駒ヶ岳

山本恵昭

黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳。なが〜い。そして、危険地帯がいっぱい。

3月8日尾白川溪谷駐車場を7時50分発。ジグザグとひたすら登る。途中、なにか気配を感じてふと見上げると、カモシカがこちらを見ていた。花谷さんのガイドツアーと抜きつ抜かれつ、雑談。やがて、急な鎖場や梯子が次々と登場。

七丈小屋に15時半。少し上がったテント場は、積雪のために傾斜地。表面が凍りついてバリバリ。ピッケルを振り回し、1時間ほどかけて整地。やっとテント設営。

9日、夜半に降雪があり、凍ったモナカ雪の上に新雪が30cmほど。いやらしい雪の状態。暗いうちに出発する予定だったが、不安があるので5時45分、薄明るくなってから出発。少し登ると風もきつい。八合目から見るルートは迫力十分。岩を巻いたり、ルンゼを登ったり。甲斐駒さんは、なかなか手厳しい。

7時45分甲斐駒ヶ岳山頂に到着。風もおさまり、快晴のもと360度の展望。仙丈ヶ岳、北岳と間ノ岳、地蔵岳、そして、富士山。遠くには、八ヶ岳、北アルプス、中央アルプス。

行きはヨイヨイ、帰りは怖い。急な所はバックステップで。モナカ雪は強く蹴り過ぎると、割れて中はサクサク。割れたブロックが足に絡んでくる。何度も自分に言い聞かす。慎重に、慎重に。テントに9時半。撤収していると、花谷ガイド達も下りてきたので、ご挨拶。こんなところにお客さんを安全に連れて上がるなんて、やっぱりプロガイドは凄い。ひたすら下って、駐車場に15時40分。疲れたけど、充実感がじわりじわりとこみ上げてくる。

この2日間で、事故2件に遭遇。

8日テントを設営していると、すぐ上の樹林帯に県警ヘリが何度もホバリング。救助されたもよう。

救援に駆けつけた花谷ガイドが下りてきて「やはり、滑落でした。表面が硬いモナカ雪で注意が必要です」と。

9日核心部のルンゼを下山中、20mほど先を下っていた男性が滑落。ステップが崩れてそのまま崩れた雪に乗った状態で滑り、視界から消えた。体をひねったように見えたので止まったかと思い、声をかけるが返事はない。下っていくと、同行者ともうひとパーティーがいて、さらに下の急斜面を落ちていったそう。すでに、救助要請済とのこと。何度か県警ヘリが飛んでいたが、厳しいだろう。

下山後、ニュースで「県警ヘリが意識不明の男性を発見。雪崩の危険性が高いので、いったん救助を断念。500m 滑落か」との報道。一刻も早く救助搬出されることを祈ります。

ここ数年の異常気象。寒暖差の激しい天候の繰り返しによる不安定な雪の状態。今までの経験だけに頼るだけでは、安全を担保できない状況にあることを理解しなければいけない。そんなことを痛感した。

P. S. 12月に、某登山サイトに掲載されているのがこの方のことではないかと、知人から連絡が入った。それによると、彼は54歳。7月に遺体が引き上げられて、その後、DNA鑑定に時間がかかり、11月にやっと遺体の受け取り火葬を済まされて、家族のもとに帰ることができたそう。残された方の辛い気持ちに心にしみる。ご冥福をお祈りいたします。



残雪期の水晶岳

山本恵昭

新穂高から奥黒部の雄、水晶岳へ。

4月25日8時新穂高発。左俣谷林道を歩き始めてしばらくすると、対岸からの大きなデブリが道を塞ぐ。まるで製材所の如く大木が積み重なっている。一方、いつもならデブリランドの小池新道にはほとんどデブリがなく、歩きやすい。なんだか変な積雪状態。

大ノマ乗越から弓折岳を越えて行くが、雪がゆるんで踏み抜き多発。そして、頻繁に落とし穴に腰まではまる。体力気力を消耗。トレースがあると思って近づくと、真新しいクマの足跡。いままで見たなかでは、一番大きな足跡。18時40分、なんとか暗くなる寸前に双六小屋に到着。雲が赤く焼ける。

26日、昨日のペースでは、とうてい水晶岳には届かないと、朝から諦めモード。5時15分発、とりあえず、三俣山荘まで行ってみよう。快晴、絶景。三俣蓮華岳まで来ると、水晶岳がぐっと近い。

天が味方をした。寒気が入り、雪は硬くしまったまま。この状態なら、鷲羽岳に登らず、黒部源流経由で、水晶岳に届くかも。風が強いので、三俣山荘の風裏に TENT を張らせてもらう。

9時発、アタック装備で出来るだけ標高を下げないようにトラバース。10時岩苔乗越までアイゼン歩行。さらに少しトラバースを続けると、あとは夏道で水晶小屋に11時15分。水晶岳間近のところ、先行4人パーティーが引き返してくる。その先の雪壁で断念したそう。10mほどの雪壁を慎重にキックステップで越えると、あとはまた夏道となる。

水晶岳山頂に12時20分。目の前に、祖父岳と雲ノ平。その奥に、黒部五郎岳から薬師岳とたおやかな山並みが重なる。赤牛岳の遥か向こうに立山連峰。東沢谷を隔てて、裏銀座の山々。振り返れば、鷲羽岳の奥に槍ヶ岳。一生、目に焼き付くであろう絶景だ。

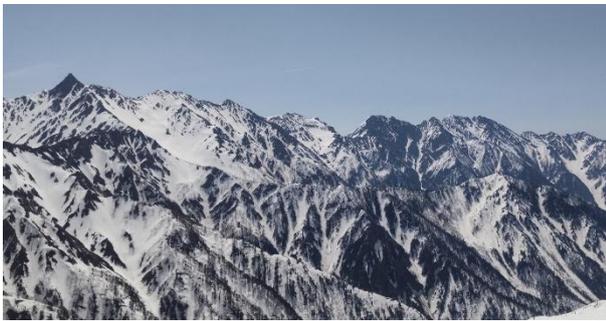
来た道に戻り、最後はワカンを履いて登り返し。16時三俣山荘に戻る。風はさらに強くなり、雲が出て気温も低い。靴が凍る。夜には風が止み、満天の星空。

27日、6時発。三俣蓮華岳から丸山への間、何度も振り返る。水晶岳、鷲羽岳、薬師岳、黒部五郎岳、雪を纏った黒部源流の山々が見送ってくれているかのようだ。また、逢う日はあるのかな。

双六小屋8時30分。弓折岳手前で、雷鳥に遭遇。トレースの横にいてぜんぜん逃げないなと思っていと、カップルだった。雄は夏羽へ入れ替わり中のようなのだが、雌はまだ冬羽のまま。大ノマ乗越からの下りは雪が緩み、踵に体重を乗せてザクザクと快適。新穂高に15時。

天候に恵まれて、なんとか、水晶岳にたどり着くことができた。最初は、6年前に雨で敗退した赤牛岳へリベンジするつもりでいた。そのときは山頂には届かなかったが、高天ヶ原温泉の河原露天風呂、獣の楽園温泉沢、スキー三昧の楽しい山行だった。今回の水晶岳で、体力の限界か。この歳では、もう雪の赤牛岳に立つことが叶うことはないだろう。

槍ヶ岳～穂高岳



鷲羽岳、ワリモ岳、岩苔乗越、水晶岳



水晶岳より、祖父岳～雲の平、奥に黒部五郎岳



赤牛岳、立山、後立山の峰々



2026年ACKU／東京支部新年会報告

小林 功

1月16日にACKU／東京支部の新年会を、有楽町の東京六甲クラブで行いました。以前は同じ有楽町ですが、皇居側に少し歩いた帝国劇場ビルの地下2階に『凌霜クラブ』として、旧制大学の同窓組織としてあり、伝統を感じさせる場所として愛されて来ました。重い木の扉を開けて、少し古めかしい空間で、餃子や焼きそばをつまみ、ビールやウイスキーを飲んで、スライドを見ながら、山を語る場所として、私もとても気に入っていました。

しかし帝国劇場ビルの建て替えのために、2025年3月より『有楽町電気ビル』の南館1階に移転になりました。新しい場所は有楽町駅のすぐ近くで、垢抜けたビルの中にあります。以前の6割くらいの広さでしょうか。機能的には一通り揃っており、ニュートウキョーからのケータリングも出来ます。さて、当日は豊田さん、山口さん、酒井さん、中川さん、大竹口さん、小林の6名が集まり、久しぶりに、近況や最近酒井さん、中川さんが登られたネパールのヤラピーク登山の話をお聞きしながら旧交を温めました。酒井さんが編集されたビデオは、下記からもご覧頂くことが出来ます。

https://youtu.be/WB_T_JCPCpY?si=tJS0XzEIPlcAWtwi

他の体育会系倶楽部のOB会の様子に詳しい訳ではありませんが、年代を超えて、幾つになっても、昔の学生時代の話から、情熱を賭けて登った山の話、数々の失敗談などを、フランクに会話できるこの山岳会の繋がりや、人生という長い時間軸からみても、かけがえのないものであると感じます。私にとって人生の師匠、モデルみたいな方々と、またこれからこのような空間で、グラスを傾け、談義が出来たらと思っていますし、東京在住の、私より若いOBの方も気軽にこのような集まりに参加頂けるとありがたいと思います。



左から、小林、中川、大竹口、豊田、山口、酒井の諸氏（東京・有楽町の東京六甲クラブにて）

映画と本の紹介（田部井淳子氏）

大竹口誠治

昨年の10月末に公開された吉永小百合主演の「てっぺんの向こうにあなたがいる」はご覧になった方は多いと思いますが、ここで改めて紹介すると同時に、田部井淳子さんの他の著書についてもご紹介したいと思います。

シネマトゥデイの解説書を引用させて頂くと「1975年、女性初のエベレスト登頂に成功した登山家の多部純子(吉永小百合)は、女性登山家のパイオニアとして注目を浴びる。次々と山に挑戦する純子だが、そんな彼女に反発する息子・真太郎とのすれ違いや登山仲間との決別に悩み、病にも襲われる。しかし東日本大震災で被災した高校生たちの様子に心を痛めた純子は、病を押して富士山に登ることを決意し、自分の姿を通して彼らを励ますプロジェクトを立ち上げる。純子の夫・正明(佐藤浩市)は、純子とすれ違ったままの真太郎にプロジェクトへの参加を持ち掛ける。登山家・田部井淳子さんエッセイ「人生、山あり“時々”谷あり」を原案にしたドラマ。女性初のエベレスト登頂を果たした登山家が、家族との衝突や登山仲間との別れ、病との戦いを乗り越えながら、山に登り続ける」と記載されています。

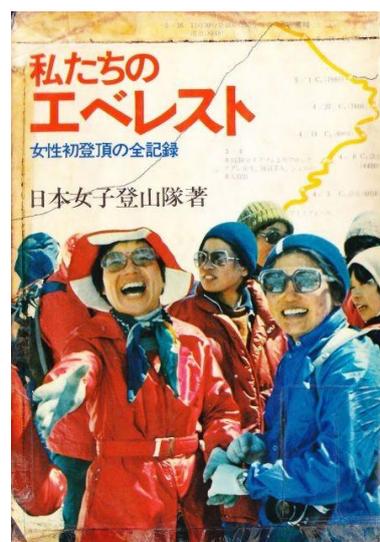
映画は地味ですが、田部井淳子さんの山への思いが良く描かれた映画だったと思います。ただ、映画の中の1シーンで、エベレスト登頂の報告打合会に出席する人が少なく、隊のコミュニケーションが良くなかったという場面があり、少し、意外な感じがしたので、他の報告書や著書を読みました。報告書は、1970年に女子登攀クラブがアンナプルナⅢ峰に登頂した「アンナプルナ 女の戦い」と1975年に日本女子登山隊が女性として初めてエベレストに登頂した「私たちのエベレスト—女性初登頂の全記録(1975年)」で、中古品はなかなか手に入らないので、図書館で借りて読みました。両山とも田部井淳子さんが登頂者ですが、色々な山岳会からの集合体であるためか、登頂メンバーに選ばれなかった人達の無念さや恨み辛みが、以下の通り赤裸々に記載されていました。



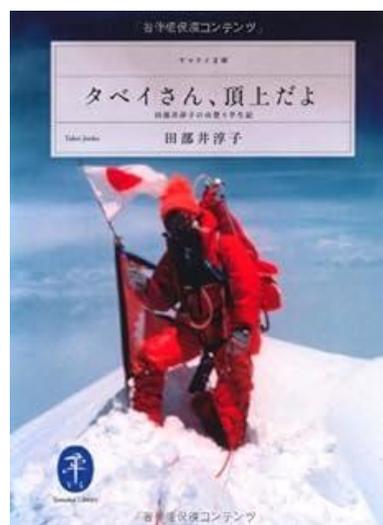
映画のポスター



アンナプルナー女の戦い



私たちのエベレスト



タベイさん、頂上だ



てっぺん

アンナプルナ 女の戦い

「アタックメンバー発表の夜、この日を境にして、それまでまがりなりにも和を保っていた我々の隊は、はっきり割れてしまった。そう感じる。頂上に立てる日を楽しみに荷揚げに精を出していた私達なのだ。いつも荷揚げばかりで、たまにはルート偵察にも出たいと心の中では思ったけれど、隊長や副隊長に煩わしい思いをさせてはいけないと自分を殺していた。この日を境にして私の心は凍ってしまった」

「(隊員の中には) 職を失った人、何十万円もの借金をした人、退職金の前借り、生命保険を担保にして金を借りた人、一度、ヒマラヤに来るためには1人、百万円はかかる…隊のなかから1人でも頂上に立てば成功である。しかし、山登りの目的はピークに立つことであってみれば、正直なところ、誰しものが、自分の足で頂上を踏みたいと思うのではないだろうか？」

「もし、登頂が成功すれば、(登頂者) 2人は陽の当たる場に立つだろう。私を含めた他の者は陰の人間。大きく考えてみれば、そのどちらも1つの歯車に過ぎない」

私たちのエベレスト—女性初登頂の全記録 (1975年)

「隊長が個人的な理由で急遽、一時帰国したためか、隊長への信頼感がなくなった。フランクに言ってほしかったが、隊に気軽に話せる雰囲気もなかった」

「(女性だけの登山隊であったので) 自分たちの力で登るか、シェルパの力を大いに利用して登るかで相当な議論があった。自分たちの力で登るのであればもっと人数を集める必要があった」

「それにしても、この忙しい撤収作業の時に、なんとなく漂っていた異様なムードは何だろう。何も仕事をしないで座り込み、古い週刊誌をめくりながら、これ見よがしにタバコをプカプカさせていた隊員がいたりした。また、それを問いただすことも出来ないムードなのだ」

「出発の準備をしていると、ひと足先に出了グループがあった、仕事なんかするもんか、こんなところに長居は無用だと言わんばかりに見えてしまう」

「百万円かけて荷揚げに来たんじゃないんですよ、そんなら、私はここから降りますと発言する人もいた。」

他に紹介したい著書としては、アンナプルナⅢ峰及びエベレスト登頂の詳細を記述した「タベイさん、頂上だよ」とご主人の田部井政伸氏が書かれた「てっぺん」があり、この本は夫から見た奥様の様子が良く書かれている本でした。

追記

昨年の11月19日～30日に田部井淳子回顧展を見に行きました。田部井夫婦が川越在住ということで、映画の上映に合わせて開催されたものです。小さいブースでしたが、田部井淳子さんの足跡が良く分かる展示になっていました。



以上

第六章 例会山行報告

第 258 回例会 氷ノ山千本杉ヒュッテ山行記録

山田 健

山行日：令和 7 年 3 月 1, 2 日

参加者：山田 健 山本恵昭 城間一輝 以上山岳会

長屋徹也 程研塚 吉武裕登 石川裕鳳 以上山岳部

小黒節郎 井川浩彰 上森文子 木下史朗 山内幸子 野村 康 以上日本山岳会

(山本恵昭 記)

今年も、神戸大学山岳会の氷ノ山ヒュッテ例会に参加。

社会人 1 年目 OB と学生のアッシーくんを担当。アッシーくんは、死語？うちのポンコツは、彼らには狭かったらうけど。

神戸大山岳部の学生 4 名 + OB 2 名 + 日本山岳会関西支部の 6 名、私を入れて計 13 名。10 代～70 代の 3 世代？合同登山。

3 月 1 日、快晴のもと、氷ノ山国際スキー場から東尾根経由で、神戸大ヒュッテへ。

山スキー 3 名、あとはワカン。若者先行、高齢者はボチボチと。

ヒュッテに着くと、久しぶりに雪面と 2 階の屋根がつながっている。学生達が、雪に埋まった入口を掘りだして、階段を作ってくれていた。

一息入れて、今日のあいだに山頂を往復。明日、予定していたハチ高原までのブン回しは、雨予報のため中止ということに。

17 時 20 分の氷ノ山山頂。西日に、山々が、皆さんの顔が、赤く輝く。下りはサッと滑って、アッという間にヒュッテに戻る。

2 日、朝から小雨で、忍耐の下山。グサグサの腐れ雪、じわりじわりと服に染み込む雨。所々でワカンチームを待ちながら、意地を張って東尾根避難小屋近くまでスキーで滑り降りる。

避難小屋からはツボ足で。最後に、スキー場のリフト 1 本分、雨でがら空きのゲレンデをハイスピードで快適に滑って、終了。

下山後は、ハチ高原のねむの木山荘へ。控えていた OB さん達からご馳走の連打。疲れた身体が癒された。感謝。

学生達の純粹な山への想い。70 歳後半を過ぎても、止まぬ山への情熱。両者から、良い刺激を受けた。

神戸大ヒュッテ泊 冬の氷ノ山」 上森文子 記

3 月 1 日(土)晴

今回は営業中のスキー場のリフト 2 本を乗り継ぎ登山口へ。スキー組と登山組に分かれてスタート。先行者の踏み跡を追いながら歩く。雪も多く時々ズボットはまりながらヒュッテに到着。先行してく

れた現役生が雪の中から小屋開けをしてくれていた。翌日の天気は確実に雨なので、今日に山頂を踏んでおこうとの事でワカンを装着して山頂へ。ワカン歩きも楽しく、山頂では美しい夕陽と 360 度見渡せる夕陽に染まる雪景色に感動。小屋へ戻ると現役生の皆さんが温かく美味しい晩御飯を用意してくれていた。有難く頂きながら、楽しい団欒のひと時を過ごす。

3月2日(日)雨

気温が高いおかげで雨のスタート。ワカンを装着してスタートしたが、雨で雪がグズグズの状態になり、現役生が先頭を歩いてくれたが足がズボズボと深みにはまり抜けなくなり、何回も助けて頂いた。途中でスキー組と合流して下山完了。その後、ねむの木山荘で美味しい昼ご飯を頂き解散となった。2日間で全く違った雪の状態、荷物の重さやパッキングの大切さ、ワカンを装着しての歩き方など勉強になった充実した2日間だった。





氷ノ山千本杉ヒュッテ整備例会報告（第 259 回例会）

山田健

今年もヒュッテ整備例会を 2025 年 6 月 7 日、8 日に実施しました。参加者は、山岳会：壺阪さん、居谷さん、森長さん、山本恵さん、山田 山岳部：長屋(3 回生)、藤原(3)、石川(2)、吉武(2)、天明(3 編入)、今尾(1)、藏本(1)、濱田(1)、水谷(1)君。

今回の整備のメインは薪づくりでした。昨年の整備山行ではヒュッテ修繕用の木材の荷揚げに終始したため、薪づくりができなかったことから、秋には薪が不足気味になり、3月のスキー山行でほとんどの薪を使い切っていたのでした。幸い今回は現役が多数参加してくれたので、たくさんの薪づくりができました。

さて皆で薪づくりをしていると、長さ50センチくらいの蛇がにょろにょろとヒュッテの近くに出てきました。頭が三角形なのですぐにマムシ君だとわかりました。誰かが嘯まれてもすると大変なので、すぐさま生物学教諭の山本恵昭さんが左手に持ったナタでマムシ君の首根っこを押さえ、右手のこぎりで胴と頭を分離、哀れ、マムシ君は昇天してしまいました。あまりの鮮やかさであつという間の処理でした。それでも胴体の方はまだまどくねくねと動いていましたが、これが現役たちの恰好のおもちゃになり、振り回したりして遊んでいましたが、なんと最後には彼らによって皮を剥がれ、内臓を取去って夕食時に串焼きとなって食卓に並んでいました。まさに哀れとしか言いようがない！私も一口いただきましたが、小骨が多い食感であり美味とは言い難かった印象です。

8日は朝から天気良かったので、全員で頂上を往復し、昼前には大段平に下山しました。いつもながら参加者の皆様ご苦労様でした。おかげでヒュッテは今年も快適に利用できます。



雷鳥沢サマーキャンプ例会報告（第 260 回例会）

山田健

今年で3回目となる雷鳥沢サマーキャンプ例会を7月25日～29日にかけて実施しました。なお、来年からは雷鳥沢から徳沢に場所を変えてサマーキャンプを実施したいと考えています。

参加者 居谷千春、坂本淳、松村政則、山本恵昭、石原敏雄（阪大OB）、山田健（世話役）

行動概要

- 7月25日 山本 折立から太郎平、薬師、スゴ乗越まで
7月26日 山田、居谷、坂本、松村の4名室堂から雷鳥沢キャンプ場入り
山本 スゴ乗越から五色が原
7月27日 居谷、坂本：一の越から立山三山、別山、雷鳥坂
松村：一の越から雄山往復、室堂へ下山
山田：一の越から浄土山、鬼岳往復
石原：室堂から雷鳥沢キャンプ場入り
山本：五色ヶ原から雷鳥沢キャンプ場入り
7月28日 山田、居谷、石原：奥大日岳経由で大日平小屋泊
坂本、山本：室堂へ下山
7月29日 山田、居谷、石原：大日平小屋から称名滝へ下山

各人行動報告

（山田）

26日 山田、居谷が車で13時に立山駅到着、13時40分のケーブルカーで美女平へ。この時雷雨が激しく、一時ケーブルカーが運転中止となるが、すぐに雷雲は去り高原バスで室堂に着くころには雨が上がっていた。扇沢から来る坂本、松村は雷雨を室堂ターミナルでやり過ごし、我々が室堂に着く直前に雷鳥沢に向けて先発した模様。我々も後を追う。雷鳥沢では管理小屋のすぐ前をテントサイトとする。

27日 朝5時半、4人で一の越に向かう。朝が早いので一の越はまだそんなに混んではいなかった。槍、穂、水晶、笠とよく見えている。3人と別れて、浄土山方面に向かう。浄土山（富山大の研究施設）では五色が原から北上してきた山本さんとニアミス。ちょっとの差で彼は室堂展望台方面に降りて行ったようだ。さて、浄土山から鬼岳、獅子岳方面を見下ろすとかなりの高度差があり、戻ってくるのかなり体力が要りそう。最初は獅子岳まで行ってザラ峠を見下ろして戻ろうと考えていたが、適当なところまで行って戻ろうと弱気が出てくる。龍王岳の肩から急降下が始まり、遙か下に鬼岳との鞍部が見える。登り返しが苦しそうだと考えながら岩場を降りていく。鞍部から鬼岳の東面の肩に登り返す。そこから獅子岳と鬼岳の鞍部が見下ろせるが、これまたかなり下降していくことがわかり、ちょっと行くのをためらう。明日のこともあるので結局そこから引き返した。龍王の肩までの登り返しは覚悟を決めてゆっくりと登ると、案外早く登りついてしまった。浄土山から朝来た道を引き返す。あともう少しで雷鳥沢キャンプ場に着くところで、先に到着していた山本さんから付近に「熊が居るかも」と脅しのLINEが来た。半信半疑で下ると100mほど先に居た人（後で富山県警の係員とわかる）が「来ないで！クマが居る」と注意してくれた。その場にとどまっていると、しばらくしてダケカンバの林から真っ黒な大きな奴がのそのそと出てきた。50mほど先の登山道を横切って左の方へ。こちらは微動だにせずに離れていくのを待つ。かなり離れていったのを確認してさっさとキャンプ場へ逃げ帰る。帰るとまだ松村君が荷物のパッキングをしていた。2時にはバスに乗らないと富山発の列車に間に合わないと言っていたのでとっくの昔に室堂に向かっていると思っていたが、すでに1時を回っていた。結局富山でタッチの差で乗るべき列車を逃したことが後でわかった。一方、山本さんは熊見物に出かけたが、結局県警の人に危ないからと追い返されたようだ。

28日 居谷さん、石原さんと荷物を担いで5時半に大日方面へ。奥大日までは普通に登りついたが、その後の暑さと重い荷物に大日小屋までは汗が滝のように吹き出し苦しかった。大日岳頂上を往復。頂上には大日如来の木像が安置されていた。大日小屋からの大日平までの長い下りは足元に岩がゴロゴロしてすこぶる歩きにくい。大日平に近づいて木道が現れれば大日平山荘は近い。4時に山荘着。今日はどれだけ汗をかいたことか。ありがたいことにここにはシャワー施設がありべたべたした汗を洗い落とした。

29日 朝6時に山荘を出発。20分ほど下ると携帯電話が鳴った。相手は山荘のご主人、「入歯、

忘れてない？」しまったと思った、朝歯磨きするときに部分入歯を洗面所に置いたままだった。郵便で送ってくれるとのこと。そのまま下っていくと牛首の急斜面のところ、後ろから「入歯、持ってきたよ」と。山荘のご主人が後から追いついてきたのだ。今日は火曜日で山荘は休み、食料など買い出しと荷揚げをするために下界へ下るのだそうだ。我々を足の遅いパーティーとにらんで後から追いかけても捉まるだろうと読んでいたのだろう。ご主人には感謝である。9時車道に出た。荷物をそこにおいて称名滝を見物に行く、その後称名バス停まで下って立山駅へ。しかしここで石原さんがストックを置き忘れて立山駅で気が付いたため、折り返し称名バス停に戻るバスの運転手に頼んで1時間後に無事に立山駅まで持ってきてくれたそうだ。この日は忘れ物2件、いずれも親切な地元の方に助けてもらったことになる。

(坂本)

26日 塩尻駅で岐阜から来る松村君と合流。ここから私の車で扇沢へ向かう。扇沢11時半分発のバスに乗車。混雑のピークは過ぎ去った後で、思ったほどの混雑ではない。扇沢・室堂の往復のチケット代12,300円也。13時過ぎに室堂着。道中、天気は良かったが室堂では雷雨、どしゃ降り状態。1時間強、雨がやむのを待ち、小雨になったところで出発。雷鳥沢のテントサイトで山田さん、居谷さん(神戸組)が来るのを待つ。

27日 本日は、居谷さんと立山三山の縦走。山田さん、松村君とも一の越まで一緒。5時半発。天気は良い。立山の裾野に広がる山崎カールの登山道の歩行は、見晴らしが良く、本当に気持ちが良い。所々に咲く高山植物もきれいで癒やされる。7時半一の越着。山田さんとはここで別れる。松村君は本日帰宅のためこの先どうするか迷っていたが、意を決して立山の主峰である雄山まで登ることを決意。居谷さん、松村君、坂本 3名で雄山への急斜面を登る。雄山登山はメインコースであり、登山者は非常に多い。途中、振り返ると浄土山へつづく登山道を登る山田さんの姿が目に入る。あちらの登山道は、登山者もまばらだ。10時雄山着。頂上にある雄山神社には、大勢のパーティーが祈祷を受けるため順番待ち。祈祷後に行う万歳三唱の叫び声が3000Mの山々に響き渡る。松村君もここまで来たことを喜んでいようだ。そして、ここでお互いの無事を祈り、別れる。ここからは、居谷さんと大汝山、富士の折立と3000M級ピーク登頂の感触を楽しみながら、歩を進める。私は、平井先生の還暦登山で5月残雪期の雄山に登ったと思いこんでいたが、居谷さんに「内蔵助平からの山スキー登山だからあの時登ったのは富士の折立だよ。」と言われ、帰宅後、平井先生の著書「ひつじの足跡」を読み返したが、やはりその指摘通りでした。ここからは別山乗越までは二人にとって初めてのルート。鞍部付近は植物や岩もなくザラ場が続いている。立山東面の内蔵助カール側には雪が多く残っている。雪溪下部の平坦部には、旧内蔵助山荘跡が残っている。東にのびる真砂尾根の上部には新しい山荘が見える。だらだらとした斜面を登り、真砂岳11時45分着。この先、雷鳥沢へ向かうエスケープルートは使わず、主稜線をたどり、別山へ向かう。大きなアップダウンはないが、同じようなだらだらした道が続く。途中、剣岳八峰下部のマイナースラブが見えるも、次第に雲が湧き立ち、待望の剣岳の景色は怪しくなる。別山から逆コースで縦走してきた男性が、早朝は雲もなく剣岳がぼんやり見えましたがよと会話を交わす。二人ともだいぶへばってきたが、なんとか頑張り、別山12時50分着。北峰まで往復する。地図には、北峰からの剣岳の景色は良いと記されているが、あいにく今はガスの中。しばし、ガスが晴れるのを待つも、あきらめてもとの稜線まで戻る。居谷さんが、別山山頂の祠の下で、気持ちよさそうに服している。別山乗越までの道は、剣沢の景色が眼下に広がるも雪は少ない。剣岳の雄姿は、厚い雲に覆われ、時折、山頂、平蔵谷上部の雪溪が見え隠れしている。別山乗越14時着。ここまで無事立山三山ラウンドできた。後は、雷鳥沢テントサイトまで、のんびり下る。残念ながら、今回は雷鳥の姿を見ることはなかった。15時20分、雨に降られる前にテントサイト着。

28日 本日は室堂へ下山。大日岳方面へ下山組の山田さん、居谷さん、石原さん達とはここでお別れ。5時45分、私も荷造りをし、早々に室堂へ向かう。6時50分室堂着。室堂バスターミナルに荷をデポし、軽身で浄土山をピストンすることにする。後から来た、山本さんともここでお別れ。7時25分発。一の越へ向かう道は、すでに多くの学校登山者らが登っており渋滞。浄土山へ直接登るルートをとる。今日も天気は良い。途中、1ピッチして、最後の急斜面を登り切り、浄土山山頂8時50分着。帰路、浄土山からの急斜面を降りきった展望台で大休止。ここから薬師岳方面への眺めはよく最高だ。でも、長そうなルートだな。この景色を堪能し、しばしベンチに横たわる。隣では、カップルが「最高の景色！」とお互いの写真をとりあっている。長居しては、おじゃまなので、ゆっくり室堂へ下山し、帰路に就く。室堂、10時半着。みなさん、お世話になりました。

(松村)

27日 居谷さん、山田さん、坂本さんと私の4人で5時半に雷鳥沢を出発して一の越に向かう。私は、今日夕方5時過ぎ富山発の高山線の特急列車で岐阜の自宅に帰る予定だったので、時間を見ながら雄山を目指して行ける所まで登ることにした。コースタイム通りなら十分に余裕のある行程であるが、久々の登山である私にはやはり不安があった。

一の越に向かう登山道は、最初は川原とお花畑のなだらかな道だったので、素晴らしい眺望を楽しみながら歩くことができた。登山道は平坦から次第に登りになっていき、室堂からの登山道が合流する地点からは急登となった。喘ぎあえぎ登り、一の越に着く。

ここから見ると、雄山の頂上はすぐ近くにあるように感じる。登山道は、登山者の大行列となっていた。

「ここは覚悟を決めて頂上まで登ろう。」と山田さんに促され、私は山頂まで登ることにした。

山田さんは浄土山に向かわれたので、居谷さん、坂本さんと私の3人で雄山の頂上に向かって出発する。急な登りがずっと続く。やはり足が重い。私のペースが遅いので、次々と抜かれる。三の越でワンピッチとった後、最後の急坂を喘ぎあえぎ登り、なんとか頂上にたどり着いた。

雄山山頂は、一段と人が多かった。山頂神社には、大集団が参拝していた。

ここからは、居谷さんと坂本さんは立山三山を縦走されるので、私一人で雷鳥沢まで下山する。

一の越までの急な下りでは、遅々としてペースが進まなかった。12時までには雷鳥沢に着かなければと気持ちは焦るが、一の越からの下りもペースは上がらなかった。途中、登ってくる人から「熊がいるから気を付けて。」と声をかけられた。とても心配したが、熊に遭遇することはなかった。

ようやく雷鳥沢にたどり着いたが、もう12時半近くになっていた。管理小屋の軒先で、山本さんが休憩しておられた。急いで、エアーマットやシュラフなどのパッキングを始める。これにもてこずっていると、浄土山に登られた山田さんが下山して来られた。

室堂までは、最初の登りがきつい。一段と足が重くなる。

15時頃にやっとの思いで室堂に着いて、すぐバスに乗る。ケーブル、電鉄と乗り継いで富山駅に着いたが、予定していた岐阜行き高山線特急列車には、ちょっとの差で間に合わなかった。

駅員さんに聞いて、敦賀まで新幹線、そこから名古屋行特急列車に乗って、なんとかその日のうちに帰宅することができた。

私のスローペースに付き合ってくれた、居谷さん、坂本さん、帰りの電車のことでご心配をおかけいたしました山田さんには、今回大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

(山本) Facebook より

折立から入山し、薬師岳から立山へ。

神戸大山岳会の雷鳥沢例会は、今年で最後となる。あまり行かないコースから雷鳥沢を目指してみた。

7月25日 車を有峰林道料金所横の駐車場に停めて、亀谷温泉7時過ぎのバスに乗ろうと考えていた。しかし、なんと6時開門を待つ車の人が折立まで乗せてくれるという。感謝。

6時40分折立発。軽装の人のペースにつられて、ハイペースで太郎平小屋に10時。今日は薬師峠までの予定だったが、時間も早く、快晴の空が「スゴまで行け」という。

お花畑を愛でながら、ひたすら登り薬師岳山荘へ。この頃から、積雲が湧いてきたなと思っていると、急激に発達して積乱雲に。雷鳴が、遠くゴロゴロから頭上のバリバリに変わる。雷雲に囲まれて、恐ろしい。雨も降りだし、戻ろうかと思った。でも、雷雲はすぐに東へ流れゴロゴロは赤牛岳へ。なので、前進。すると、また新しい積乱雲が出来て、頭上でバリバリ。岩陰で小休止してやり過ごし、赤牛岳方面に移るとまた前進。そんな雷雲とのやり取りを繰り返しているとなかなか捗らず、薬師岳に13時40分。間山からグイグイ下って、スゴ乗越小屋に17時着。遠かった。

26日 朝は快晴。5時20分発、少し下って越中沢岳への急登。黒部川を挟んで、赤牛岳と薬師岳が背比べ。雲ノ平が平らだ。

越中沢岳に8時20分。急に北側の視界が開ける。五色ヶ原の向こうに立山連峰。その肩からひょっこり剣岳。

五色ヶ原山荘に11時着。まだ早いけど、昨日の雷雲のことがあるので早々にテント場へ一番乗り。素晴らしいテント場だ。お花畑の中にテント区画がある。トイレに行くのに足の置き場に迷うほど。目の前には、針ノ木岳から野口五郎岳までの山々が連なる。やはり、12時過ぎから雷雨に。雷雨での行動はもうこりごりだ。

27日 少し雲があるが、良い天気。5時発。悪名高きザラ峠からの登りは、案外スムーズに。それまでのアップダウンに、心が慣れたのかも。

獅子岳に6時30分着。目前の鬼岳と龍王岳がいかつい。雪渓をトラバースしたり岩場を登ったり。最後は、浄土山経由で雷鳥沢キャンプ場に10時到着。神戸大テントの横にテントを張って、管理棟の日陰でのんびり。やがて、他のメンバーが自分の山登りを終えて、次々と登場。なんと、雷鳥沢キャンプ場のすぐ近く、一の越から下る登山道横にクマが出没。県警の人が警戒にあたってくれている。下山してきた山田さんに写真を見せてもらう。距離50mほどとのこと。驚きだ。28日 大日平小屋を目指すメンバーを見送って、室堂に下山。立山駅から有峰口駅に移動しバスで亀谷温泉に行き、車を無事に回収。

今回のコースは、アップダウンが激しくて、自虐的。でも、その分、急な坂を登り終えて山頂に立つたびに、目の前にひろがる景色が劇的に変わる。しんどいけど、面白い山行きだった。



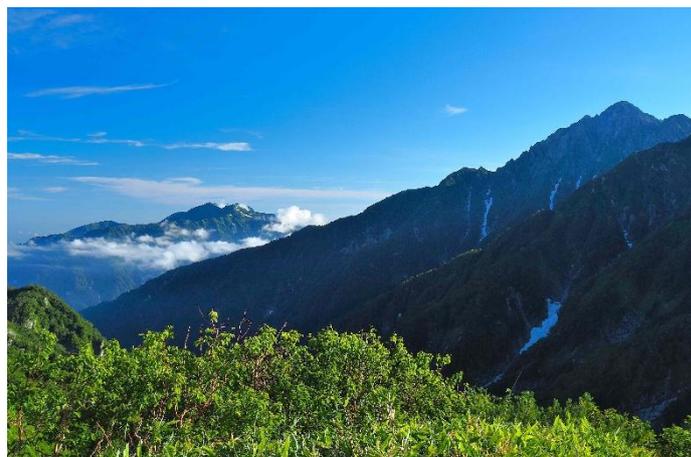
雷鳥沢キャンプ場



雷鳥沢キャンプ場にてビールで乾杯



雄山山頂



奥大日からの剣・毛勝



奥大日からの雄山



称名滝をバックに

海外登山研究会&忘年会（第261回例会）

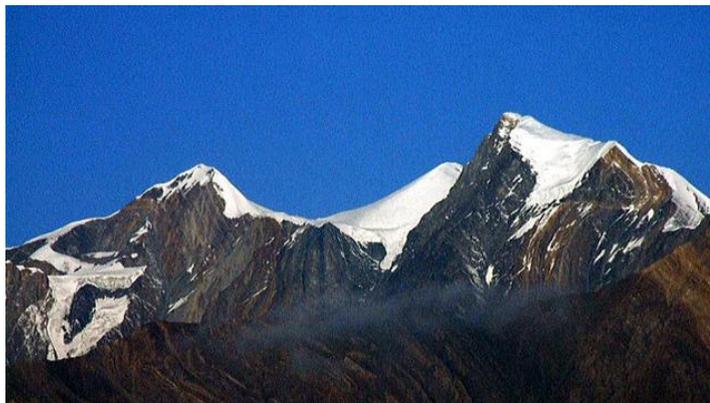
長谷川 浩

2025年12月13日、顧問の酒井先生のご協力を得て神大深江キャンパス梅木Nホールを借用し、現役による2026年ネパール・ヒマラヤ登山検討会を開催しました。研究会は、山岳部・山岳会合同の海外登山研究会とし、海外登山経験者を含む山岳会員や顧問の先生、現役部員が参加し、登山計画を出席者で共有、遠征実施に向けた意見交換、アドバイスをおこなう場としました。その前の10月に開催した情報交換ではアンナプルナ山群のタルプチュリ（5663m）を登山候補をとっていましたが、その後の研究・検討の結果、ダウラギリ山群のダンプスピーク（6035m）に変更となり、参加者は1年生3名を含む総勢8名での計画で、研究会では活発な意見交換がなされました。

注：研究会参加者（敬称略）

酒井先生（顧問）、山岳会：山田、大竹口、岩井、野邊正、長谷川、現役：長屋、程、藤原、三原、石川、天明、濱田、水谷、今尾、藏本、石川、リモート：山岳会_酒井、現役_吉武

今回の現役海外登山は、2025年8月9日、バダリ10周年記念として神戸大学大阪クラブで開催された海外登山研究会がきっかけで、その時は、現役への情報提供として、山田会長が当会の海外登山の歴史や実施の際の心構えをレクチャーされ、また長谷川からは1984年に実施した現役部員によるパルチャモ登山の事例を紹介しました。その後、10-11月に酒井会員らのHNA主催のネパールトレッキング登山隊に現役の吉武さんが参加するなど機運が高まり、2026年春に現役8名でネパールヒマラヤ登山をおこなう事になったものです。



研究会の終了後は、会場を阪神御影の居酒屋「なだ番」に移動し、顧問の小池先生、OBの尾崎竜平さん、現役の後藤さんらも合流し、忘年会を楽しみました。（残念ながら、研究会、忘年会とも写真を取り忘れましたので掲載できません。）

以上

第七章 山岳部活動報告（2025年度）

穂高岳定着クライミング合宿報告書

文責：長屋(3回生)

日程 9/24～28 メンバー：長屋、程、藤原、石川、吉武

目的：

我が部は長屋、程体制になってから、ここ数年で下火になっていたアルパインクライミング活動を再び活発化させるため、4月より積極的に堡塁岩での練習を重ね、6月にはここ数年なくなっていたマルチピッチ訓練を御在所岳で実施し、ある程度の手ごたえを得た。その集大成として、穂高岳のアルパインクライミング入門ルートである前穂高北尾根、北穂高東稜を登ることになった。なお当初は剣岳が有力視されていたが、長屋が穂高がいいと駄々をこねたため、穂高岳登攀となった。

9/24 0日目

前日まで予定があった長屋は深夜に難波発松本行きの夜行バスに乗り、それ以外のメンバーは鈍行で松本に向かい、近くのカラオケで泊まった。夜行バスの乗り場では、流石松本行というだけあって多くの登山ザックを持った人が待っていたが、ひとりだけ85Lザックにパンパンで、ザイル付きという仰々しい格好していたのです、不審者見るような目つきで周囲から見られた。

9/25 1日目 午前中雨、午後曇り

8:40 上高地—10:40 徳澤 11:20—13:30 本谷橋—15:00 涸沢

本日は上高地から涸沢に行く短い行程なので、朝はゆっくり出発した…というのは建前で、本当は早朝に出発するつもりが、出発一週間前には早朝の新島々発上高地行きのバスは予約いっぱいであったため、朝7時新島々発のバスに乗ることになった。上高地の人気はやはりすさまじいと感じた。

新島々7時発のバスに乗るべく朝6時に松本駅に集合。そこで皆の身なりを見て驚いた。登攀用のサブザックが装備品リストに入っていたが、皆体育着を入れるような簡易なナップザックを持ってきたのだ…今回の山行は不安な出だしとなった。

新島々からバスに乗り上高地へ向かう。上高地の予想以上の奥深さに驚いた。自分の感覚では扇沢のようにもっとまちに近いものだとばかり思っていた。そんなことを考えていると雨模様になり、一時は非常に強い雨となり心配となったが、上高地に着くころには小康状態となっていたため予定通り出発。



たわいのない会話をしながら徳沢方面に歩く、ここで僕は予想していた以上に徳沢までの距離が長いことに気が付いた。とはいえ片道二時間。一瞬で着きそうなものだが、景色が変わり映えしないせいか、長く感じた。



徳沢で休憩中、2回生が徳澤園で美味しいようなご飯が食べられることを発見。みなカレーうどんなどを食べ腹ごしらえした。普段の山行など昼飯さえ食べられないのに、こんなに立派なご飯が食べられるなど流石上高地ならではの豪華な登山である。

その後横尾で登山者ゲートの試験導入中であるところに遭遇。経路確認、装備確認をされた後注意事項を書かれた紙を渡され通過できた。無謀な登山による事故予防として登山ゲート設置には賛同するが、紙はどうせ濡れてごみになるのだから配るのは環境に悪いのではないかと感じた。

低く雲が垂れ込み、雨に濡れて禍々しく黒光りする屏風岩を横目に本谷橋を通過したあたりで雨は急激に悪化した。これにより我々はやる気と体力をそがれペースが落ちた。青ガレに到着するころには、程は完全に遅れをとり、後輩を先に行かせて、程と長屋はゆっくり行くことになった。雨の中でも美しく黄色に染まったナナカマドの木立を抜けるとルリビタキが驚いて飛び去っていった。日本アルプスが秋の到来を告げていた。



その後は無事テント場に到着。テント場の数の多さに驚き、流石涸沢カールだと思った。

出発前は明日より晴れの予報であったが、涸沢にある長野県警派出所の掲示板には明日の午前まで天候が不安定とのこと。計画通りであれば隊を2つに分けて1つは北穂高東稜、もう1つは前穂高北尾根に行く予定であるが、長い北尾根はベストコンディ

ジョンで挑みたいため、明日は全員で出発を後らせたうえで東稜に行くことにした。皆天候を配しながら床に就いた。

9/26 2日目 雨のち晴れ

5:45 涸沢—6:45 取りつきのガレ場—7:35 稜線—9:25 ピナクル—10:15 ゴジラの背—
11:00 懸垂下降点—12:00 北穂高小屋—14:15 涸沢

この日は出発時間を遅らせたためかなり遅い時間に起きる。天候は大雨ではないもののぐずついている。そのせいかなり遅い時間にも拘わらず、多くの他パーティーは動いていない。ただ現状の天候と今後の予報より行けるとこまで行くことを決定した。

6時前に出発し取りつきまではひたすら急登。相変わらず程はペースが遅れ気味だ。2012年に東稜に登攀された先輩方は誤った取りつきから登り、行き詰ってしまっているの、その点に注意しながら取りつきを探す。



7時に取りつき着。取りつきは巨大なガレ場で普通であれば見逃すはずはないが、12年の先輩方は暗い中行動されていたとのことなので納得。ここからは巨大な岩が転がるガレ場をトラバースしていく。道標もなく、正しいルートかどうか心配になるがところどころゴミが落ちており道であると安心した一方、登山者のマナーの悪さを実感した。これを反面教師としたいと感じた。



広大なガレを通過すると東稜基部のガレたルンゼに入る。ここまできると道らしきものは消え自分たちでルーファイする。ルンゼ中央部はガレが酷く。ルンゼの左側の草付きを登る。ルンゼから東稜に乗りこすところはパーティーによりロープを出すところだが、藤原が上手いこと弱点を発見し、ロープなしで抜けるが、ホールドが脆く少々際どい登りであった。

7:30に稜線に上がると風が強い。雨雲は非常に早く動いており、その時は小康状態であったが、いつ本降りになってもおかしくなく、早いところ核心部を通過したいところであった。

東稜は核心部までは稜線の横尾側に斜度が緩く、涸沢側が切れ落ちているため、稜線の少し横尾側をトラバースするように歩く。思いのほか斜度が緩くほぼ台地を歩くことになったので驚いた。



しかし30分ほど歩くと突如切れ落ちた崖が出てくる。どうもトラバースから稜線に戻る道を見失ったようだ。頑張ってみるが一向に稜線に上がる道がわからない。仕方がなく目の前にあるルンゼを登る。思いのほか岩は安定しており簡単に稜線に出ることができた。

稜線に上がったところで急速に天気が悪化し、雨は本降りになったところで核心部のピナクルに到着してしまった。藤原が突破を試みるが、流石にこの状況でここをロープなしでの突破は危ないので藤原を引き返させる。誰がこの状況でリードするか一同大粒の雨が降る中沈黙するが、ここは朝にいけると判断した俺がリードしなければならぬと意を決して登り始める。

ナイフリッジの後ピナクルを少し登り、登りきる前に巻く。レベルは決して難しくない。ロープを出さずに通過するパーティーも少なくない。しかし今は状況が状況。手に汗を握る(といっても最初から濡れているが)ピッチであった。



自分が引いたラインを、後続はフィックスロープのように使って移動。最後程がフォローとなりカムを回収して全員無事通過できた。



次は核心部のナイフリッジ、よく写真で見るところである。ここに来るときには雨は止んでいた。ここも長屋がリードで通過するがナイフリッジの幅が15cm程度しかないため、ナイフリッジにまたがるようにしてじりじりと進んだ。フィックスロープを設置したあとは先と同じ手順で皆ナイフリッジを渡ってくる。最後の程が移動しているときに雲が晴れ、紅葉で美しく黄色に染まった

涸沢カールと大キレットが望むことができ、皆雨の中頑張って来てよかったと感じた。

核心部のあとは20mの懸垂下降である。支点はすでに多くのクライマーによって構築されたものがあったため、強度を確認したのちそれをありがたく使わせていただいた。ただ実際に下ってみるとクライムダウンでもいけないことはないなと感じた。

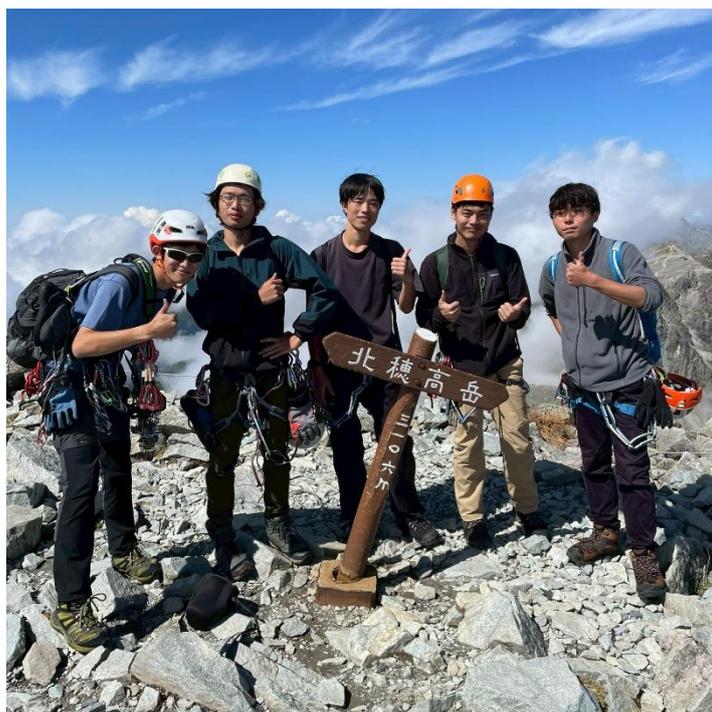
懸垂下降ポイントからは北穂高の山頂が目の前まで迫っていた。気分は1年生の時の夏合宿に剣岳源次郎の懸垂下降ポイントから本峰を見上げるときと一緒だったが、北穂高はその時の剣岳よりはるかに近かった。ここからは山頂に向けてZ字状にルートをとると記録にあったが、歩き始めてものの数分でそのトレースは消え、あとは登れそうな岩やガレ場を適当に登って行った。道なき道を強行突破して行ったためアスレチック感がありとても楽しかった。



30分ほど岩場を登り北穂小屋のテラスに出た。東稜は楽しかったがやや短かったとも感じた。北穂小屋ではご飯が食べられたため、各自パスタや牛丼などを食べる。値段は張るが、頑張った後の飯はうまいのでそんなことは気にしない。昼飯が食べられる山行などぬるいなと自分も食べておいてそんなことを感じた。

昼食後歩いて3分で山頂に到着。山頂からは先ほどまで雲がかかって見えていなかった奥穂高岳、前穂高岳が今はベールを脱ぎ棄てその圧倒的スケールを見せびらかすように聳え立っていた。明日はあれを登るのかと思うと身が引き締まる思いであった。

その後は楽々下山。鎖やハシゴも多いが、先ほどのナイフリッジに比べればなんてことない。しかし昨日この鎖で亡くなった方がおられると涸



沢で聞いていた。実際昨日涸沢は救助隊員などが多数駆け回っていた。なので慎重に下るべきところは慎重に下る。亡くなられた方にはご冥福をお祈りしたい。

14:10に涸沢着。涸沢に降りてからは、各々自由な時間を過ごす。私と石川は張ったテントの近くに大きく上が平らな岩があったので、シュラフにくるまって岩の上で寝た。



本日の夜飯はカレー。藤原が尋常じゃない量の肉を買ってきてくれた。すべて入れるか迷ったが、おいていても腐るだけだと全て鍋に入れ、4lの鍋が肉で満たされたが、とてもおいしかった。最終的に肉しか勝たないということを再認識させられた。

18:30に就寝

9/27 3日目 晴れ

4:00 涸沢—5:30 V,VIのコル—6:20V 峰—6:40IV, Vのコル—8:15IV峰—12:40III峰—
13:00 前穂高岳—16:30 奥穂高岳—17:00 穂高岳山荘—18:30 涸沢

4:00に出発。北尾根のV峰VI峰のコルに向かうが涸沢カールが広すぎるうえ、あたりは真っ暗で進むべき方向がよくわからない。そこで運よくガイドと女性の二人パーティーと出会い、彼らも北尾根に向かうとのことだったので彼らと行動を共にする。しばらくガレ場を進むと斜度もきつくなり、それと同時に踏み後も明瞭になってくる。しかしかなりの斜度に程が遅れる。

やや遅れて5:30にコルに到着。コルは非常に風が強いが、ここで長屋と吉武を大便をしたため他のメンバーは寒い中待つことになった。

大便に思った以上に時間がかかり6:00にV峰に取りつく。特に危ないところはない。V峰登攀中に朝日が昇り、ただでさえ紅葉で黄色に染まる涸沢カールをさらに真っ赤に染めあげた。その姿は美しく、わざわざここに来てよかったなと心の底から感じた。



V峰は他のピークと比べて、全体的に道は明瞭であり登りやすい。6:20頃にはピークに到達した。V峰のピークからは次なる障壁であるIV峰が鎮座し、我々を待ち構えていた。V峰のピークからV,IVのコルへは稜線伝いに下っていく。コルは非常に狭いうえ地面は崩れやすいため、休憩もそこそこに早速IV峰に取りついた。



IV峰は踏み後などない。ただ登れそうなところを登っていく。しかしここで大きなミスをする。本来IV峰上部は険しいため、途中で左にトラバースして、左の緩やかな斜面から登るのだが、先の二人パーティーが稜線づたいに直登したため、われわれもそれに着いていったところ、進退窮まってしまったのだ！正しいルートは事前に皆で確認したにも関わらず、他のパーティーが行っているから行けるだろうという浅はかな判断でとんでもないところに来てしまった。幸い、藤原がルートを発見したが、半歩でも踏み外すと300m下まで何もないかなり際どいトラバースをセーフを取りながら行う羽目になった。この

ようなヒヤリハットから、他の登山者のトレースを脳死で追うのではなく、しっかり自分が今どこにいるのか把握し、自分でルーファイしなければならないと肝に銘じた。

上記のようなトラブルもあり、IV峰に到着したのは8:15とかなり遅れてしまっていたが、エスケープもないため、このまま進むほかない。IV峰からIV、IIIの科尔へは緩やかな下りである。

最後の難関。III峰に取りつく。パーティーを程、石川ペアと、長屋、藤原、吉武トリオにし、御在所マルチピッチ訓練の時と同じ分け方することで素早く突破をねらう。しかしここは1ピッチ40mと、普段練習している堡壘岩よりピッチ長さが長く、クライマーとビレイヤーの意思疎通が普段より図りにくかった。また御在所よりピッチを切るテラスがかなり小さく、次のピッチまでの準備がおもったより大変である。さらに、ソロの方に順番を譲ったため、思いのほか時間がかかった。しかしピッチごとの難易度は低く、ルンゼの中を行くため、さほど高度感もなく、普段の練習通りにクライミングすることができたと思う。



6ピッチのクライミングのあと、III峰の頂に立つ。III峰までればようやく本峰も顔を見せた。II峰までは5分とかからなかった。ただ、II峰からの懸垂下降ポイントは支点構築する場所がナイフリッジの上であり、作業のしにくさから支点構築に時間がかかってしまったのは反省点である。

II峰から懸垂下降すれば、あとは登れそうなところを適当に登り、9時間にわたる登攀の末13時にだたっぴろい前穂高の頂に立った。山頂からは槍の美しく天を突く姿が見えたが、間もなく雲のベールがかかった。なお13時は完全なる遅れであるが、このままどこかでピバグするのもそれはそれでリスクが高く、最終的にヘッテン下山覚悟で涸沢まで帰ることにした。



しかし目の前に立ちはだかるのは吊尾根とその奥にそびえる奥穂高。頑張っって吊尾根を進むが程と長屋は連日登攀の疲労が蓄積されスピードが落ちていたが、吉武と石川は平気そうであった。来年の夏合宿は二人が大いに活躍してくれることであろう。



かれこれそうやって一時間半登った末にようやく奥穂高の頂上に到着した。奥穂高岳からは写真でよく見るジャンダルムが、その飛騨尾根のあり得ない角度を我々に見せつけており、よくあんなところに行く人がいるもんだと感心した。また頂上にて吊尾根をずっと抜きつ抜かれつで登ってきた自動車メーカーにお勤めの若い二人組の方とお話し、理系なら自動車メーカーに就職しないかと熱烈にお誘いいただいた。今はどこも技術者不足らしい。

とはいえ時刻は4時半。本来なら天場に到着している時刻であり、傾いた日が急かすように頬を強く照らしてくる。写真撮影もそこそこに下山を開始したが、しばらくして後ろを振り返ると藤原の姿が見当たらない。どうもザックごと頂上に忘れて取りに戻ったらしい。意味が分からない。小物を忘れてきたならわかるが、普通ザックなしで下山したらその違和感に10秒もせずとも気づくはずである。皆あきれて待つ気にもなれず、穂高岳山荘までおり、そこで待つことにした。山荘にてかわいいTシャツが売っていたが、高かったので吉武と買うべきか否か議論すること15分、藤原が来たため、急いでザイデングラードを下ることにした。ちなみにTシャツはまたの機会にということで、バッジのみ購入した。

時刻は17時。9月の暮れとあって、陽はすでに涸沢岳の後ろに隠れた。ザイデングラードは下山時の事故が多いところである。慎重に下っていると、特に危ないと感じるところはないが、道は左に右にと曲がるので、気が緩むと安易に道を見失い滑落

しそうだと感じた。慎重かつ迅速な下山によりコースタイムの半分の時間でザイデングラードの基部に到着した。ここで前穂高の山頂で写真を撮ってもらった外国人2人組と再会した。てっきり穂高岳山荘で泊まるものだと思っていたら、涸沢で泊まるらしい。こんな暗い時間に危ないと思ったが、それは自分たちもそうである。タイムマネジメントは私のリーダーとしての大きな課題だと感じた。

基部からはヘッテンを付けて行動し18時半に涸沢に到着。久々の14時間半行動に一同疲れて一刻も早く就寝したかったが、明日何時のバスに乗るか議論せねばならない。ここで発覚したのが、明日昼から程が大阪でバイトがあるというのだ！どれだけ早く行動しようが昼に松本着である。なぜ間に合うと思ったのか？涸沢は電波状況も悪く時間も遅かったためバイト先に連絡できず、明日ドタキャンするということになった。明日の上高地発のバスの予約だけ行いその後皆倒れるように就寝した。

9/28 4日目 快晴

7:00 涸沢—7:30 本谷橋—8:30 横尾—9:30 徳澤—11:30 上高地

この日は下るだけなので遅めに起床。紅くMorgenrotに染まる涸沢岳を眺めながら歯磨きをする。なんて贅沢な歯磨きであろうとこの貴重な経験を噛みしめるように歯を磨いた。とはいえ誤って歯ブラシを噛まないように気を付けて歯を磨いた。6時半に涸沢出発。一日目はあれほどきつく、長く感じられた登りが、下りでは嘘のようにみるみる標高を下げていく。登山ではよくあることだが、今回は登りで悪天候とあっただけに余計にそれが感じられた。往路では魔王が住む洞窟でありそうな禍々しく思われた屏風岩も今となっては天にも届きそうな立派な壁に見え、ずいぶん昔に訪れたスイスの情景を思い出した。



3時間ほどで徳澤に到着。行き同様、みな徳澤園でアイスを食べた。そして石川は明神でもアイスを食べていた。よくもお腹を壊さないもんだと感心した。その傍らで程は上高地でハイキングしているかわいい女の子たちを舐め回すように見ている。それを引いた目で見ると他のメンバー。しかし上高地は他の山と異なりかわいい子が多いのは事実であった。

上高地には 11:30 に着。ここに 4 日にわたる俺らの夏合宿が終わった。
ところで上高地は観光客であふれかえり、その中に汗と泥にまみれた我々は不審者以外の何物でもなかった。人の住処に帰ってきて、風呂にするか飯にするか迷ったが、流石に風呂を優先した。バス停から離れた上高地温泉ホテルで温泉を堪能する。これがめちゃめちゃカラダに染みる。これだから登山はやめられない。

風呂上がりに程はビールをカチこみ、その勢いでバイト先に休みの連絡を入れていた。そのあと酔ったせいで松本に着くまでずっと「うああまじでやばいよお」などとぶつぶつぶやいていた。

本山行は我々の普段の練習や山行での経験を実戦レベルに持っていった点で大きな戦果を挙げたが、一方でルートファインディングやタイムマネジメントなどの課題もたくさん見つけることができた意義ある山行であった。

顧問の先生や OB の方々にあたってはご心配ご迷惑おかけしますかと思いますが、これからもよろしくお願いします。



第八章 事務局報告（総会・理事会・会計・予算）

2025年度神戸大学山岳会定例総会議事録

事務局

開催：2025.4.19 14:00～17:00 神戸大学大阪クラブ（文中敬称略）

出席者（名誉会員）山形裕士、居谷千春、酒井裕規、（特別会員）石川毅、（正会員）瀬野鋼太郎、坂本淳、松村政則、侯慧開、（理事）山田健、大竹口誠治、長谷川浩、岩井正隆、野邊久美（監事）森長敬、（現役）後藤潤、長屋徹也、程研埜、藤原暖己、石川裕鳳、
＜Web参加＞松村健司、計20名：出席会員14名、Web参加会員1名、準会員5名
（委任状11＋出席・Web15＝計26名（開催案内128名の1/5超で総会成立）

- 1 会長あいさつ 山田会長
 - 2 議事（議長：事務局長）：各議案とも満場一致で承認
 - (1) 2024年度活動報告（第1号議案） 事務局長
 - ① ACKU-News48号の発行（2024.3）
 - ② 2024年度定時総会開催（対面・Web併用開催）（2024.4.20）
 - ③ 例会山行（第255、256、257、258回）
 - ④ 理事会（第107、108、109、110回）
 - (2) 2024年度決算報告（第2号議案） 事務局長・監事
 - (3) 2025年度活動計画（第3号議案） 事務局長
 - ① 例会山行（第259、260、261、262回）
 - ② ACKU-NEWS No49号の発行
 - ③ 海外登山研究会（案：バダリ遠征10周年記念研究会の開催）
 - ④ 検討課題・シェルピカリ50周年・ケラカリ40周年行事（案：記念総会の開催）
 - ・会費自動引落としシステム導入について
 - ・会報郵送費の軽減策（案：会費滞納会員への郵送停止）
 - ＜議事＞ 各課題とも取り組む方向で具体化推進を承認
 - (4) 2025年度予算案（第4号議案） 事務局長
 - (5) 名誉会員推薦 酒井裕規 准教授（副部長就任）
- 3 報告事項：物故会員（名誉会員 北口博教氏）、退会会員（前田精三）
- 4 懇親会（進行 野邊）
 - 報告1 現役活動報告（長屋徹也）
 - 報告2 ネパールトレッキング（大竹口誠治）出席者近況報告

以上

2025年 定例総会案内への出欠連絡と近況報告（2025.4）

お名前	会員番号	3. 近況報告、事務局への連絡など
山形裕士	名誉	3月にアメリカの国立公園をいくつか回りました。
朝日教之	特別	いつもご連絡頂きありがとうございます。近郊の山の花の写真など撮っています。今後ともよろしく願います。
桜井勝之	特別	山岳会のさらなる発展と、新たな未知への挑戦を期待しております。
酒井利直	334	11月にネパールのYala peak5,500mに行く予定です。旅行日数は2週間程度です。
直木嘉也	231	住所変更あり（以下非開示）
東郷賢治	258	昨夏 瑞宝双光章を受章。六甲山のボランティアも退会しました。貸農園でキャベツを育てています。皆様のご健康を記念します。 （例会山行、参加したいですネ、とのコメント付き）
豊田寿夫	261	4月よりaddressをtoyoda32412@gmailに変更します。よろしく
柏田紘一	277	85歳になりました。1年前の年末に足を痛め入院。退院のあとリハビリをしています。月水金の3日、朝9時から12時迄です。良好で暮らしています。
小谷辰雄	289	足腰が弱っています。
原田 聰	295	高齢のため、山行等の参加ができません。 長くお世話になりましたが、退会させていただきます。よろしく願います。
瀬野鋼太郎	322	所要があり15時より参加予定
居谷千春	333	本日ACKUニュースを受け取りました。ありがとうございます。
岩井正隆	344	仕事の都合で15時30分頃に会場に到着しますのでよろしくお願いします。
吉原敏明	349	変わりなく気ままに過ごしています。
片山博仁	356	元気に孫のお世話しながら暮らしております。まだ仕事は現役ですが、体は故障だらけで使い物になりません。
小宮勇介	389	三田～三宮を歩いて農学部同窓会に参加したり、三田～深江を歩いてACKU新年会に参加。大阪の大正区にある関西沖縄文庫まで自転車で往復するなど。25年4月28日（月）19:00～三田市総合文化センター郷の音ホール小ホールで藤木志いさ一独演会をします。料金は2000円。ご参加ください。沖縄戦で豚がいなくなったので沖縄からハワイに移民した2世が豚を贈った話。よろしくおねがいします
城間一輝	423	1月に1回、会社の人と近郊の山に登っています。体重が増加し、身長も少し伸びました。
吉井 修	902	前日の4/18より東北ならび東京へ行く日程としており、出席できません。次の日本山岳会の第7回GHTは6月15日頃～8月10日頃の予定で、パキスタン（カラコルム）になります。

第 110 回理事会 議事録

2025 年 3 月 15 日 (土) 14:00~16:00 @神大白鷗寮 (文中敬称略)

事務局

1. 参加者：理事_山田、大竹口、岩井、長谷川、監事_森長、事務局_城間
(欠席：藤川、野邊久、野邊正、香山、金井良、香山、俣)
<理事 8 名中、4 名出席+4 名委任状提出 2/3=6 名以上で理事会成立>
2. 議 事
 - ① 2025 年度総会開催の準備
 - ・開催：4 月 19 日(土) 14:00-15:00、懇親会 15:00-17:00、会場：神戸大学大阪クラブ
 - ・議事内容の確認(詳細略)
 - ・提案；会費滞納者への会報郵送停止(Data 配信のみ)、自動引落対応の導入検討
 - ② 今後の準備と日程
 - ・出欠確認：ネット集計、ハガキ確認、会計監査報告、当日資料作成
 - ③ 会費自動引き落としシステム導入の件
 - ・導入ステップ(総会での意見聴取)
 - ・候補：リコー、会費ペイ、大阪ガスファイナンス、hakomono 等
 - ・手数料 3.5%=175 円/件@5000 円+管理 100 円=275 円等 (50 件で 13750 円)
 - ④ ヘリテージ基金 現役支援給付開始
 - ⑤ パダリ峰遠征 (2015. 10) 10 周年対応

以上

第 111 回理事会 議事録 (案)

2025 年 6 月 1 日 (日) 20:00~ リモート開催 (文中敬称略)

1. 参加者：理事 山田、大竹口、岩井、長谷川、野邊正、藤川、事務局 城間
(欠席：野邊久、香山、金井良、森長、俣) <理事 8 名中 6 名出席で、理事会成立>
2. 議事
 - ① 過去の遭難対策研究委員会資産清算の件
 - ・振込履歴の有った会員への通知文書案を作成したが、記載内容への訂正意見があり、再度長谷川にて文書作成(理事会後、新たな文書案を作成、理事会メンバー承認を得て 6/9 発行)
 - ② 年会費自動引落とし(銀行口座・カード)導入対応の件
 - ・長谷川より総会での協議結果を確認(会費ペイ、リコーリース等)。
 - ・業者への銀行口座登録は情報漏洩リスクがあるため、会として会員にそうした依頼をすべきではない、との意見(岩井)となり、この点を踏まえ、検討を継続となった。
 - ③ 山岳会郵送費用軽減について ⇒ 次回送付実施まで継続検討
 - ・案) 会費滞納会員への郵送停止(メール登録会員にはデータでの会報配信)
 - ・案) 信書扱い郵便の低減(会費案内・総会案内を原則メール、希望者のみ郵送)
 - ④ パダリ遠征 10 周年海外登山研究会準備(8 月 9 日(土) 予定)
 - ・長谷川にて会場予約。案内文は山田が作成し、メール登録会員全員に配信とする。
 - ⑤ 例会山行(雷鳥沢)の件 参加者、日程等再確認
 - ⑥ 山岳会ホームページ担当の件
 - ・井上会員からの引き継ぎが必要。長谷川にて香山理事と協議し対応する事。
 - ・対応スキルは別として、野邊正、大竹口、などでの対応を検討。
(後日、香山と井上会員で連絡を取り、引き継ぎ実施済みを確認)

以上

第 112 回理事会 議事録

2025 年 9 月 6 日（土） 20:00～ リモート開催（文中敬称略）

事務局

1. 参加者：理事_山田、大竹口、岩井、長谷川、野邊正、藤川、事務局 侯
（欠席：金井、森長、野邊久、香山、城間）＜理事 8 名中 6 名出席で理事会成立＞

2. 議 事

- ① 酒井会員からのヘリテージ基金受領（8/15 30 万円）と拠出の件
 - ・酒井会員所属の HNP 企画の「ネパールトレッキング登山」参加の現役 2 回生吉武裕登部員に対し、酒井会員が現役参加費用の半分を提供する、との事で、使途指定でのヘリテージ基金への寄付となったもの。拠出を承認。
- ② 来年春の現役ネパール登山について（支援）
 - ・現役登山の計画確認&アドバイス、資金援助などをサポートする体制を取ることにした。メンバーは、ネパール事情に詳しい酒井さん、吉井さん、理事会からは、大竹口、岩井、長谷川を必須とする。都合に応じ山田会長も参加とし、他メンバーにも連絡する。
- ③ 「ACKU-News 49 号」発行準備（省略）
- ④ 一般会計の状況と今後の対応について（会費自動徴収の件含む）

以上

第 113 回理事会 議事録

2025 年 12 月 21 日（日） 20:00～リモート開催（文中敬称略）

事務局

1. 参加者：理事 山田、大竹口、岩井、長谷川、藤川、監事 森長、事務局 侯
（欠席：金井、香山、野邊正、野邊久、城間）＜理事 5 名出席で理事会成立＞

2. 議 事

- ① 役員改選（次回総会での選出、理事会にて案作成）（総会選出事項のため記載省略）
- ② 現役海外登山への援助
 - ・現役の来春ネパール登山（計画：ダンプス峰 6035m、参加 8 名、予算案 512 万円）
 - ・ヘリテージ基金（東郷会員 若手海外登山援助指定金 100 万円）の支出を本理事会で決議（承認）、現役の資金計画に応じ早期の支払いを実施（担当 岩井）。
 - ・山岳会員への募金は、現役の計画書・趣意書（山岳部長名）をもとに、現役が主体的に実施するものとし、山岳会長名での支援要請等の添え書きで対応。現役部員が、山岳会員に支援をお願いする姿勢を持つことが重要。
- ③ 今後の日程と次回総会準備
 - ・理事会 3/14（土）ACKU_News と総会案内の発送作業含め深江キャンパス予定
現役海外登山支援関連で必要があれば 1-2 月にも開催検討
 - ・総会 4/18（土）15-17 時 神戸大学大阪クラブ（予約済み）
前半を定例総会、後半を「シェルピ 50 年クーラカンリ 40 年」の記念イベントとして開催（当時の写真や映像投影、現役の海外登山報告も）
- ④ 会費関連：自動徴収対応の準備を進め、新年度からの運用を目指す（担当 岩井）

以上

第 114 回理事会 議事録

2026 年 2 月 21 日（土） 20:00～リモート開催（文中敬称略）

事務局

1. 参加者 : 理事 山田、大竹口、岩井、長谷川、野邊正、野邊久、事務局 城間、侯
(欠席: 藤川、香山・委任、金井、森長) <理事 6 名出席で理事会成立>
2. 議 事
 - ① 「シエルピカンリ 50 周年クーラカンリ 40 周年の会」開催準備
 - ・ 4 月 18 日（土）16:00-18:00 定例総会後に開催。現役を除き会費 6000 円。
 - ・ 開催案内や式次第等を協議。主に居谷名誉会員、山田会長、長谷川で分担し作業に当たることとした（特に山岳会会員以外の大学関係者への連絡など）。
 - ② ヘリテージ基金給付の承認
 - ・ 現役ネパール登山給付 30 万円（寄附会員からの使途希望を受け理事会提案）を承認
 - ・ 現役装備支援 2 件¥530,750-（ネパール登山装備含む）確認（メールにて承認合議済）
 - ・ 留意事項: 基金への寄附金受け入れ後は、使途指定のあった寄附の金額枠は管理するものの、あくまで総額の使途判断と出納を理事会で管理。従って、支出時に「〇〇会員からの寄附」のような表現はせず、使途指定の個人へのお礼連絡等も行わない事を確認。
 - ③ 総会準備（略）
 - ・ 会費自動引落とし導入は新年度からとし、郵送書面には紹介するものの、登録案内は後日メール配信とする。登録にはメールアドレスが必須となる旨を今回の書面で記載しておく。
 - ・ 会費滞納者への滞納金請求について協議。会則の変更を行わない限り、理事会判断で 5 年より前の会費免除処置等を行うような対応はできない旨を確認。滞納案内書式が煩雑で見にくい点については、検討の余地ありとなった。
 - ・ 例会山行担当理事として、新年度理事就任予定の城間が対応する事とし、春の氷ノ山例会の幹事を山田から引き継ぐこととした。
 - ④ ACKU-news49 発行・発送準備
 - ・ 5 年以上の会費滞納者に対しては、本年度より会報の送付を停止し、発行部数と郵送費の削減を実施する事とした。ただし、納入が期待される会員にはできるだけ納入喚起も併用。
 - ・ 総会案内などは信書扱いとなるため、郵送はレターパックライト及び定形郵便を使用する。
 - ・ 新入会員の登録推進や連絡先不明会員の搜索を、事務局の侯にて対応とした。
 - ⑤ 今後の予定
 - ・ 次回 3/14（土）14:00 ACKU-news&総会案内発送作業と理事会（総会準備確認等）を深江キャンパスで開催。顧問の酒井先生の協力を得て、会報受理と作業・理事会場所を借用。

以上

2024年度会計決算報告

事務局長 長谷川浩 理事(会計) 岩井正隆

(2024.4.1~2025.3.31)

1. 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
前年度繰越金	153,947	153,947	0
会費収入	450,000	265,905	-184,095
協力金/寄付金収入	0	159,450	159,450
雑収入(預金利息)	100	32,586	32,486
計	604,047	611,888	7,841

会費: 33名(33件) 協力金・寄付金: 山口さんの協力金100,000円他8名(10件)

雑収入: 利息228円, Kindle電子書籍収入3,908円(2167円デジタル化費用: 寄付), 岡市さん図書売上8,000円, 総会余剰分20,450円

<支出の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
事務・通信・振込手数料	70,000	5,892	-64,108
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	150,000	156,315	6,315
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	0	0	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	0	-5,000
雑費	50,000	15,000	-35,000
次年度繰越金	149,047	254,681	105,634
計	604,047	611,888	7,841

ACKUニュース 内訳 製本・手数料 101,420円 / 発送費 54,895円

2. 特別事業基金

(単位:円)

費目	24年3月現在残高	25年3月現在残高	増減
「山と人」積立金	488,090	588,368	100,278
海外登山準備積立金	400,000	400,000	0
千本杉ヒュッテ維持管理金	96,208	54,398	-41,810
総計	984,298	1,042,766	58,468

「山と人」収入: 積立金 100,000円、利息 278円

海外登山準備積立金 0円、

千本杉ヒュッテ維持管理金

収入: ヒュッテ使用協力金 28,000円、管理業務謝金 35,000円、利息13円

支出: 備品購入 9,420円、発電機修理18,018円、整備作業食料費 17,901円、通信費4,209円、テラス修理費55,275円

3. 遭難対策基金

(単位:円)

費目	24年3月時点残高	25年3月現在残高	増減
遭難対策基金	2,517,170	2,517,470	300

利息 300円

4. ヘリテージ基金

(単位:円)

費目	24年3月現在残高	25年3月現在残高	増減
ヘリテージ基金	2,650,095	3,686,694	1,036,599

収入: 岡市敏治氏: 250,000円、東郷賢治氏: 1000,000円、利息: 1,799円

支出: 現役装備補助: 200,200円、遠隔理事交通費補助: 15,000円

●詳細は次頁の貸借対照表・財産目録・活動計算書を参照ください。

※一般会計: 「三井住友銀行」東加古川支店普通預金にて管理

※「山と人」積立金、海外登山準備積立金: 「みなと銀行」春日野支店普通預金にて管理

※千本杉ヒュッテ維持管理金: 「三菱東京UFJ銀行」東神戸支店普通預金にて管理

※遭難対策基金: 「みなと銀行」春日野支店普通預金にて管理

※ヘリテージ基金: 「三井住友銀行」神戸営業部(店番号500)普通預金にて管理

【監査報告】

以上、監査の結果 適正且つ妥当であることを認めます。

2025年 4月 9日

監事

監事

金井 良碩

森長 敬

2024年度貸借対照表・財産目録・活動計算書

(一般会計)

貸借対照表・財産目録

科目	金額	預け先
普通預金	254,681	三井住友銀行
流動資産合計	254,681	
資産合計	254,681	
負債合計	0	
前期繰越正味財産	153,947	
当期正味財産増減額	100,734	
正味財産合計	254,681	

活動計算書

科目	金額
会費収入	265,905
協力金収入	159,450
雑収入	32,586
収入計	457,941
事務・通信・振込手数料	60,787
山岳部活動援助金	50,000
ACKUニュース	101,420
「山と人」積立金	100,000
ヒュッテ補修費	0
海外登山準備金	0
兵庫県岳連年会費	15,000
日本山岳会年会費	15,000
ホームページ管理費	0
雑費	15,000
支出計	357,207
差し引き	100,734

雑収入の中のKindle電子書籍内訳

科目	金額
収入	3,908
収出	2,167
収出=0	
差し引き	3,908

デジタル化費用(寄付)

(特別事業基金)

科目	金額	預け先
山と人積立金	588,368	みなと銀行
海外登山準備積立金	400,000	みなと銀行
千本杉ヒュッテ維持管理	54,398	三菱UFJ銀行
資産合計	1,042,766	
前期繰越正味財産	984,298	
当期正味財産増減額	58,468	
正味財産合計	1,042,766	

活動計算書

科目	金額
山と人積立金	100,000
利息収入	278
海外登山準備積立金	0
ヒュッテ使用協力金	28,000
管理業務謝金	35,000
利息収入	13
収入計	163,291
ヒュッテ備品購入	9,420
発電機修理	18,018
整備作業食料費	17,901
通信費	4,209
テラス修理費	55,275
支出計	104,823
差し引き	58,468

(遭難対策基金)

科目	金額	預け先
遭難対策基金	2,517,470	みなと銀行
資産合計	2,517,470	
前期繰越正味財産	2,517,170	
当期正味財産増減額	300	
正味財産合計	2,517,470	

活動計算書

科目	金額
利息	300
収入計	300
支出	0
差し引き	300

(ヘリテージ基金)

科目	金額	預け先
ヘリテージ基金	3,686,694	三井住友銀行
資産合計	3,686,694	
前期繰越正味財産	2,650,095	
当期正味財産増減額	1,036,599	
正味財産合計	3,686,694	

活動計算書

科目	金額
岡市敏治基金収入	250,000
東郷賢治基金収入	1,000,000
利息	1,799
収入計	1,251,799
現役装備補助	200,200
遠隔理事異動補助	15,000
支出	215,200
差し引き	1,036,599

用途: 現役活動費・遠隔理事異動補助
用途: 海外遠征補助

神戸大学山岳会

2025年度予算(案)

(2025.4.1~2026.3.31)

1 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	24年度予算額	25年度予算案	増減
前年度繰越金	153,947	254,681	100,734
会費収入	450,000	450,000	0
雑収入	100	100	0
計	604,047	704,781	100,734

<支出の部>

(単位:円)

費目	24年度予算額	25年度予算案	増減
事務・通信・振込手数料	70,000	70,000	0
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	150,000	150,000	0
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	0	0	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	5,000	0
雑費	50,000	50,000	0
予備費(次年度繰越金)	149,047	249,781	100,734
計	604,047	704,781	100,734

<「山と人」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	588,368		588,368
当該年度積立金	100,000		688,368

<「海外登山準備金」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	400,000		400,000
当該年度積立金	0		400,000

<千本杉ヒュッテ維持管理金>

(単位:円)

	収入	支出	計
前年度繰越金	54,398		
ヒュッテ使用料	35,000		
管理業務謝金	35,000		124,398
食料費等補助金		10,000	
備品購入費		60,000	
予備費		54,398	124,398

< 編集後記 >

ACKU news49号は、4年連続の発行となりました。2024年4月から、会長・副会長・事務局長等が再選となり、理事が一部交代しました。

会報の中でも記載しておりますように、今年の3月に山岳部のネパール・ヒマラヤと登山隊が計画されています。無事成功して、4月の総会で報告できることを期待しています。又、岳人に「山と人」と「ACKU-NEWS」が紹介されました。アナログの会誌を取り上げて頂いたことに感謝すると同時に、会誌担当として、やりがいを感じました。会誌担当も、10年目になりましたが、編集内容等につき、忌憚のないご意見を頂きたい。

2025年度の山岳会のイベントとしては、前年度同様、特になく、2025年度に実施された会員の海外及び国内での個人活動記録及び新型コロナ明けで復活した山岳会の例会山行（数が少ないですが）を掲載しております。個人山行をされた方々から数々の紀行文を投稿して頂きました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。

ACKU ニュースは、経費削減のため、すべてモノクロ印刷となっておりますが、ACKUのホームページにアクセスして頂ければカラーの写真もご覧になれるようにしております。

今後も、例会山行記録の掲載だけでなく、新執行部の活動方針である①海外登山への機運を醸成②他団体との交流を促進③山岳部活動への支援拡大④ヒュッテの活用促進⑤財政基盤の強化に沿った記事を掲載して行きたいと思います。

また、若手・中堅・熟年各OBからの積極的な寄稿をお願い致します。特に、今後は、若手OBの投稿に期待したいと思います。

個人的には、国内の山では、70歳までに百名山を達成すべく、昨年は北海道の十勝岳を登りましたが、黒岳の途中の下りで足首を捻挫したため、その後の山行は計画通りいかず、薬師岳も八甲田山の天候に恵まれず、今年度以降に持ち越しとなりました。残り19山を70歳台で達成すべく、山行計画を立てています。

今後も機会があれば、ネパールへのトレッキングへ行きたいと考えています。

2026/2/28 大竹口誠治 記



1975年、大学2年生の秋に広石さんと坂本君とで奥又白谷に入り、前穂高東面の岩登りを楽しんだ。10月10日に初冠雪がありきれいだったが、その日は上部の岩登りは諦めざるを得ず、仕方なく中又白谷を登った。

2025年、甲南山岳会が創部百年ということで、「甲南ルート」がある北尾根IV峰正面壁を入れた絵を、50年前を思い出し描いて記念に贈った。

ACKU-news 49 発行日 : 2026年3月14日

発行 : 神戸大学山岳会・山岳部

発行人 : 大竹口誠治

編集長 : 大竹口誠治 編集委員 : 小林功、近藤昂一郎

原稿送付先 大竹口誠治 〒338-0011 埼玉県さいたま市中央区新中里 1-9-14

E-MAIL: 6824vgdn@jcom.zaq.ne.jp

小林 功 〒197-0823 東京都あきる野市野辺 508-11

E-MAIL: charin8458@gmail.com

近藤昂一郎 351-0104 埼玉県和光市南 1-22-8-2

E-MAIL: k.kondo331@gmail.com

本誌 ACKU-news は神戸大学山岳会山岳部の内部的機関紙として発行しています